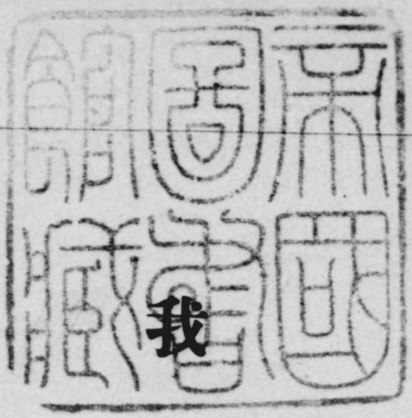
312.34
H77a



極秘

我が闘争

第二卷上

東亞研究所

秘 1
914

序文

今般我東亞研究所はヒットラー總統の有名な著書『マイン・カンプ』を完譯し、こゝにそれを刊行するに至つた。

何故當研究所がかゝる事に着手したかと云ふに、それは當所内の特別第一調査委員會に於て政策施設を研究する上に是非必要であるからで『マイン・カンプ』を讀むことなしに現時のナチスの一切の政策を了解することは不可能である爲めである。

今日迄我國に於ても『マイン・カンプ』の飜譯は若干試みられたが、其の記述中日本に關する部分が今日の日獨關係上に面白からぬ點がある爲めに、其の完譯は世上に紹介されず、謂はゞ抄譯の程度に過ぎなかつた。素より日獨の良好なる關係を維持する爲めに如上の注意が必要であることは云ふ迄もなく、從つて

全譯を公刊することは避けねばならないが、さりとて此れを全譯して研究上の資料にすることは毫も差支ない許りか、さうする事が日獨兩國民の心からの理解提携に却つて役立つ事等が有る可きを自分は信ずるのである。

此の意味に於て當所はこゝに『マイン・カンプ』の完譯を遂げ、此れを非公表の刊行物として印刷に附した次第で、偶〻本書を手にする人の誤解なからんことを切望する次第である。

昭和十七年八月

東亞研究所　副總裁　大藏公望

（前卷所載）

凡例

本書第二卷上は一九三九年發行の第四十四版を參照しつゝ一九二七年發行の第一版に據つて其の第一章乃至第八章を譯出したものである。初版と新版とを比較するに、第二卷では、文章の構造に於ては勿論、單語に於てすら第一卷に見るほどの相違もない。極く少數の相違の中、特に際立つたものに就いては夫夫其の章末に註記して置いた。

註は總て譯者の附したものである。

參考に使用した英、佛、伊、各譯書に就いては第一卷上の凡例に述べて置いた。

特別第一調査委員會

河合哲雄

第二卷　上　目次

序　文……一
凡　例……一
第一章　世界觀と黨……一
既成政黨の『政綱委員會』（二）――國民の選良（五）――マルクス主義と民主主義（八）――世界觀と世界觀との戰ひ（一一）――『民族主義』（一三）――宗教感情から不動の信仰へ（一六）――民族感情から政治的信念へ（一八）――政治的信念から鬪爭團體へ（一九）――人種と人格とを認めぬマルクス主義（二一）――人種と人格とを認める民主主義（二三）――自然淘汰（二四）――黨の結成（二五）
第二章　國　家……二九
國家觀の三類（二一）――誤れるドイツ化（二二）――ドイツ化し得るものは土地だけ

（四〇）——國家は國家のために存在するものにあらず（四一）——高等な文化の存立の要件は民族（四五）——國民社會主義の國家觀（四八）——國家の良否を判別する標準（四九）——人種分裂の結果（五三）——ドイツ國民の使命（五八）——國家は生存競爭に使用すべき武器（六一）——世界の歴史を作るものは少數者（六五）——雜種の衰滅（六四）——自然の行ふ更生作用（六六）——混血の危險（六八）——民族主義の國家と種族の衛生（七一）——純粹な人種の植民地（七七）——賴みにするはドイツの青年（七九）——ブルジョアの無力（八〇）——民族主義國家の教育方針（八三）——競技の目的（八八）——自信の暗示力（九一）——自慢や見榮をも教育に利用せよ（九四）——學校時代と軍隊時代との中間の青年の監督（九六）——軍隊は最終最高の學校（九八）——品性の陶冶（九九）——沈默寡言の教育（一〇一）——責任觀念の涵養（一〇五）——知育の方針（一〇九）——詰め込むな（一一一）——語學教習の方針（一一三）——歴史教習の方針（一一四）——一般教育と專門教育（一一八）——修身教育（一二〇）——流行の愛國教育（一二三）——國民の矜持の涵養（一二八）——狂熱的で排他的な愛國主義を恐れるのは無氣力であるため（一三一）——人種觀念の涵養（一三二）——國家は人物を選擇せよ（一三五）——加特力教會の魅力（一四四）——勞働の價値（一四七）——報酬の差別（一五三）——理想と現實（一五四）

第三章　國家所屬者と國民……一五八

國民となる方法（一五八）——國民と國家所屬者と外國人（一六二）——國家の主人は國民

（一六四）

第四章　人物本位と民族主義の國家觀念……一六六

アリストクラシーの原則（一六八）——人物と文化の進歩（一七一）——人物の價値（一七三）——多數決主義（一七七）——マルクス主義は人物の價値を認めず（一七七）——制度に於ても政體に於ても最も良い國家（一八一）——諮問機關と責任を負ふ議長（一八二）——國民社會主義運動と理想の國家（一八五）

第五章　世界觀と組織……一八七

闘爭と批判（一八九）——世界觀は竝び立たず（一九一）——政黨は妥協を好む（一九三）——新しい世界觀を奉ずる團體（一九五）——指導と服從（一九七）運動の綱領（二〇〇）——國民社會主義と民族主義の理念（二〇九）

第六章　國民社會主義ドイツ勞働黨創立當時の闘爭と演說の意義……二一三

有害な宣傳に對する闘爭（二一五）——時流に逆つて（二一七）——將來のために邁進せん

（二二）――演説の經驗（二二）――媾和條約に關する啓蒙（二四）――舌の力は筆の力に優る（二二八）――マルクス主義が勢力を得たのは辯論のお蔭（二三四）――演説の成否は心理上の條件に依る（二三八）――辯舌の力と革命（二四二）――演説家として見たペートマンとロイド・ジョージ（二四四）――演説會の必要（二四九）

第七章　赤色戰線に對する鬪爭……二五三

ブルジョア政黨の演説會（二五三）――國民社會主義者の演説會（二五九）――不審の眼で見られたポスターの赤色（二六一）――マルクス主義者のしどろもどろな戰術（二六二）――敵の方で我等の事を廣告してくれる（二六六）――不法な警察の慣行（二六九）――心理を正しく洞察せる司會（二七二）――マルクス主義者の演説會（二七三）――ブルジョアの演説會（二七五）――國民社會主義者の警備團（二七八）――象徴の意義（二八二）――新舊の黑赤金（二八五）――新舊の國旗（二八七）――國民社會主義ドイツ勞働黨の黨旗（二八九）――國民社會主義の象徴（二九四）――ツィルクース・クローネの第一次大會（二九八）――相次ぐ演説會（三〇六）――毆込みの失敗（三一五）――『演説會を續行します』――（三一七）

第八章　強い者は獨りでゐる時が最も強い……三一九

運動の優先權（三二〇）：爭覇（三二二）――オーストリアとプロイセン（三二六）――民族主義戰線分裂の原因（三三二）――聯盟（三三八）

我が闘争

第一章　世界觀と黨

一九二〇年二月二十四日、我が國民社會主義ドイツ勞働黨はミュンヒナー・ホーフブロイハウスの大廣間に於て最初の公開大會を催し、約二千の會衆に對して新黨の綱領二十五個條を披露した。そして、これらの個條は悉く滿場の拍手裡に採用せられたのである。

新黨の目的は舊來の固陋な謬見を打破し、マルクス主義者や其の他の曖昧な、否、むしろ有害な企圖を排除するにある。二十五個條の採用は卽ちこの闘爭の原則と方針とを初めて決定したものにほかならない。腐敗墮落せる因循なブルジョアと勝ち誇れるマルクス主義者とを向ふに廻して、災禍の車輪を最後の瞬間に防ぎ止めようとする新しい勢力がかくして生れたのである。

かくの如く我等の運動は一大闘爭を遂行せんとするものである。從つて眞劍

でなければならず、强力でなければならぬ。それには、言ふまでもなく先づ黨員の胸中に、我等の運動は政界に更にまた一つ新しい選擧標語を押し賣りせんとするものでなく、極めて重大な新世界觀を確立せんとするものであるといふ神聖な確信を喚起する必要があつた。

考へても見よ、既成政黨の所謂『政綱』なるものは概ねいゝ加減に拵へあげたものであつて、その時の都合で修正したり變更したり勝手極まるものではないか。ブルジョアの政黨では、黨内に『政綱委員會』なるものがあつて、それが所謂政綱を作るのであるから、先づこの委員會の内幕を知つてかゝらぬと所謂政綱なるものの正體は分らない。

政黨は新たに政綱を作成したり、或は從來の政綱を修正したりするが、作成や修正の動機はいつでも次回の選擧のためである。選擧の成行きがどうなるかといふその心配である。手品師のやうな議會政治家は、人心が黨から離れ去らんとする氣配を見て取ると直ちに黨の看板を塗りかへる。それには政界の陰陽

師とか、占星師とか、言ひ換へれば『經驗に富んで老練で、而も大抵は年取つて老いぼれてゐる』議會の喰ひ詰め者が現れて相談に乘る。この連中には『豐富な經驗を積んだ政治修業時代』に大衆が我慢し切れなくなつて騷ぎ出した事件にぶつかつた覺えがあるから、どうやらまた同じ事件が起きさうになつてゐるのが分るのである。そこで、昔の古い處方箋を搜し出して來て、それによつて『委員會』を作り、或は巷間の途說に耳を傾け、新聞の論調に察して大衆の好むところは何であるか、惡むところは何であるか、望むところは何であつて喜ばざるところは何であるかを嗅ぎつける。これがためには、職人の所へも行けば月給取の所へも行き、何かと詳しく調べてその胸底の希望を偵察する。かうして偵察した所を基礎にして政綱を新たに作成したり修正したりするのであるが、そんな場合に、必要とあらばそれまで自黨にとつて危險極まるものと見て來た反對黨の『邪惡な標語』をも平氣で取り入れ、それを恰も有效なもの、そのまゝ利用し得るもの、既に以前から黨內で使つてゐたものであるかの如く

扱つて恥ぢず、その標語を發明して懸命に宣傳して來た當の反對黨を吃驚仰天せしめることすら少くない。

かくして、政黨は委員會を開き、舊政綱を『修正』して誰もが滿足するやうな總花主義の新政綱を作る。政黨の諸君は恰も戰地の兵隊が虱のわいた古襯衣を脱ぎかへるやうに無造作に信念を取りかへるのである。農民に對しては農業の保護を、工業家に對しては製品の保護を、また消費者に對しては購買の保護をそれぞれ約束する。教師の給料はあげてやらう、官吏の恩給は增してやらう、寡婦や孤兒は國家の手で養つてやらう、鐵道は敷いてやらう、運賃は下げてやらう、稅金も全免とはゆかなくとも相當に輕くしてやらう、などと並べ立てる。それでもなほ、どうかすると或る階級のことを忘れてゐたり、大衆一般の要求に氣がつかずにゐたといふやうなことも屢〻生ずる。さうすると、また、大急ぎでその階級に都合のよいことや、要求を滿足させるやうな文句を政綱に附け加へ、これなら愚かな大衆もその妻君も納得するであらうと見透しのつく

まで細心に隅から隅まで氣を配り、もう大丈夫、もうどの階級からも憎まれる心配はないと思へるやうになつたところで、初めてこれらの政綱を提げて選擧場裡に打つて出るのである。運の神に信賴し、濟度すべからざる有權者の愚昧に信賴して、所謂『國家の革新』を目的として鬪爭を開始するのである。

ところが、選擧も終り、候補者が四年任期の議員になつて最後の演說大會を濟ませ、愚民を手なづける仕事からもつと彼等にとつて高尙で愉快な仕事に移つてゆくと、政綱委員會は解消してしまひ、國家の革新を目的とした鬪爭は何時の間にかその日の糧を稼ぐための鬪爭になる。その日の糧のことを議員は稱して歲費といふ。

國民の選良は每朝議院へ出かける。奧までは行かなくても、兎に角出席簿の置いてある控室までは通る。そして、國民の奴僕として此所で出席簿に署名し、粉骨碎身の努力に對する當然の勞銀として些細の報酬を頂戴するのである。

四年の任期が盡きるか、或は任期は盡きなくても何か重大な危機が生じて議會解散の狀勢がだんだん切迫してくると、國民の選良は何かしら不安に襲はれてじつとしてゐられなくなる。害蟲「ぢむし」は時期が來ると同じく有害な「こがねむし」になる。それと同じく、議員の毛蟲共も蛹時代の共同の巢である議會を出て、翅にまかせて愛すべき國民の許へ飛んで行く。一度議員になつたものは議員商賣がやめられないのである。そこで再び立候補して選擧民を前に演說をし、自黨の功勞を吹聽して他黨を罵倒し、他黨が事ごとに頑冥で意地の惡かつたことを訴へる。ところが、物の分らぬ大衆はさつぱり感謝の拍手を送つて呉れない。それどころか、どうかすると亂暴な言葉を、否、惡罵をさへ浴びせかけるのである。大衆が一向に感謝して呉れないとすると、黨としてはこれは放つておけないことで、何らかの對策を講じなければならぬ。といつても、黨の看板の色上げか、塗り替へをする外に良い方法のあらう筈はない。そこでまたまた政綱の改正に取りかゝる。またしても政綱委員會を設けて國民の瞞着

に取りかゝるのである。大衆は底の知れぬほど莫迦であるから、政黨がかやうな詐欺に成功するのも別に訝しむに足りなからう。ブルジョアの有權者もプロレタリアの有權者も共に新聞に操られ、新しい綱領に釣り込まれ、眼がくらんでまたもとの詐欺師を選擧する。

かくして勤勞階級の人氣者や候補者は再び議會の毛蟲になり、國家國民を食ひ物にして肥え太り、四年後にはまたしてもきらびやかな蝶に化けて國民の間を飛び廻るのである。

嚴肅な現實の中でこんな詐欺や瞞着が絶えず反復して行はれてゐるのである。見てゐてこれほど厭なことはない。

ブルジョアの政黨の內幕はこんなものである。かやうな政黨に相當立派な組織を有するマルクス主義の勢力と戰ひ得る力のあらう筈がない。

また、議員の諸君にしても、マルクス主義の勢力を向ふに廻して戰はねばならぬことなどを眞面目に考へる能力は持ち合せてゐないのである。彼等は周知

の通り白人であるくせにアメリカ印度人の法術師の如く蒙昧の徒輩であるから、西ヨーロッパ民主主義を以てマルクス主義と眞劍に戰はねばならぬなどとは夢想だにしてゐないのである。一體、民主主義にせよ、これを基礎とした制度にせよ、總てマルクス主義がお先棒に用ゐる、その手段にほかならない。卽ちマルクス主義が對手を叩き伏せて勝手な眞似をするための手段に過ぎぬのである。現在、一部のマルクス主義者は狡猾にもマルクス主義と民主主義の原則との間には不可分の關係があるなどと稱してゐるが、これらのマルクス主義者がいざといふ時に西ヨーロッパ民主主義の主張する多數決の原則をまるで見向きもしなかつたといふことは、誰も忘れてはならぬ事實である。一九一八年の革命の時、既成政黨の議員は多數政治といふ莫迦げた方法によつて國家の運命を救ひ得るかのやうに考へてゐたのであるが、マルクス主義者はその間に破落戸や脫走兵や政黨の親分やユダヤ人の惡德文士などと共謀して、迂濶な民主主義者の横つ面を張り倒し、極めて簡單に政權を奪取したのである。要するにブ

ルジョアの民主主義者はアメリカ印度人の法術師の如く愚昧でお人好しの輕信家であるから、ペストの保菌者の如きマルクス主義者の野蠻な策謀などは西ヨーロッパ議會主義の咒文によつて今日明日にも簡單に封殺し得るかのやうに妄想を逞しくしてゐたのである。

元來マルキシズムは愛國思想を根絶して國家を覆滅せんとする野望を包藏するものである。そこで、マルクス主義者はこの陰謀を成就するために間接にでも國民や政黨の援助を受ける望のある間は民主主義とも手を握つてゐるが、他日民主主義の議員が大同團結を行つて立法權を有する過半數を獲得し、どうやら本氣にマルクス主義を攻擊しさうになつて來ると、忽ちその日から議會政治と手を切つてしまひ、赤い國際主義の旗手は今までの如く民主主義者の良知に訴へることを止めてプロレタリア大衆に火のやうな檄を飛ばすであらう。卽ち、マルクス主義者の鬪爭は黴臭い議會から一擧に工場へ、街頭へと進出し、民主主義を簡單に片付け、柔弱な選良が議會で成就し得なかつたことを、マル

クス主義に染まつたプロレタリア大衆の鐵梃や鐵鎚によつて、恰も一九一八年の秋に於けるが如く電光石火に仕遂げてしまふに違ひなからう。そこで、初めてブルジョアの連中も西ヨーロッパ民主主義によつてユダヤ人の世界制覇に對抗し得るなどと自惚れるのは正氣の沙汰でないといふことをはつきりと悟らざるを得ないであらう。

マルクス主義者から見れば、規則といふものは對手を恫喝したり己の利益になる時だけ必要であつて、己の損になるやうならば直ちに捨ててよいものである。さういふ規則を此方だけ眞面目に守るといふのは、前にも述べた通りお人好しの輕信家にほかならない。

ところで、所謂ブルジョアの政黨は總て眼前主義の立場を取つてをり、專ら議席の爭奪に沒頭してそれ以外に政戰の目的を知らず、その時その時の都合によつて政策を二三にし、黨是も方針も都合次第で船底の砂囊の如く棄ててしまふのであるから、政綱なるものも何ら確固たる據り所がなく、從つてまた何ら

の魅力もない。一體、政黨の政綱は高邁遠大な思想に立脚し、確固不動の信念を以てこれを堅持し、熱烈なる鬪志を以てこれを擁護すべきものである。かくして初めて政綱には大衆をひきつける力が生れる。然るに既成政黨の政綱にはかくの如き力がない。

マルクス主義者は既存の秩序を破壞せんとするものであつて、彼等の世界觀は兇惡極まるものであるが、兎に角彼等は一つの世界觀を以て武裝し、國家顚覆の陰謀を遂ぐるためにあらゆる手段を盡してゐることは確かである。然らば、これに對抗する方でも今日見るが如き卑怯未練な守勢を捨て、政治上の新しい信念に基いて勇猛果敢な攻勢に出でなければならぬ。例へば、バイエルン中央黨の如きは所謂國民主義を主張するブルジョア政黨であるが、その出身の大臣は我等の運動を批難し『革命』を企てるものといつて攻擊してゐる。小癪な話で、かやうな侏儒の如く取るに足らぬ政治屋に對しては、我等はたゞ一こと、さうだ、今我等は愚かな卿等が怠つて來たことを埋め合せようとしてゐる

のである。卿等は議會主義に禍ひせられて妥協を事とし、遂に國民を悲境のどん底へ陷れたが、我等はマルキシズムを攻擊するのである。我等は新しい世界觀を建ててその原則を確固不動に護持し、他日我がドイツ國民が再び自由の殿堂に登るための階段を築きあげんとするのである、と答へておけばよい。

かやうなわけで、國民社會主義ドイツ勞働黨の結成に際して我等の先づ用心したことは、この新しい高貴な信念のために戰ふ鬪士の集團をして議會中心主義の黨人の集團の如きものに墮落せしめないやうにすることであつた。

かやうな墮落を阻止すべき第一の豫防手段は、その理想の高邁なる、その展開の規模の遠大なることに於て今日の氣の弱い政黨政治家の膽を奪ふに足るやうな政綱を作ることであつた。

運動を起す以上は政綱として明確なる目的を掲げておかねばならぬ、といふのが我等の見解であつた。この見解が如何に正しかつたかは、ドイツの瓦解を招來した不幸な災禍を見れば明白であらう。

以上の如く觀察して來ると、玆に自ら一つの新しい國家觀が新しい世界觀の最も重要な構成分子として生れて來なければならぬ。

卐

『民族主義』といふ言葉に就いては既に第一卷で一通り述べておいたが、この言葉の表す概念はその意義が未だ明確でなく、從つて纏つた闘爭團體を結束する力がない。然るに近頃は、本質を全く異にするものが等しく『民族主義』といふ言葉の蔭にかくれて横行してゐるから、國民社會主義ドイツ勞働黨の任務と目的とを論ずる前に、先づ『民族主義』といふ概念を明かにし、この概念と黨の運動との關係を述べておきたい。

『民族主義』とか『民族的』とかいふ概念は『宗教感情』とか『宗教的』とかいふ言葉と同じくその意味が明瞭でなく、人によつて解釋が異り、また、實際に勝手氣儘に使はれてゐる。『宗教的』といふ場合でも、單にそれだけでは

概念上でも實用上でも一定のはつきりした事柄を表すことはむつかしく、何か具體的な事實と結びついて初めてその意味がはつきりするのである。例へば、人間は『その內實に於て宗教的である』といふ。かういふ言ひ方も惡くはない。ありふれた言ひ方ではあるが、これだけ聞くと非常に美しく聞える。また、世の中にはかやうな抽象的な表現で滿足し、そこに『宗教的』と稱せられる精神狀態を多少とも明白に想像し得る人もあらう。併し、大衆は哲學者でもなければ聖人でもないから、宗教觀念に就いてかやうに抽象的な說明を聞いたのでは、各自が勝手に解釋し氣儘に行動するやうになり、大衆が一致して共に宗教感情に相應はしき態度を取るには至らない。純粹に形而上的な茫漠たる觀念世界から具體的な信仰が生れて來て初めて宗教感情の何たるかがわかり、宗教觀念が力を示して效果を現すのである。勿論、この具體的な信仰は目的でなく、目的達成の手段に過ぎぬが、兎に角宗教觀念が效果を現すためには無くてならぬ必要な手段である。效果であるからこれは既に觀念的なものでなく、根

本に於て眞實であり、具象的なものである。總じて崇高な美が尊いのは論理を外れず目的にかなつてゐるからであるが、それと同じく高遠な理想は必ず常に實生活の深奥な必要に卽してゐるものである。これは一般によく心得てゐなければならぬことである。

人間が動物的な生活から脫却し得るのも信仰の賜物であり、人間の生活が安定して動搖しないのも信仰の賜物である。今日の人間は宗教教育のお蔭によつて宗教上乃至信仰上の色々な原則を奉じ、これを實踐に移して倫理乃至道德となしてゐるが、若し今日の世界から宗教教育といふものを取り除いてこれ等の原則を奪ひ去り、これらの原則に代り得べきものを與へなければ、人類は必ずや依るべき所を失つて歸趨に迷ふであらう。卽ち、人間は高邁な理想に仕へるために生きてゐるとも言へるが、逆に高邁な理想は人間が人間として存在するに必要な條件であるとも言へるのである。理想と人間の存在との間にはかくの如き循環の關係がある。

勿論、抽象的に『宗教感情』とか『宗教的』とか言へば、その中に既に靈魂の不滅とか永遠の生命とか、或は神の存在などといふ根本觀念が含まれて來るに違ひないが、併し、かやうな觀念は、個人にとつて如何に信ずべきもの、信ずるに足るべきものであつても、所詮はおぼろげな豫感とか豫覺とかの域を脱しないもので、これが進んで掟の如き羈束力を有する不動の信仰にまで發達するには、時として個人の心中に疑を生じ、時として認められ、時として斥けられざるを得ない。宗教上の根本觀念を會得するためにはどうしても不動の信仰がなくてはならぬのである。

不動不壞の信仰がなければ、宗教心があつたところで、それは徒らに曖昧複雜を極めでゐるから、人間の生活に對して役に立たぬのみならず、恐らく世間一般の混亂を助成するくらゐのものであらう。

『民族主義』といふ概念もかやうな點に於て『宗教感情』といふ言葉とよく似てゐる。民族主義と言へば、その中に既に色々な根本認識が含まれて來るに

違ひないが、併し、かやうな認識は認識として如何に立派なものであつても、未だ成熟せるものにあらず、形が整はずして甚だ曖昧であるから、それだけでは單に多少認むるに足る意見に過ぎないが、政黨の政綱となるに及んで初めて明白な意義を有し得るのである。たゞ單に漠然と自由に憧れてゐるのでは自由を得ることは出來ない。それと同じく世界觀上の理想やその理想に基く色々の要求は國民の單なる感情や內心の欲求だけによつて實現し得るものではない。國民が理想として獨立を求めてゐる場合でも、國民が獨立を願つてゐるだけでは足りず、軍備といふ鬪爭組織を整へてこそ初めて國民の熱望も立派に實現し得るのである。

總て世界觀はそれが如何に正しいものであつても、また如何に人類に大切なものであつても、その原則が旗印となつて生きた政治運動を展開しなくては國民の實生活上に用をなさない。また、政治運動なるものは、それが政黨の活動である以上は新しい立國の大義を政綱に掲げて飽くまでも理想の實現に努力す

るものでなければならぬ。

そこで、何か一般的な觀念を政治運動の基礎として用ゐるには、先づこの觀念の本質、種類、範圍などを十分に明かにしてかゝらねばならぬ。さもなくば、基礎たるべき觀念に就いて解釋が區々になり、信念が人によつて相違し、從つて鬪爭に必要な力ある運動を展開し得ないことになる。政綱は一般的な觀念を基にしてこれを作るべく、一般的な世界觀が具體的な政治的信念となるを必要とする。而もこの政治的信念なるものは此の世に於て實現せらるべきものでなければならぬから、政黨は政綱として高邁な理想を掲ぐるに止まらず、これを實現すべき手段方法をも考へねばならぬ。卽ち、政綱を定むるに當つては學者の正しい理論と政治家の實際的知識とが必要である。人間は元來不完全なもの、缺點の多いものであるから、これに顧慮しないでたゞ理想ばかり言つてゐては初めから成功しないに決つてゐる。高遠なる理想の世界から人間の世界に實現し得るものを抽き出してこれに形を與ふべきで、それには眞理を探る者

と國民の心理を知る者とが手を携へて働かねばならぬのである。

一つの世界觀の立場から見た理想或は最高の眞理を現實に移して政綱となし、これによつて精神も意志も統一せられ、政治的信念を同じくして鬪爭を共にする人々の團體を作りあげる、卽ち理想や眞理を具體化して統制のある政黨を組織する。これは非常に大切なことで、理想は具體的な政綱にならなくては力がなく、結局役に立たない。世の中には理想や眞理に就いて朧げながら氣のついてゐるものもあらうし、どうやら判りかけてゐるものもあらうが、大抵の人間は何かを摸索しながらそれを摑むことが出來ないで絕えず動搖してゐる。かやうな大衆の中から誰か一人身を挺して立ち、大衆の摸索してゐるものの何たるかを明かにして嚮ふ所を知らしめ、自ら率先して不滅の大義のために戰へば、大衆は必ずや信念をも意志をも同じくする堅固な團體となつて傘下に馳せ參ずるに違ひない。

身を挺して大義のために戰ふといふことは是非とも必要なことであつて、こ

れを爲す能力のある者ならその身分の如何は問題でなく、要は成功を遂ぐるや否やに懸つてゐるのである。

卐

さて、『民族主義』といふ言葉の本當の意味はどういふことかといふと、それは次の通りである。

『文化を造り上げ得る獨創の力は國家に具つてゐるものであるが、國家なるものは人種問題とは全然關係がなく、畢竟經濟上の必要から生れたもの、若しくは二三の者の權勢欲の所產に過ぎない』といふのが今日ドイツ國民の間に一般に行はれてゐる國家觀である。かやうな考へ方を推し進めてゆくと、人種に本來具つてゐるところの力を否定すると共に個人の力をも否定することになる。その故は、文化を創造する力が人種によつて異つてゐることを認めないやうなものは、必ず同じ誤を犯して個人としての人間の相違をも認めなくなるか

らである。人種を無差別平等に扱へば、民族をも平等に扱ひ、個人をも無差別に見てその間に力の相違のあることを認めなくなるのである。かやうに人種の差別を認めず、個人を平等に見る考へ方は今に始まつたことでなく昔からあつたのであるが、これをはつきりした政見の形式にまとめあげてマルキシズムといふ國際主義の世界觀を作つたのがユダヤ人カール・マルクスである。世界が昔から人種平等觀の害毒に犯されてゐなかつたならば、マルキシズムも政治上にあのやうな驚くべき成功を收め得なかつたに違ひない。確かにマルクスはマルクスの屬するユダヤ民族のために大衆の中から身を挺して立ちあがつた男である。國際主義や民族無差別觀は世界をだんだんと泥沼の如く腐敗せしめつゝあつた毒素である。この毒素を豫言者の烱眼を以て見つけ出し、それを掴み出し、それによつてマルクス主義といふ强烈な毒藥を作り、それによつて速かに國家の獨立を滅ぼし、民族の自由を葬らんと企てた男である。

かくの如くマルクスの教義は今日世間一般に行はれてゐる世界觀の精髓にほ

かならない。單にこの事實から見ても、所謂ブルジョアがマルクス主義者を向ふに廻して戰ふなどといふことは最初から出來ない相談であり、笑止の沙汰である。何故かといへば、ブルジョアも既に夙に心の底をかやうな毒素に犯されてをり、ブルジョアの世界觀はその本質に於てマルクス主義の世界觀と異ならず、たゞその徹底の程度と指導者とを異にしてゐるに過ぎないからである。ブルジョアはマルクス主義に犯されてゐながら、而もブルジョアといふ特殊の階級が社會を支配し得るものと信じてゐるが、マルクス主義者は世界をユダヤ人の手に引き渡さうとして計畫をめぐらしてゐるのである。

これに反して民族主義の世界觀では、人類のことを考ふるに當つて常に人種の差別を前提とする。民族主義の世界觀では、民族の生存を確保することが目的であつて國家はこの目的を達成すべき手段である。從つてこの世界觀では斷じて民族の平等を認めず、民族の差別と共にその優劣を認める。世界は優勝劣敗の原則の支配するところであるから、優れたるもの、强きものが自らをして

いよいよ榮えしむると共に、劣れるもの、弱きものをしていよいよ衰へしめ、これを優者に從屬せしむるは天理にかなふ優者の義務でなければならぬ。卽ち民族主義の世界觀は畢竟大自然のアリストクラシーに合致するもので、優勝劣敗の法則は下等の生物に至るまで適用し得るものと確信し、民族に優劣の差がある如く個人にも優劣の差のあることを認めるのである。大衆の一人一人にそれぞれの値打ちを認めるのである。卽ち、民族主義の世界觀は破壞的に働くマルキシズムと違つて組織的に働く。そこで、また、この民族主義の世界觀では人類の將來は必ずや理想的に發展するものと考へる。理想を實現し得る希望がなければ人間として生き甲斐がないのである。併し、無差別に道義を遵奉せんとするものではなく、民族に優劣があり、その一般倫理にも高下があるから、若し一の道德上の通念が優秀民族の存立を危くするやうな場合にはこれを斥けて差支へない。優秀民族が滅びて雜種の民族や黑人ばかりの世界となれば、美や崇高は勿論のこと、人類の將來の理想的な狀態は考へようにも考へられなく

なるに違ひなからう。

ヨーロッパ大陸に於ては、人類の文明開化はアーリア人種の存在と離る可からざる關係にある。それ故、アーリア人種が沒落し或は滅亡すれば世界は再び未開の暗黑時代へ逆轉するであらう。

人類の文化を創造し或は享受する者を滅ぼして人文を破壞し去るが如きは民族主義の世界觀から見て實に呪ふべき罪惡である。アーリア人種は神の似姿の中でも最も優れた似姿である。かくの如き人種に敢て危害を加へんとする者は、造物主の威を瀆して樂園追放に手を藉さんとするものである。

かくの如く民族主義の世界觀は天然自然の欲求するところと一致してゐる。世界は優勝劣敗の修羅場であつて、最も優れた人種が他を抑へて最後の勝利を占め、王者として地球に君臨する。これが卽ち自然淘汰の法則であつて、これを具現したものが民族主義の世界觀である。

人類の生活には早晩必ず行き詰りといつたやうな狀態が生じさうな氣がす

る。それはまだ何時のことか分らない。多分遠い將來のことであらうが、その時に當り、最も優秀な支配民族として世界中のあらゆる方法手段を利用しつゝこの行き詰りの打開に任じ得るものはアーリア人種以外にはなからうと思はれる。

卐

民族主義の世界觀はかくの如きものであるが、たゞこれだけの説明のみに止めれば、内容の具體的な解釋は言ふまでもなく人によつて區々別々である。事實に徴するに、ドイツに近頃出來た政治團體でこの民族主義の世界觀と關係のないものは殆んど一つもないが、併し、これらの政治團體が何れも等しく民族主義を標榜しながら互に他の團體と相容れず、相異つて別々の途を歩んでゐるのは民族主義に關する解釋が違つてゐる證據である。マルクス主義の世界觀は單一な指導組織によつて一絲亂れず嚴重に統制せられてゐるが、これに對抗す

べき世界觀は種々雜多で恰も烏合の衆である。これでは敵の戰線が鐵壁の如く强固であるのに對して甚だ弱過ぎる。勝利といふものはかやうな貧弱な武器ではとても得られるものではない。マルキシズムの組織によつて指導せられてゐる國際主義の世界觀と、これまた組織も指導も單一な民族主義の世界觀とが對立してこそ初めて勝負になるのであつて、雙方の戰鬪力に優劣がないとすれば、永遠の眞理を包含する世界觀の方が結局に於て最後の勝利を占めるに違ひない。

一つの世界觀を一つの組織として纏め上げるにはその世界觀に明確な形を與ふべきで、宗教感情がはつきりした信仰になるために教義を必要とする如く、世界觀を具體化して政黨を作るためには政綱を必要とする。

國際主義があのやうに勢力を張ることが出來たのはマルクス主義の黨が活動したからである。それ故、民族主義の世界觀もこれを代表しこれがために戰ふべき黨を持たねばならぬ。

國民社會主義ドイツ勞働黨はかくの如き黨を以て自任するものである。

民族主義の概念をかくの如く黨の立場から明確に規定してかゝらねば民族主義の世界觀が勝利を得ることは覺束ない。曾て我等の政黨組織に反對し、黨に羈束力を與へることを忌避した者も昨今は漸く間接ながら我等の主張を承認せざるを得なくなつたやうである。世間には、民族主義の世界觀は決して誰かが『永代借地』として專有してゐるものでなく、萬人の胸裡に眠つてゐるもの、否、『生きてゐる』ものであるといふことを頻りに說くものがあるが、それこそ民族主義といふ概念が一般大衆の胸裡に生きてゐただけでは、黨の組織や政策によつて見事に代表せられてゐるマルキシズムの世界觀があのやうに勢力を占めるのを少しも阻止し得なかつた事實を告白するものである。若しさやうな概念だけでマルキシズムに對抗し得るものとすれば、ドイツ國民は今日既に隆々として榮えてゐるに違ひなく、沒落に瀕してゐない筈である。國際主義の世界觀が一世を風靡したのは、マルクス主義者が軍隊の如き政黨を組織して、それ

によつて活動したからで、これに對抗すべき民族主義の世界觀が振はないのは、今日まで民族主義を代表する政黨がなく、或は有つても分れ分れになつてゐて統一がなかつたからである。故に、世界觀といふものは各自勝手の解釋に委すべきものでなく、政黨といふはつきりと纏つた形を取らなくては、戰ふことも出來なければ勝つことも出來ないのである。

一般的な世界觀は纏つた形もないのでどうにでも解釋がつくから、その中から特に中核となるべき觀念を抽き出して來て、それに教義にも似た明白な形を與へ、これによつて國民を統一することが必要である。こゝに我等の任務がある。言ひ換へれば、國民社會主義ドイツ勞働黨は一般的な民族主義の世界觀の中からその最も重要な觀念を選び出し、現實、時所、人物、人間の弱點などを參照して政綱を作り、これによつて國民を嚴重に統率し、國民をして嚮ふところを知らしめ、以て民族主義の世界觀に勝利をもたらしめんとするものである。

第二章　國　家

既に一九二〇年乃至一九二一年の頃に、時代遲れのブルジョア政黨は我等の新運動を以て反國家的なりと批難した。そこで、政界の剽盜ともいふべき徒輩がこれを奇貨として、新世界觀を天下に宣布せんとする我等の新政黨を不埒なものとなし、各流各派の政黨相携へて以て極力我等を彈壓すべしといきまくに至つたが、そのくせ彼等は國家の何たるかを少しも知らず、國家といふ概念によつて何も纏つたものを思ひ浮べることが出來ないのである。彼等はわざととぼけて如何にも氣がつかぬやうな顏をしてゐるが、事實、今日では國家といふ概念に就いてはつきりした定義が出來てゐない、否、定義を與へることが出來ないのである。何故かといへば、ドイツの官立大學で國家學を講ずる者は概ね國法學の先生であるが、この連中の大切な仕事は時の政府の御用を勤めるこ

と、卽ち己に糊口の道を與へて呉れる政府に都合のよいやうな說明や解釋を工夫することにほかならぬからである。そこで國家が本來の使命から離れた狀態に陷つてくると、國家存立の目的に關する說明もいよいよ曖昧になり、作爲的になり、ますます譯の分らぬものになる。例へば帝政時代のドイツは國家としては二十世紀に於ける最惡の畸形であつたが、さやうな國の大學敎授は國家の目的や意義を何といつて說明したらよかつたか。考へても見よ、今日の國法學者にとつては深く眞理を探ることよりも與へられた目的にかじりついてゐることの方が大切なのであるから、國家の眞の意義や目的を說明するのは官立大學の先生にとつてはなかなか容易な仕事ではなかつたに違ひなからう。與へられた目的とは何かといふと、今日國家と呼ばれてゐる代物、人間が拵へあげた機關、この怪物を是が非でも保存し擁護することである。それ故、國家を論ずるに當つて大學の先生が成るべく現實の立場を避け、努めて『倫理』とか『風儀』とか『道德』とか、或は其の他の觀念上の意義や使命乃至目的をごたごたと並

べ立ててごまかしてしまふのも當然の話で訝むに足りないのである。

今日の國家觀は凡そ次の三通りになる。

（イ）第一の見方では國家は政府が善かれ惡かれその意志に從つて權力を以て人間を集めて造りあげたものとする。

國家に就いてかやうな見方をするものは世間に非常に多く、特に今日所謂正統派に屬するものは皆これである。國家を考へる上に於ては人間の意志などは問題にならず、國家が存在してゐるといふ事實だけによつて國家の神聖にして侵すべからざる所以を認めなければならぬといふのが彼等の意見である。これは妄想である。かやうな妄想を支持するためには所謂國家の權威なるものを崇め奉つて犬の如く叩頭しなければならなくなる。つまり、かやうな見方をする人々にあつては、元來手段であるものと目的とが簡單に轉倒してしまふのである。國家はもともと人間のために存在するものであるのに、人間が國家のために存在し、國家の權威、言ひ換へれば、そこらあたりの端くれ役人をも含む官

憲を尊敬するために存在することになる。又、彼等の考へに依れば、國家の權威は何のために存在するかといふと、それは國民が何時までも默つて靜に心から官憲を尊敬し、何時までも騷ぎ出さぬやうに、治安を維持するために存在するのである。從つて、國家の權威なるものは目的でもなければ手段でもなくなる。されば、國家に權威がある間は治安の維持に力を盡すことが出來るが、一朝、治安が維持せられなくなると國家の權威は存立し得ないことになる。そこで國民の生活は總てこの兩極の間を往來してゐなければならない。

かくの如く國家は政府が勝手に人間を集めて造りあげたものとする意見を高唱するのは、バイエルンでは主としてバイエルン中央黨卽ち所謂『バイエルン國民黨』の政治屋連中で、オーストリアでは黑黃二色の旗を守る正統派である。かやうな國家觀を抱く者は殘念ながらドイツにも甚だ多く、所謂保守派の連中は皆これである。

（ロ）第二の見方では國家の存在には多少の條件が必要だとする。かやうな

見方をするものは第一の見方をするものよりも人數に於て少い。この部類の人人は國家の存在の必須條件として行政の統一を擧げるのみならず、國語の統一をも希望する。尤も國語の統一は單に行政技術上からこれを希望してゐるに過ぎないが、國民全體が成るべく同一の國語を使用するといふことを條件の一つとして掲げてゐるのである。國家の權威のみが國家の目的ではなくて、人民の福利增進も國家の目的であるといふのが彼等の意見である。彼等はまた人民の自由といふことを要求するが、彼等の國家觀に謂ふ所の自由は誤解せられた自由であつて本當の自由ではない。彼等はまた政體の如きもその存在といふ事實だけによつて神聖になり、侵すべからざるものになるといふのは間違ひで、國家の目的といふ立場から見て必要の場合に變更し得べきものとする。如何に遠き昔から傳はり來つたものでも、たゞそれだけでは神聖なものといふを得ず、現代の批判を免れ得ないとするのである。要するにこの國家觀にあつては、國家に期待するところは畢竟個人の經濟生活の繁榮であつて、常に實利上の立場

を忘れず、經濟上の損得といふ方面から國家に就いて考へる。ドイツに於けるブルジョア連中の國家觀は概ねこの種類に屬し、政黨では自由主義を標榜する民主黨が主としてこの國家觀を代表してゐる。

（ハ）第三の見方では、國民が言語を同じくし、國民として統一せられてくると聽て漫然と國威といふことを考へ、これを發揚せんとするに至るものであつて、國家は國民のかくの如き意向を實現すべき手段であるといふのである。この見方では國語の統一に重きを置く。それは國家が外に對して勢力を伸ばすに當り、國内の民族が言語を異にしてゐては不便であるから、國語を統一して國礎を固めねばならぬと考へるからであるが、同時に國語を統一すれば國内の異民族をも同化して國民の統一をはかり得るかの如き妄想に囚はれてゐるからである。

かやうな見方をするものは人數からいふと一番少い。

この部類の人々は動もすると『ゲルマニジーレン』Germanisieren といふ

言葉を使ふ。百年も前から盛んに使つてゐる。別に惡意から使つてゐるのでなく概ね善意からであるが、遺憾ながらこれを唱へる人々に眞の意味が分つてゐない。ゲルマニジーレンとはドイツ化といふことである。然るにこれを誤解して途方もないことを考へるに至つたものさへある。自分も若い時に同じ過誤を冒した記憶がある。汎ドイツ黨の間にも、オーストリア國内のドイツ民族は政府の協力を得さへすればオーストリア國内のスラヴ民族をドイツ化し得るに違ひないといふ意見が行はれてゐた。卽ちこの人々は、土地はドイツ化することが出來るが、人間は出來るものでないといふことをさつぱり悟らなかつたのである。當時の汎ドイツ黨は、異民族が外部から强制せられてドイツ語を話すやうになりさへすればそれでドイツ化したものと考へてゐた。世の中にこれほど間違つた考へはない。如何によくドイツ語を學び、死ぬるまでドイツ語を話し、またドイツの政黨に投票するやうになつたからといつて、それで黑人がドイツ人になれるものでなく、支那人がドイツ人になるわけでもない。ドイツ語

を強制して異民族をドイツ化せんとする運動は、その實、ドイツ化でなく反ドイツ化の運動である。然るにブルジョアの國民主義者にはこれが分らなかつた。今日では、民族によつて言葉が違ひ、それによつて民族の區別がはつきりしてゐるが、若し言葉の相違を除いて一律にドイツ語を使用せしめるやうになつたら、民族の區別も遂に失はれてドイツ民族と異民族との混淆を生ずるであらう。これは異民族のドイツ化でなくてゲルマン民族の雜種化にほかならない。古來の歴史に徴するも、征服民族が權力を用ゐて被征服民族に征服民族の言語を強制した例は幾らもあるが、そんな場合に、言語だけは千年の後までも殘つて他民族の間に行はれてゐるが、征服民族は影を沒して跡を留めず、結局征服者が事實上被征服者になるのを常とする。

民族の本質或は人種の人種たる特質は、その言語に存するのでなく、民族の血液に在るのであるから、言語の強制によつて被征服民族の血液をも變質せしめることが出來れば、それこそ異民族をドイツ化したものと言ひ得るであらう

が、これは出來ないことである。混血を行へば民族の血液に變化を生ずるに違ひないが、この變化は優秀な民族の退化にほかならない。征服民族はその優秀な性質によつて異民族を征服し得たのであるが、被征服民族と混血するやうになれば征服民族はだんだんとその優秀な性質を失ふことになる。高等民族と劣等民族との結婚によつて生じた雜種民族は高等民族の言葉を使ふかも知れぬが、かやうな民族には高等民族に有つた文化創造の能力がない。勿論、雜種民族にあつても暫くは高等民族の精神と劣等民族の精神とが相爭つて角逐を續けるに違ひなく、遂に滅び去らんとするに際して恰も將に消えんとする燈火の最後の刹那に熾んな焰を發する如く意外な文化の花を咲かせることもあらう。併し、それは劣等民族の間にあつて劣等民族と交はらなかつた一部の高等民族の子孫か、然らざれば雜種であつても最初から高等民族の血液が濃く混つてゐて爾來これを失はぬやうに努めて來たものが、祖先傳來の優秀な性質を發揮して咲かせる花であつて、決して雜種民族が獨自の力で咲かせる花ではない。雜種

民族にあつては文化は必ず退化するものである。

オーストリアのヨセフ二世の考へられてゐたやうなドイツ化が同國に於て遂に行はれなかつたことは、今日から見れば甚だ幸であつたと言はねばならぬ。あのやうなドイツ化が行はれたとすれば、オーストリアの國家は存續したかも知れぬが、言語を同一にする結果、ドイツ民族は異民族と結婚するに至り、民族の退化を來したに違ひなからう。成る程、あのやうなドイツ化を行へば、何百年かの間に一種の群居本能が生じてオーストリア國内の種々な民族の間に同族意識が出來るかも知れぬ。併し、國民全體は民族としては劣等なものになる。一つの國家を造り上げる國民ではあり得ようが、文化を創造する國民ではあり得ないであらう。

オーストリアに於てかやうな混血が行はれずに濟んだのは、ハップスブルグ家に文化の維持などといふ高尚な見識があつたためではなく、寧ろハップスブルグ家が短見で偏狹固陋であつたからであるが、何れにせよ、かくの如きドイ

ッ化が行はれなかつたのはドイッ民族にとつて勿怪の幸であつた。さもなくてかやうな混血が行はれてゐたならば、今日ドイッ民族は文化國民として殆んど言ふに足りないものになつてゐたに違ひない。

然るに、單にオーストリアのみならずドイッに於てすら所謂國民主義者はドイッ化といふことに就いて同様の謬見を抱いてゐた。現在でも抱いてゐる。多くの人々が東部ゲルマン化の名目の下に唱へてゐたポーランド政策も歸するところはポーランドをドイッ化せんとするにあるが、殘念ながらこれもやはり同様の謬見から來たものである。卽ち、多くの人々は、單にポーランド人が專らドイッ語を使用するやうになればそれで直ちにポーランド人もドイッ人になると考へてゐたのである。併し、こんなポーランド政策が行はれたら飛んでもないことが起きたに違ひない。卽ち、異民族に屬する國民がドイッ語を使つて異民族の思想を表すやうになり、高等なドイッ民族の品位が下等な異民族のために汚されて低下するといふことになつたであらう。

ユダヤ訛でドイツ語を喋言るユダヤ人がアメリカに行くと、大抵のアメリカ人は少しも事情を辨へぬから、これらのユダヤ人をも直ちにドイツ人にしてしまふ。かく、異民族がドイツ語を使用するがためにドイツ民族が間接に受ける損害は今日でも既に甚だ恐るべきものがあるのである。東ヨーロッパから虱と一緒に移住する民族が概ねドイツ語を喋言るからといつて、たゞそれだけの事柄からこれらの民族がドイツ系であり、ドイツ民族であると斷じられては、迷惑するのはドイツ民族だけであらう。

ドイツの歴史に就いて見ても、ドイツ化の成功せるは我等の祖先が劒によつて獲得した土地にドイツの農民を移植した場合である。併し、惜しいことに、移植した農民が異民族と雜婚したために、異民族の血液がドイツ民族の體内に流れ込んで、ドイツ民族の本質を分裂せしむるに至つた。ドイツ人は遺憾ながら今日でもなほ所謂超個人主義 Überindividualismus なるものを口にしてゐるが、この超個人主義も所詮は民族の本質の分裂から來てゐるのである。

國家に就いて第三の見方をする人々も、國家が手段であつて目的でないことを解せず、國家は國家のために存在するものとなし、國家の維持存續を人間の存在の最高の使命とする。

これを要するに、凡そ文化を創造し價値を形成する能力は種族の本質に由來する。從つて國家は人文發達の根本條件たる種族の維持向上を最高の使命としなければならぬ。然るに上に述べ來つた三つの國家觀は何れもかくの如き國家存立の本義を沒却してゐるのである。

三つの國家觀はかくの如く何れも國家の本質や目的を見誤つたものであるが、ユダヤ人カール・マルクスの學說はこれらの謬見から引き出した極端な結論である。要するに、ブルジョアは國家の本義を解せず、國家に種族保存の義務のあることを忘れ、而も國家に就いて誰も納得するやうな定義を與へなかつたから何時の間にかブルジョア自らマルキシズムのために道を開き、國家を否認する學說の準備をすることになつたのである。

それ故、國家觀の方面だけで見ても、ブルジョアには國際マルクス主義と戰ふ力はない。ブルジョアがブルジョアの理想を維持せんとすればその國家觀を改めて種族の保存といふことに重きを置かねばならぬ。種族の保存といふことが國家を考へる上に是非とも必要な基礎である。然るにブルジョアはこの必要な基礎を既に夙に投げ棄ててしまつてゐた。そこで、拔目のない敵手はブルジョアの弱點を看破し、ブルジョアが不覺にも敵手に提供した武器を逆用し、卽ちその國家觀を利用して攻擊に出るに至つたのである。

故に、國民主義の世界觀を奉ずる新運動にあつては、國家の本質と國家存立の目的とに關する見解を明確にすることが何よりも大切である。

抑〻、國家に關して根本的に認識すれば、國家は目的でなくて手段に過ぎず、高等な人類の文化を形成するに必要な條件ではあるが人類の文化の原因ではなく、文化の原因は文化を創造し得る種族の存在である、といふことになる。どのやうに立派な國が世界に幾つあつても、文化を創造し保有するアーリ

ア人種が亡び去つてしまへば、今日見るが如き最も優秀な民族の高等な精神にふさはしい文化は再び世界の何所にも見られなくならう。否、更に一歩を進めていへば、優秀な才能や彈力を持つた人種が滅び、惹いてかやうな才能や彈力が世の中から消えてしまへば、よしんば國家を成し得ても人類は何時か必ず滅び去るに違ひない。

今、假りに地球の表面に何か構造上の異變によつて變動を生じ、洋々たる大海の中からヒマラヤのやうな山が新たに湧き出たとしたら、人類は無殘にも一擧に滅亡して文化も何もあつたものではなからう。勿論、そこには國家もなければ、社會の秩序もなくなり、幾千年に亙る人文發達の記錄も亦悉く失はれて跡を留めず、世界は見渡す限り屍を以て覆はれた泥の海とならう。併し、假りに世界がこのやうに崩れても、文化創造の能力を有する人種が僅かでも生き殘りさへすれば、異變の鎭まつた後の世界には再び文化の花が咲くであらう。何年の後か分らないが、年代はかゝつても必ず人間の創造力が働いて花を開き實

を結ぶに違ひない。文化創造の能力を有する人種が最後の一人に至るまで死に絶えた時こそ世界が永遠に荒廢する時である。これに反して、たとへ民族主義の國家を造つても、これを維持すべき民族に文化創造の天才がなければその國家は必ず滅亡せざるを得ない。かやうな例は現に幾らもある。太古の大きな動物が他の動物に敗けて遂に全く亡び去つたと同じく、人類もその精神力に缺くるところがあつて自己保存に必要な武器を發見し得ないやうなものは滅びざるを得ないのである。

文化を創造するものは國家ではない。國家の使命は文化を創造する種族の保護に任ずるにある。種族の保護に任じなければ、國家はその形こそ元のまゝでなほ數百年を存續し得るかも知れぬが、國民は雜婚によつて混血してしまふから文化創造の能力を失ひ、從つて國民一般の生活に非常な變化を生じるであらう。例へば、今日のドイツの如きも、形式上の國家としては、今後もなほ何年か外觀を保つて存續し得るかも知れぬが、國民が既に異民族の毒素に中てられ

てゐるから、ドイツの文化は必ず墮落するに違ひない。否、この墮落は現に既に顯れて憂慮すべきものがあるのである。

かくの如く高等な人類文化の存立の要件は國家でなくて文化を創造し得る民族である。

文化創造の能力は民族に固有のものであるから、その民族の存在する限り常にその民族と共にあるのであるが、能力が實際に活動して文化を創造するには外部の條件が具合よく揃つてゐなければならぬ。優秀な國民或は民族には文化創造の能力が素質として內存してゐる。外部の條件が惡いと、この素質が逼塞して現實に顯れて來ないが、條件さへ整へば必ずその力を發揮せずにはゐない。それ故、基督敎渡來以前のゲルマン民族を『文化のない』蠻人であつたといふのは甚だ怪しからぬ妄斷である。ゲルマン民族は斷じてさやうな蠻族ではなかつた。たゞゲルマン民族の居住してゐた地域が寒氣の嚴しい北方にあつたため、流石のゲルマン民族もその創造力を意の如く發揮し得なかつたまでであ

る。假りに古代のギリシャ＝ローマの文明世界がこの世になかつたとして、ゲルマン民族がもつと氣候の良い南方に移住し、劣等民族を奴隷とし道具として使役することが出來たなら、ゲルマン民族と雖もその素質を展開し、文化創造の能力を發揮して、恰もギリシャ民族の如く古代に於て絢爛たる文化の花を咲かせたであらう。併し、この文化を創造する能力は北方の嚴しい氣候から生れて來るものではない。北方の民族なら悉くこれを備へてゐるかといふとさうではないのである。ラプランド民族は同じく寒氣の嚴しい北方に住んでゐるが、これを南方に移したところでエスキモー民族と同じく決して文化を創造し得ないであらう。卽ち、文化創造の能力、この立派な素質は實にアーリア人種に固有のものであつて、これを現實に發揮し得ると否とは外部の事情の如何によるのである。

以上に述べて來たことを要約すると次の通りになる。

國家は手段であつて目的でない。國家の目的は、肉體上に於ても精神上に於

ても同一の種族に屬する人間より成る共同體を維持し助成するにある。即ち、國家を造りあげてゐる民族の生存を確保し、それによつて民族固有の凡ゆる能力を自由に發展せしめるのが國家の使命である。固有の能力には色々なものがあるが、その或るものは主として形而下の生活を維持するに用ゐられ、他のものは形而上の發達を促進するに使はれる。何れにしても、實際上では前者の能力と後者の能力とは相互に離るべからざる關係にあるのである。

國家には右に述べた如き目的がある。從つてかくの如き目的に副はない國家は眞の國家でなく出來損ひの國家である。出來損ひの國家でも存在し得るではないかといふかも知れぬが、存在し得るとしても出來損ひであることに變りはない。それは恰も海賊が掠奪に成功したところで海賊はやはり海賊であつて萬人の是認し得る行爲でないのと同じことである。

苟も國民社會主義者たるものは全く新しい世界觀を奉ずるものであるから、從來の誤れる國家觀に囚はれてはならない。從來の國家觀は虛僞に立脚してゐ

る。若し過つて從來の國家觀に囚はれるが如きことがあれば、それこそ新たなる大理想のために戰ふことを止めて虛僞の奴隸になるものである。國家は容器であり、民族はその內容である。容器と內容とは明かに區別せられなければならぬ。容器はその內容を保護することが出來てこそ容器の値打ちがあるのであつて、內容を保護し得ないやうな容器は無用の長物である。

これを要するに、民族主義に立脚する國家の最高の使命は、文化創造の能力を發揮して高等な人類の美や品位を作り出す優秀民族の人種的元素卽ち血液を確保することにある。そこで、我等アーリア人種からいへば、國家なるものはアーリア人種の生きた機構であつて、單にアーリア人種の生存を確保するに止まらず、アーリア人種の凡ゆる精神的性能を益〻向上發達せしめて、アーリア人種をして遂に無上の自由を得しめ、地上に君臨せしめるものでなければならぬのである。

これに反して今日の國家觀なるものは甚しい謬見であつて、その謂ふ所の國

家は概ね出來損ひであり、從つて名狀すべからざる困難に陷つてゐる。

我等國民社會主義者の國家觀は從來の國家觀と相容れず、從つて今日の世人は我等を以て革命を企てるものとなして排斥してゐるが、併し、我等は一時の毀譽褒貶によつて言動を左右にせず、眞理と認むるところに向つて邁進すべきである。さすれば、我等の言動は假令今日衆人の排斥を受くるとも後世必ず見識ある者が現れてこれを理解するのみならず、正しき言動なりとして尊敬するに違ひないのである。

卐

我等國民社會主義者の國家觀は上述の通りである。從つてまた、我等國民社會主義者は上述の國家觀を標準として國家の良否を判別する。固より國家の價値は、これをそれぞれに國家を形成してゐる個々の民族自身の立場から見れば良否の問題となるが、人類全體卽ち我がドイツ民族の指導すべき人類全體の立

場から見れば、この標準に據る國家の存在の有無は絶對的な問題である。言ひ換へれば、國家の良否はその文化の程度や外國に對する勢力の如何によつて判別すべきものでなく、國家がそれを造り上げてゐる優秀民族にとつて良い制度であるか否か、卽ち國家がそれを造り上げてゐる優秀民族の存立を確保し得るや否やによつて定まるのである。

國家がその保護すべき民族の生存條件に適合するのみならず、國家の存立によつて初めてその民族の生活が維持せらるる如き國家は良い國家であつて、その文化が外國の文化よりも進んでゐようがゐまいが、そんなことは問題にならない。國家は新たに民族の性能を創り出すものでなくて、民族をしてその既に有する性能を自由に發揮せしむるものである。それ故、如何にその國家の文化が進んでゐても、その文化を保持し相續する民族の將來を考へず、雜婚を許し、混血によつて民族を沒落に至らしむるが如き國家は惡い國家である。民族があつてこそ文化もある。文化は國家が創り出したものでなく、創造の能力を有す

る民族がその生きた機構たる國家の保護の下に造り出したものであるから、民族が滅びれば文化も亡びる。卽ち、民族の沒落を齎すが如き國家は惡い國家と謂はざるを得ない。國家はどこまでも內容でなくて形式である。それ故、民族の有する文化の程度によつてその民族の生活せる國家の良否を定めることは出來ない。文化の進んだ民族の方が黑人よりも何かにつけて高等な人類であるやうに見えるのは當然であるが、民族の生存の確保といふ目的から見ると、文化の高い民族の國家が黑人の國家に劣つてゐる場合もあり得るのである。如何に優れて良い國家でも民族の本來所有しない性能を新たに創り出すことは出來ない。これは言ふまでもないことであるが、惡い國家では、文化を保持し相續する民族の絕滅を容認し或は助成するから、その民族が本來所有してゐる性能すら何時か必ず枯死するに至るのである。

かくの如く、國家の良否はその國家を造り上げてゐる民族の生存を確保し得るや否やによつて定むべきものであつて、文化の程度や外國に對する勢力の如

何によつて定むべきものでは斷じてないのである。

ところで、國家の良否を民族の生存の確保といふ目的から判斷するのは、卽ち個々の民族の立場から判斷するのは容易であるが、國家が是非とも必要である所以を判斷するのは、卽ち國家の良否を優秀民族の指導する人類全體の立場から判斷するのは甚だ困難である。民族の生存の確保といふ目的に合致するだけではまだ世界中で最も良い國家とはいへない。國家によつてその生存を確保せらるべき民族の優劣をも併せて考慮しなければならぬ。卽ち國家が民族の生存の確保といふ目的に合致するばかりでなく、その國家によつて生存を確保せらるべき民族も最も優秀な民族である場合に初めてその國家は世界中で最も良い國家だといへるのである。

そこで、國家の使命を論ずるに當つては、使命を受け使命を果すものが民族であることを忘れてはならぬ。國家はたゞ生きた機構としてその組織の力を發揮し、これによつて民族を保護し、民族をして自由に發展せしむべきものであ

る。

それ故に、また、我等ドイツ人の必要とする國家を考へるに當つても、先づ明かにすべきは、この國家に如何なる人間を包容すべきか、また、この國家は如何なる目的を追求すべきかといふことでなければならぬ。

遺憾ながらドイツの國民はその根本に於て單一な人種でない。各地から種々雜多な原始民族がドイツに流れ込んで來たが、それがまだ十分に融合せず、新しい人種を造りあげるところまで行つてゐないのである。否、それどころではない。特に三十年戰爭以後は、またしても異民族が入り込んでドイツ民族の血の純潔を汚したのみならず、ドイツ民族の魂をも腐敗するに至らしめたのである。ドイツの國境は四方に開放せられてゐる。而も國境の外にはゲルマン民族にあらざる異民族が住んでゐる。そこで異民族の血が絶えずドイツ國内へ夥しく流れ込んで來た。國内の諸民族がどうやら融合しかけると、また、そこへ異民族の血が流れ込んで來る。かやうな具合でドイツでは諸民族が完全に融合す

る暇がなく、新しい人種を構成すべき種々な民族が遂に一つの人種を造り上げることが出來ないで何時までも相並び相隣りして生活してゐるといふ狀態になつた。同種の國民であれば有事の場合に一致協力するものであるが、ドイツの國民は人種として統一せられてゐないから團結することが出來ず、四分五裂に陷らざるを得なくなつた。これは種々なる民族が地域を異にして割據してゐるのみならず、同じ地域内にも民族を異にするものが散在してゐるためである。北方系（註1）の民族は東方系の民族と隣りし、東方系の民族はディナール民族と並び、東方系とディナール系との隣には西方系の人間が住み、これらの民族の間には混血の雜種が住んでゐる。これはドイツにとつて非常に不利な狀態である。國民が血を同じくして統一せられてをれば、國難の迫るのを見ると共に直ちに内輪喧嘩を止めて團結し、一致協力して共同の敵に當るものであるが、ドイツ國民にはかやうに國難を前にして協力する本能がない。これは種々なる民族の血がまだ融合せずにそのまゝ並存してゐるためであつて、所謂ドイツ人

の超個人主義もその源はこゝにある。平時ならばこの超個人主義も何かの役に立つかも知れぬが、ドイツが世界制覇に失敗したのも結局は超個人主義のためにほかならない。若しドイツの國民が他の民族の如く早くから統一せられて十分に團結してゐたら、ドイツは今日既に地上に君臨してゐるに違ひなからう。從つて世界歴史も亦今日とは異つた經過を取つてゐるであらうと思はれる。さすれば世界の平和も今日既に實現してゐるかも知れない。平和は何人も欲するところであるが、眼の眩んだ平和主義者や氣の弱い婦女子の泣き言によつて出て來るものではない。優秀な民族が劔によつて世界を征服し、世界の文化を向上發展せしめてこそ初めて眞實の平和が打ち樹てられるのである。

ドイツが從來名狀すべからざる困苦を嘗めざるを得なかつたのは、國民が民族として統一せられてゐず、血が分裂してゐたからである。ドイツに小さな王侯が澤山に現れたのも、ドイツの國民が世界制覇の資格を失つたのも、總てこれがためにほかならない。

ドイツは今日もなほ國内の分裂に惱んでゐる。併し、一面から見ると、今日までドイツを苦しめて來たこの分裂もドイツの將來のためには意外な幸運であつたやうに思はれる。ドイツに入つて來た種々なる民族が十分に融合せず、單一な國民を造り上げることが出來なかつたのは、確かにドイツにとつて非常な不幸であつたが、ドイツ國民の中に祖先の純潔な血をそのまゝ汚さずに保持して人種の墮落を免れたもののあることは非常な幸福といはねばならぬ。

各地からドイツに入つて來た種々の民族が完全に融合してしまへば、今までに既に統一のある纒つた國民が出來てゐたであらうが、かくして出來たドイツ國民は雜種にほかならぬから、雜種の場合に常に見る如くその文化創造の能力は原民族中最も優秀な民族の持つてゐた能力よりも劣つてゐるに違ひなからう。ところが、ドイツでは種々なる民族が各地に割據して十分に融合しなかつた。そのお蔭で今日なほドイツには他民族の血を混へない純粹な北方ゲルマン民族の子孫が殘つてゐて、而もそれが國民の大部分を占めるに至つてゐる。こ

れはドイツにとつて祝福すべきことで、今日まで血の純粋を保持し來つたこの民族こそドイツの將來にとつて貴き存在といはねばならぬ。自然の法則を知らず、人種の相違に氣を留めないで、人間でさへあればどんな人間でも人間たることに變りはないと考へてゐた曖昧な時代では、民族の純性などは問題にしなくてもよかつたであらう。併し、今日ではそれでは濟まされない。何所までも民族の純性を明かにしてかゝらねばならぬ。そこで、自分の見るところを言へば、北方ゲルマン民族は人類の最高の目的を達成すべき使命を以て生れた唯一の民族である。若しこの北方ゲルマン民族を始めとしてドイツに入つて來た色色な民族が今日までに悉く融合してゐたとすれば、ドイツの國民は國民として纏り、從つて外國に對しても強大な勢力を有するに至つたかも知れぬが、肝心な北方ゲルマン民族が他民族と混血してその本來の優秀な能力を失つてしまつたであらうから、人類の最高目的を達成せしめることは出來なくなつたに違ひない。

幸にして北方ゲルマン民族は他民族と混血しなかつた。これは北方ゲルマン民族が意識して努力したためでなく、全く運命のお蔭であつた。民族の純性を重視するの必要を知る我等としては、北方ゲルマン民族が他の民族と混血しなかつたことを正しく天佑として感謝し、この幸運を徒爾に終らしめないやうにしなければならぬ。

かくの如く、ドイツ國民の中には純粋無垢のゲルマン民族が殘つてゐる。この民族は啻にドイツ國民にとつて貴重であるのみならず、全人類にとつても貴重な民族である。さすればドイツ國民の使命はかくの如く貴重なゲルマン民族の維持發展を最高の任務とする國家を造ることでなければならぬ。

かくして初めて國家に存在の意義が生ずる。世には因循姑息の裡に互に騙し合ふことの出來るやうに所謂平和な治安を維持することを以て國家の使命となすものもあるが、笑止の沙汰といふべく、全能の神が地上に降し給へる最も優秀な民族の維持發展に努めることこそドイツの國民にとつては國家の最高使命

である。

國家は國家のために存在するものではない。さやうな國家が存在するとすれば、それは死物であり、機械である。ドイツ國民の造り上ぐべき國家は高尚な理想のために存在するものでなければならぬ。生ける有機體でなければならぬ。

ドイツの國家は最も純粹な人種的元素たるドイツ人を悉く收容し、これを維持し、これをして徐々に而も確實に國内のみならず世界をも支配し得る地位に上らしめることを以て目的としなければならぬ。

卐

今日では何人も國家を機械の如き死物と考へてゐるが、國家は有機體である。有機體のあるところには常に鬪爭がある。それ故、國家を死物と考へず、生ける有機體と見れば、玆に初めて無爲停滯の時代が去つて潑剌たる活動の時

代が來る。古今東西、流れざる水は腐り、用ゐられざる鐵は錆びる。勝を得んとすれば攻めねばならぬ。國家を考へる上に於てもこの道理を辨へてゐるべきである。固より闘爭の目的が大きいと大衆には容易に呑み込めないが、それだけにまた闘爭の成功した場合は勝利が大きいものに見える。これは世界の歴史に徴して明かなことである。目的を正しく追求し、不屈の根氣を以て闘爭をやり遂ぐれば、勝利の意義はますます大きなものにならう。

現狀の維持に努むるは政治に當る者の易しとする所であり、將來の新しき事態のために自ら求めて戰ふは難しとする所である。ドイツ今日の爲政者が難きを避けて易きに就かんとしてゐるはこゝに言ふまでもない。國家を機械と考へ、國家は自己の生存のために存在するものであり、彼等役人も『國家に屬してゐる』と考へる方がドイツ今日の爲政者には氣樂なのである。『國家に屬してゐる』といふ言ひ方は彼等役人の好んで使ふ言ひ方であるが、これを言ひ換へると、ドイツ人はドイツ民族のために働くと同じにドイツ民族以外の異民族

のために働いても差支へないといふことである。或はまた人間は人類のために働くと同じに人類以外の者のために働いても差支へないといふことである。前に述べた如く國家の權威は民族の自己保存本能が嚴肅に具現したものであるが、國家を機械と見て形式の整つた組織に國家の權威があると考へる方が彼等役人には無事なのである。國家を機械の如く考へれば、國家は國家のために存在し、國權は國權のために存在するといふことになつて、懶怠な役人には都合がよいが、民族の自己保存本能が嚴肅に具現したものを國權と考へれば、國家は民族が永遠に亙る生存競爭に使用すべき强力な武器になる。國家や國權は形式的なものでもなければ、機械的なものでもなく、民族全體に共通な自己保存本能の具現であるから、その民族の一人である限りは誰しも國家の使命に順つて民族のために戰はねばならぬ。國家は戰ふ。從つて國民も戰はねばならぬ。懶怠な役人にはこれは都合の惡いことに違ひなからう。

今日の社會は肉體も弱く氣魄も衰へてゐる人々から出來てゐるから、國家の

本義を捉へた我等國民社會主義者の國家觀に同情を寄せるものは甚だ少い。今日の社會から我等の運動に加はり來るものがあるとすれば、それは年齢はとつてゐてもなほ若々しい元氣を誇り得る老人位なもので、現狀の維持を以て人生の本務と心得てゐる連中は決して寄りつかないであらう。

我等國民社會主義者の敵は數限りもなく多い。尤も、衷心から我等を敵として憎む者は寧ろ少くて、大抵は物事を突きつめて考へずにどうでもよいとする連中か、若しくは現狀の維持に汲々たる連中である。何れにしても敵の數は非常に多い。これでは我等が如何に戰つても勝てる見込みはなささうに思はれるが、勝てさうに思へないほどの戰であればこそ我等の任務は重大であるといふべく、また成功の可能性もあるのである。氣の弱い者は我等の鬨の聲を聞いただけで遁げて行く。或は、中には少し位手向ふ者もあるが、鬨の聲が烈しいと忽ち怖ぢけて尻込みをしてしまふ。そんな者は味方として頼りにならない。鬨の聲を聞いて集つて來る者こそ本當に鬪志に燃えた頼もしい仲間である。我等

の求める者はかやうな仲間である。澤山でなくてもいい。少數でもいいのである。何故なら、人數こそ少くても元氣旺んで實行力のある連中が目的を一にして團結し、大衆の如くには懶けずに目的のために戰へば、やがて國民の多數がこれによつて引きずられてゆくことになるからである。世界の歴史を作るものは何時でも少數者である。元氣の良い者は人數こそ少いが意志が強く度胸がすわつてゐるからである。

我等の敵は多く、味方は少い。それ故、今日、世人の多くは我等の運動を以て非常に困難な仕事と見るかも知れぬが、實は困難な仕事であればこそ將來に勝利を期待し得るのである。我等の使命は重く行手は嶮岨である。重くて嶮岨であるから弱い者には堪へられない。從つて、集り來つて我等の鬪爭に加はるものは一騎當千の强者ばかりといふことになる。かくの如き淘汰の裡に勝利の保障が祕められてゐるのである。

卐

一般に自然は生物の種族の純粋を保たんとし、これに反する生物に對しては制裁を加へんとする傾向がある。自然は生物の雜婚を好まないのである。それ故、雜婚によつて生れたものは三世、四世、五世と世を經る毎に素質が惡くなり、自然の制裁の下に甚だ苦しまねばならぬ。かくの如く混血の子孫にあつては、素質の良かつた方の親の性能がだんだん失はれて行くのみならず、血が混つてゐて單一でないから、性格も分裂してゐて、生きんとする意力も弱い。一朝有事の際に、種族の純粋を保つてゐる人間は一貫した正しい決斷を下し得るが、種族の純粋を失つた人間は忽ちぐらついて思ひ切つたことが出來ず、中途半端なことでお茶を濁すやうになる。これを要するに、雜種は純種に劣り、純種よりも滅び易い。同一の難局に遭遇しても、純種は堪へ得るが雜種は倒れることが多い。これが卽ち自然の制裁といふものである。それから、また、雜種

は繁殖の力も弱い。これも自然の制裁である。卽ち自然は雜種の繁殖を妨害して雜種をだんだんと死滅せしめるのである。

そこで、例へば、或る人種に屬する者が劣等人種に屬する者と結婚すれば、それが當人の墮落であることは言ふまでもないが、生れて來る子供は雜種でない近所の子供に比べて心身共に劣るのを常とする。雜種が優秀人種の血液を再び混へずに雜種の間だけで結婚を續けてゐると、これによつて生ずる子孫は自然の賢明な法則により抵抗力を失つて遂に死滅するか、又は數千年の間に種々様々な雜婚を重ねて、原種の血液を完全につき混ぜ、原種の面影を何所にも留めない新しい混血民族になつてしまふであらう。かやうな新しい民族は、一つの民族として團結し、相當の抵抗力を具へてゐるであらうが、最初の雜婚を敢てした優秀民族に比べれば、その精神文化の能力は言ふに足りないであらう。また、かやうな新しい民族が出來たとしても、血液の純粹な優秀民族がなほ存在してゐて、これを對手に生存競爭を行はねばならぬとすれば、混血民族は敗

れざるを得ないであらう。混血によつて生じた新しい民族は假令長い年月の間に一つの民族として團結するに至つても、人種の水準が低く、從つて精神の彈力が少く、文化創造の能力を失つてゐるから、精神の彈力、文化創造の能力共に優れた單一な民族と戰つて勝てる道理がないのである。

今まで述べたところを綜合すると次の如き結論になる。

優秀人種が何所までも人種の純粹を保持して存續してをる場合には、雜婚によつて生じた子孫は優秀人種の血を混じたものでも早晩必ず滅亡する。混血の子孫が滅亡しないで存續し得るのは、優秀人種が悉く雜婚によつて人種の純粹を失つた場合に限るのである。

これを別の言葉でいふと、優秀人種の一部が劣等民族と結婚して墮落しても、優秀人種の主要な部分が雜婚を行はず、人種の純粹を固く堅持してをりさへすれば、有害な分子をだんだん排除して人種の單一性を確保し得る。これがつまり緩漫ながら自然の行ふ更生作用である。

種族本能の強い生物なら、假令何らかの特別な事情によつて已むを得ず異種族の血を混へるに至つても、やがて自然の更生作用によつて種族の純粹を回復するものである。卽ち雜婚を餘儀なくせしめた事情が消滅すれば、それまで雜婚を行はずに純粹を維持して來たものは、種族を異にするものとの結婚を避けて種族を同じくするものとの結婚に努めるやうになり、かくして爾後の混血を防止する。雜婚によつて生れたものが非常に多くて、血液の純粹を保つてゐるものが非常に少く、從つて最早や雜婚の趨勢を阻み得なくなつてをれば別であるが、さもなくば雜婚によつて生じた混血の子孫はかやうな更生作用を受けて自ら衰滅するものである。

ところが、理性を失つて自然の課した義務を忘れ、卽ち雜婚を敢てして種族の純粹を汚すやうな人間の世界では、雜婚の恐るべき弊害を悟つて進んでこれが防遏に努めなければ、種族の墮落を救ひ得ない。害惡を除くには先づ害惡の害惡たるところを知らねばならぬ。人間が一旦盲目となり、理性を失ひ、民族

の相違を無視して雜婚に雜婚を重ねて行けば、その結果は眞に恐るべきものがあるのである。卽ち優秀な民族の血は何時しか消えて謂はば民族の雜炊が出來あがるであらう。今日の愚かな社會改良論者から見れば、かやうな民族の雜炊こそ人類の理想であるかも知れぬが、世界から理想といふ理想を悉く驅逐してしまふものもこの民族の雜炊であらう。かくの如き雜婚によつて出來上るものは人獸ともいふべき生物の集團であつて、斷じて文化を享受する民族、否、文化を創造し建設する民族ではないのである。從つて人類がかゝる雜婚を行ふに至れば、人類本來の使命は失はれたものと見るほかはない。

人若し世界を擧げてかゝる人獸の舞臺となすを欲しないならば、先づ人類の雜婚を防がねばならぬ。特にゲルマン民族の國家にあつては、今後雜婚を嚴禁してゲルマン民族の血の純潔を確保するに努めなければならぬ。

かく言へば、世間の弱蟲は直ちに抗議をなすであらう。そして、異民族との結婚を禁止するのは最も神聖なる人權を侵害するものであると叫ぶであらう。

併し、それは誤りである。世の中に最も神聖なる人權なるものはたゞ一つしかなく、而も、その人權は權利であると同時に最も神聖なる義務である。然らば最も神聖なる義務とは何か。それは、民族の血の純潔を維持し、最も優秀なる民族の存續を確保して以て人類の文化の向上發展をはかることである。

それ故、民族主義を奉ずる國家は先づ第一に雜婚の禁止を以てその任務としなければならぬ。結婚は元來神聖なものであつて、神の似姿たる優秀な人間を造るために行ふべきものであるから、國家は今日行はれてゐる如き雜婚によつて民族が侮辱せられ、半人半猿の怪物が生れるのを默認すべきでない。

世間には所謂人道主義を振りかざして雜婚の禁止に反對するものもある。ここにも當今の墮落した世相がまざまざと現れてゐる。現在では、如何に心身の頽廢墮落せる者でも結婚して子供を造ることを許されてゐる。固よりかやうな者の子供は心身共に健全でないから生きて行くのに非常に苦勞をし、世間へも多大の迷惑をかけるが、兎に角子孫を繁殖させて行けるのである。これに反し

て心身の健全な者は、當今では却つて繁殖を制限せられてゐる。今日では何所の藥屋でも產兒制限の藥を賣つてゐる。街頭の商人も怪しげな器具を賣つてゐる。そして、健康な者すらそれを買つてゐるのである。これが罪惡でなくて何であるか。然るに、安寧秩序の維持を旨とする今日の國家では、またその代表者の眼には、性病や肺病の患者、惡質の遺傳を有する者、不具、白痴などの斷種は罪惡であるが、最も優秀な國民數百萬の繁殖を制限することは少しも惡事でなく、所謂神聖な社會の醇風美俗に反しないのである。否、所謂國民主義を奉じ、自ら國家の代表者を以て任じながら、臆病で而も懶怠で國家國民の將來を考へようとしないブルジョアにとつては、國民の產兒を制限することの方が氣樂なのである。臆病でなく懶怠でなければ、今日のドイツ國民中の最も健全なる者のためにその生活を維持し、食糧を確保するに必要な措置を講ずべきで、さすれば、これらの健全なる者も他日ドイツ國民の中堅として子孫のために同樣の措置を講ずるであらう。

質の惡い者の繁殖を助けて質の良い者の繁殖を妨げる現在のドイツ政府の遣り方は言語道斷といふべきである。ドイツの將來を慮つて質の最も良い者を養成しようとはせず、何もかも世間の風潮に委せて顧みないのである。尤も政府の遣り方ばかりが惡いのではない。神の似姿たる人間を瀆してゐることに於てはドイツの教會も同罪といはねばならぬ。ドイツの教會は、人間が神の似姿として造られた所以を說き、頻りに魂の救濟を口にしながら、その魂の持ち主たる人間を墮落するに委せてゐたのである。それ故、ドイツでは、基督教は餘り榮えず、體位の低下した國民は自然に精神の墮落をも來して『無信仰』に陷るに至つた。然るにドイツの教會は、教會自身の遣り方の間違つてゐることを棚に上げて、暗い顏をしながらドイツ國民の救ひ難きに呆れ、その怖るべき『無信仰』に驚き、ホッテントットやズールーなどの蠻族に神の祝福を說いて窃かにドイツ國內に於ける宣教の失敗の埋め合せをしようとしてゐる。ヨーロッパの國民が肉體的にも精神的にも頽廢して恰も癲病患者の如き狀態に墮落してゐ

る時に、敬虔な宣教師がかくの如くアフリカの奥地へ入り込んで黒人のために神の教會を建ててゐるといふのは全く奇怪な話である。況して、ヨーロッパの『高等な文化』が宣教師によつてアフリカの奥地へ移されれば、身體こそ健康でも本質の劣等な原始民族とヨーロッパの高等な民族との混血によつて見るも慘めな雜種が現れて來るに決つてゐるに於てをやである。

黒人は基督教の傳道を望みもしなければ、説教を聞いたところで解りもしなからう。さすれば、舊教の僧侶にせよ、新教の牧師にせよ、そんな黒人の所へ押しかけて教化に努めるよりも、寧ろヨーロッパにゐてヨーロッパの人々に親切を以て眞劍に神の福音を説き聞かせた方がどれほど殊勝か分らぬ。弱い子供は當人が難儀するばかりでなく周圍の者にも迷惑をかける。それ故、身體の健康でない夫婦があつたら、弱い自分の子供を産むよりも丈夫で貧乏な孤兒を引き取り、親代りになつて育ててやる方が遙かに神の思召にかなふ所以である、といふやうなことを説く方が牧師の仕事としてどれだけ尊いか分らぬのである。

以上に述べた如く、今日では政府も教會も一般世間も種族の問題を悉く閑却してゐるが、民族主義の國家はこの閑却せられてゐる問題を取り上げなければならぬ。卽ち、先づ種族の問題を國家の生活の中心に置き、種族の純潔を保持するに努めなければならぬ。世の中に寶は多いが國家にとつて子供ほど貴い寶はない。民族主義の國家はこの道理を國民に對して明かに說き示さねばならぬ。民族主義の國家では、健康な者でなければ子供を儲けてはならぬ。己が病弱であつたり、心身に缺陷のあつたりする人間が子供を生むことほど甚しい恥辱はなく、かやうな人間が子供を作るのを斷念することほど貴むべき名譽はない。民族主義の國家はこの道理をも國民に對して說き知らせなければならぬ。病弱な人間は子供を儲けてはならぬが、健康な人間が國家のために健康な子供を生むことを忌避するのも罪惡として非難せられなければならぬ。民族主義の國家は民族永遠の發展を圖るべきものであるから、個人の結婚に對しても干涉するのが當然である。民族の將來といふことから考へれば個人の希望とか慾望

とかいふものは問題にならない。そこで、國家は、最も進んだ醫學の力を借りて、病弱な者の子孫の病弱なる所以を說明し、一見して病氣があると思はれる者とか、或は確かに惡疾の遺傳を受けてをり、從つて結婚すれば必ずその惡疾を子供に遺傳さすべき者とかに對しては生殖不能者の宣告を與へ、また實際にその宣告に從つて實行しなければならぬ。同時に、國家は健康な婦人が子供をどしどし產むことの出來るやうにしてやらねばならぬ。政府の財政の不始末から子寶が却つて兩親の重荷になるやうでは駄目である。子供が多くても生活して行けるやうでなければ子供を生みたがるものはゐなからう。然るに、今日では誰もそんなことに心を配つてやるものがない。怠惰といはうか、犯罪といはうか、冷淡無頓着も玆に至つて極まれりといふべきであるが、民族主義の國家はこれではならぬ。國民の最も尊い寶であるところの子供の最高の保護者を以て自任し、成人よりも寧ろ子供を大切にしなければならぬ。

身體も精神も健康でなく劣等な者は、その心身の病氣を子孫に遺傳させては

ならぬ。この事を國民の間に徹底せしめるには教育によらねばならぬ。而してこの教育は民族主義の國家の遂行すべき大事業である。今日のブルジョアの世界では、最も重大なる事業は戰爭である。勝ち戰さである。ところが、遺傳の大切な事を國民に徹底せしむべき教育は戰爭よりも更に遙かに重大なる事業である。抑〻、人間病弱なるは恥辱でなくて不運である。併し、自分が病弱でありながら利己主義に囚はれ、情欲を制することが出來なくて結婚し、子供にまで惡疾を傳へ、罪のない子供を不幸に陷れるのは罪惡であり、恥辱である。これに反して、不運にも病弱に生れついた者が、自分の子供を生むことを斷念し、他人の子供でも健康で他日有爲な國民となり得べき貧しい子供を引き取り、情愛をもつてこれを養ひ育てるのは、志操から言つても人情から言つても眞に敬服すべきことである。國家は先づかやうなことを國民の一人々々に教へ込まねばならぬ。勿論、國家の仕事は何事でも口先だけに止まつてはならぬ。故に、精神方面から國民をかやうに教育すると共に國家はその信ずる所をどし

どし實行しなければならぬ。國民が理解しようと、理解しまいと、或は國民が賛成しようと、反對しようと、國家はそんなことに頓着せずに、是と信じた所を直ちに實行すべきである。

身體の弱い者や精神の劣つた者の繁殖をせめて六百年も續けて制限すれば、人類は無量の不幸を免れ、今日何人も想像し得ぬやうな健康な世界が出來上るであらう。國民の中の最も健康な者だけが繁殖するやうに計畫を立て、それを實行してゆけば、今日見るが如き身體も精神も墮落した者は跡を斷ち、ひと先づ健康な者ばかりが殘ることにならう。何故かと言へば、一旦國家の方針が健康な者だけに繁殖を許すことに決まれば、それからは國民の一人々々が自らこれに準ひ、種族の發展にとつて最も大切な健康な者を尊び、その繁殖を促し、結局國民全體が次代の優秀民族を造り出すことに努めるやうになるからである。

かくの如く國家が次代の優秀民族を造り出すのにも道がある。就中大切なこ

とは、國家が新たに領土を得て其所へ植民を行ふ場合に、漫然とこれを爲さず、特別の規則に從つてこれを行ふことである。卽ち、先づ種族委員會とでもいふべきものを特設して移住を希望する者の素性を調べ、種族の純潔を保つてゐる者だけに移住許可證を與へることにする。かくすれば、例へばドイツ人の中でも血液が最も純粹で、從つて最も元氣な者ばかりを住民とする植民地がだんだんと國境附近に出來あがるであらう。これらの移民は國民の至寶ともいふべきもので、その發展は國民に誇と樂しい期待とを與へ、ドイツ國民のみならず人類全般の向上をも約束するものといふべきである。

近頃の人間は、犬や馬や猫に對してはそれらの種の改良に夢中になつてゐるが、人間の向上には一向に頓着しない。民族主義の世界觀を奉ずる國家ではこんなことを止めて、人間の間でも疾患のある者は自ら省みて默つて己の子孫を絕つやうにさせなければならぬ。厭や厭やながら政府の遣り方に從ふのでなく、喜んで自ら犧牲になるやうにさせるべきである。

世の中には他人の難しとする禁欲生活を何らの不平も言はずに自ら進んで行ふものが何萬もゐる。彼等をして玆に到らしめるものはたゞ教會の誡律のみであつて、その他に彼等を强制するものは何もないのである。誡律にさへこれほどの力があるとすれば、民族主義の國家では國民に民族の血の純潔を確保することの必要を敎へてこれを守らせることも出來る筈である。

卽ち、國民に警告を與へて、民族の血を汚すことの如何に怖るべきかを敎へ、左樣な罪を犯すことを止めて全能の神の造り給ひしやうな人間を生むことに努めよと誡めれば、國民の間でも疾患のある者は禁欲生活を何らの不平も言はずに自ら進んで行ひ得るやうになるに違ひない。

勿論、今日の所謂市民階級は因循にして愼むべき徒輩ばかりであるから、自分が今かやうなことを言つても理解しては呉れまい。或は初から莫迦にして對手にせず、或は嘲笑して、いつもの口癖で『成る程、それはそれとして甚だ結構だが、さて實行はどうかね』と反問するであらう。かくの如き徒輩に對して

はたゞ次のやうに答へるであらう。勿論、君等にこんなことの出來る道理はない。君等はお話にならぬ人間ではないか。心配してゐることといへば君等個人の生活のことだけで、拜む神といへば黃金の他にはないでないか。我等は君等と事を共にしようとは思はぬ。賴みに思ふものは、君等の如く一にも金、二にも金と、金を拜みながら金のお蔭で此の世を樂に暮してゐる者ではない。君等には生活は無上の幸福であらうが、世の中には食ふや食はずの貧しい者もある。かやうな人々には君等の如き生活はそれほど有難いものではない。自分が望をかけるのはかくの如き貧しい人々である。個人の生活のみに執着せず、金よりもなほ貴むべきものが他にあることを心得てゐる人々である。その中でも殊に我等が望を囑するのはドイツの夥しい青年である。ドイツの青年は今一大轉換期に臨んでゐる。彼等の父祖が或は怠惰のため或は無頓着のために犯すに至つた罪惡の結果を眼の當りに見れば、彼等青年は必ずや奮起せざるを得ないに違ひない。奮起して民族主義の新しい國家を建設するに違ひない。然らざ

れば、ドイツが全く瓦解し、ブルジョアの世界が終末を告ぐるのを目擊せざるを得ないであらう。

社會に幾多の缺點があるのを知つてゐながら敢てこれを除かんとせず、否、どうにも仕樣がないではないかで濟ましてゐるのが今日のブルジョア社會の弊風であるが、抑〻これがいけないのである。惡いと知つてゐながらこれを改めないやうな社會は滅びるに決つてゐる。ドイツのブルジョアも、社會に缺陷のあることは最早や否み得なくなつてゐる。色々な方面に腐敗や墮落を認めざるを得なくなつてゐる。然るに、ドイツのブルジョアはこれらの缺陷を除かうとしない。ドイツは六七千萬の國民を有するではないか。これだけの國民の力を動員して必死に抵抗すれば、どんな危險をも阻止し得ようではないか。然るに、ドイツのブルジョアはこれをやらない。否、これをやらないばかりでなく、誰か身を挺してこれを行はんとする者があると、莫迦げた皮肉を言つたり、或は遠くから眺めてゐて、そんなことは理論上不可能だとか、とても成功

するものでないとか、惡口ばかり言ふ。そして、彼等自身の下劣な根性や心構へを糊塗するために愚にもつかぬ理窟を並べたてるのである。一例を禁酒運動に取つて見よう。アメリカでは國民を酒の猛毒から救はうとして禁酒を斷行した。然るに、ヨーロッパのブルジョアはこれに對してどんな態度を取つたか。彼等はたゞ意味もなく眼を睜つてみせたり、頭を振つてみせたり、高くとまつて例のブルジョア社會特有の變な笑ひ方をしてみせたばかりである。禁酒運動に限らず何事に對しても、ブルジョアの態度は眞面目でない。世界の何所かで新しい運動が起きて、從來崇高不可侵と考へられてゐたところの因襲と戰ひ、而もブルジョアから笑殺せられながら着々成功を收め始めると、彼等は先づその成果を疑つてみせ、定つてけちをつける。新しい運動が甚しい不道德を排除せんとするものであつても、ブルジョアはブルジョア道德の立場からこれに抗爭して憚らないのである。

要するに、今日のブルジョアは既に腐りきつて役に立たず、人類の崇高な任

務を果すことは出來なくなつてゐる。これは否むべからざる事實である。併し、彼等がかくの如く腐りきつたのは、自分の見る所では、彼等が自ら邪惡を求めたためでなく、殆んど信じられぬほど無關心となり、無頓着となり、惹いて色色樣々な惡德に囚はれるに至つたためである。所謂『ブルジョアの政黨』が既に夙に公黨たる性質を失つて、一部の專ら私利を營む職業團體や階級を代表することを以て最高の使命とする政治倶樂部に墮し去つたのもそのためである。かくの如きブルジョアの政治組合が、他のことはいざ知らず、鬪爭の役に立たぬことは分り切つてゐる。特に鬪爭の對手がお上品な連中でなく、鬪志も熾んで決心も固いプロレタリア大衆である場合、これを向ふに廻して太刀打をするといふことは到底出來ることでない。

卐

民族主義の國家の第一使命が國民中最良分子を保存し、これを繁殖せしめて

國民の福祉を增進するにありとすれば、政府の任務も單に國民の間に子供が生れるまでの世話に止まつてはならぬ筈で、生れて來た子供が國家の將來のために必要な立派な人間に育つまで面倒を見てやらねばならぬことは言ふまでもない。

概して人間の精神的能力はその人間の屬する人種の健全な素質に由來するものであるが、個人を教育する場合にも先づ身體の健康といふことに着眼してこれが促進に留意しなければならぬ。一般に、剛健なる精神は剛健なる身體に宿るものである。天才には身體の良くない人もあり、病氣を持つてゐる人もあるが、天才は例外のものであるから、これを以て一般を律するわけには行かぬ。例外のない規則といふものは何所にもないのである。若し、國民の大部分の體位が低下してをれば、かくの如き國民の中から眞の偉人が出て來ることは先づないといつてよく、假令出て來たにしても決して大きな仕事はなし得ないであらう。國民は體位の低下につれて精神も衰へ、氣力をも失ふから、偉人の

爲すことを理解し得ず、恰も小雀が天かける荒鷲に躍いて飛び得ない如く、偉人の後に躍いて行くことが出來ないのである。

そこで、民族主義の國家では、國民の子弟を教育するに當つて、子弟に單なる知識を注ぎ込むことを避け、先づ身體を丈夫に鍛へ上げることに努むべきで、精神的能力を育成するのは二の次である。この精神的能力を育成する場合でも、先づ第一に力を用ゐるべきは品性の陶冶であつて、旺盛なる責任感と强固なる意力との養成に努めねばならぬ。所謂知育はその次でよいのである。

民族主義の國家では、教育の方針を定めるに當つて、學問はあまり深くなくても、身體が丈夫で、品性が高く、意力が旺んで、氣象のしつかりした者の方が國家にとつて多病の才子よりも貴いとしなければならぬ。國民が揃つて學者であつても、身體が弱く、意志も薄弱で、平和平和と女々しいことばかり唱へるやうでは、天下に號令し得ないのは勿論のこと、國民として生存を續けることすら出來ないであらう。人類の宿命たる激烈な生存競爭に於て、敗れて滅び

る者は知識のない者でなくて知識の有り過ぎる者である。知識が有り過ぎるために思ひ切つた決斷が着かず、決斷が着いてもそれを實行に移すことの出來ない連中である。又、總て自然の現象には調和といふことがあるが、人間の場合でも心身の調和がとれてゐなければ駄目である。腐つた身體は輝かしい精神を吹き込んだところで一向に美しくはならない。否、如何に學問があり、教養があつても、身體が惡く、品性が下劣で、意志も弱く、氣象がぐらついてゐるやうでは何の役にも立たぬのである。人間は學問よりも健康が大事である。理想を言へば、學問と健康と兼ね備つてゐるに越したことはない。ギリシャ人は美しい身體と輝かしい知慧と高貴な魂との結合を美の理想とした。この結合が非常に立派に出來上つてゐるから、ギリシャ人の造り出した美は今日に至るまで不滅に殘つてゐるのである。

曾てモルトケは『長い眼で見れば結局は有爲な者のみが幸福である』と言つた。果してその通りであるとすれば、身體と精神との關係に就いても『長い眼

で見れば健全なる精神は通例健全なる身體にのみ宿る』といふことが確かに言へる。

今日では、體育のことは個人の問題として當人或はその兩親の自由に委されてをり、社會や國家は無關心の態度を取つてゐるが、民族主義の國家ではこんなことではいけない。國民を保護してその生存の維持を圖るのが國家の任務であり、それには國民の健康を促進しなければならぬのであるから、體育に就いては當人よりも兩親よりも國家が世話をしなければならぬ。學問の方では今日既に國家の干渉が行はれてゐる。卽ち國民の義務敎育がそれであつて、個人の自由を認めず、兩親の欲すると欲せざるとに拘らず、國家がこれを國家のために必要と認めて兒童に就學を强制してゐる。民族主義の國家では、この干渉を體育の方にも及ぼし、否、國家の權力を一層强く行使して國民の將來に關する個人の無知、無理解を打破すべきである。卽ち、兒童の健康に小さい時から注意し、大人になつてからの生活に堪へられるやうに身體を鍛へてやり、部屋に

閉ぢこもつてばかりゐるやうな弱蟲を世に送り出さぬやうにしなければならぬ。

かくの如き體育は先づ若い母親から始めなければならぬ。若い母親でも十分に教育を受ければ子供に正しい體育を施し得るに違ひない。昔は衞生思想が普及せず、産褥熱で倒れる母親が多かつたが、多年努力の結果、今日では消毒の方法も發達し、産褥熱で倒れる母親は極めて少くなつた。して見れば、母親や母親になるべき女性の頭を根本的に改造すれば、子供の體育のことも子供の生後數個年の間に母親の手でうまく行はれ、子供の將來の成長に必要な素地を造ることが出來るやうになるに違ひないのである。

學校にしても、民族主義の國家では體育のためにもつと多くの時間を割くべきである。現在のやうに、年端もゆかぬ子供の頭に無闇矢鱈と知識を詰め込むのはよくない。經驗から言ふと、兒童は澤山注ぎ込まれてもそれを皆覺えてゐるものでなく、その上取捨選擇の能力がないから、本質的な肝心な事は忘れて

末梢的な要らぬことばかり憶えてゐる場合が多い。中等學校でも、今日では體操は一週僅かに二時間そこそこで、その上正課でなく隨意科目になつてゐるが、知育との均衡を失してゐるといはねばならぬ。少年や青年は必ず毎日午前と午後とに少くとも一時間づつ色々な競技や體操を行つて身體を鍛錬すべきである。競技には色々な種類があるが、身體を鍛錬するのに持つて來いの競技として見遁してならぬのは例の拳闘である。拳闘に就いては『民族主義者』を以て自任する連中すら誤解して、拳闘は野蠻で下品なものと思ひ込んでをり、又、所謂『教養のある』連中の間には、青年が劍術を學んで決闘するのは當り前で名譽なことであるが、拳闘をやるのは野蠻だといふ考へ方が弘く行はれてゐる。飛んでもない間違ひである。拳闘をやるのがどうして野蠻なのか。競技の種類は多いが、攻撃精神を養ひ、電光石火の決斷力を培ひ、身體のこなしを良くして鋼の如く強靭にする競技は拳闘を措いて他にないではないか。青年が議論の結末を着けるのに拳骨に訴へるのは野蠻だが、劍を振り廻すのは良いと

いふ理窟はあるまい。賣られた喧嘩は買ふべきで、その方が逃げて行つてお巡りさんを呼んで來るより男らしいではないか。殊に若い健康な子供は打たれても叩かれてもそれに堪へ得るやうに鍛へねばならぬ。こんなことを聞くと當今の口舌の闘士はまたしても野蠻だといふであらう。併し、民族主義の國家の使命は女々しい文學青年や身體の惡い癈人の聚落を造りあげることでない。小廉の市民や曲謹の老嬢は民族主義の國家の理想とする人間でない。民族主義の國家は逞しく男らしい男と男らしい男を生み得る女とを理想の人間として求めるのである。

元來、競技なるものは、單に各人の身體を強くし、その動作を敏捷にし、その氣象を剛膽ならしめるためばかりのものでなく、人類の不義不正にも挫折せず、逆境に堪へ得るやうに心身を鍛錬するためのものである。

顧みれば、革命前のドイツ上流の子弟はお上品一方に育てられたものであつた。若し、あのやうに禮儀作法ばかり教へられず、拳闘でも習つて心身を鍛へ

てゐたならば、ドイツに革命は起らなかつたであらう。革命が成功したのは、革命を起した女衒や逃亡兵や其の他の無賴漢が剛膽果敢で實力を具へてゐたためではなくて、國家を指導し國運を雙肩に擔ふべき地位にあつた者が甚しく卑怯で、優柔不斷、無氣力であつたためである。これといふのもドイツの指導階級に屬する者が餘りにも『頭腦』ばかりの教育を受けて來たためにほかならぬ。一にも頭腦、二にも頭腦と、學問ばかりで育てられた人間は、對手が學問で來れば良いが、さもなくて鐵挺で來ようものなら、ひとたまりもなく參つてしまふ。革命前のドイツの指導階級はかやうな人々のみによつて成つてゐたのである。これも畢竟はドイツ從來の教育の罪である。ドイツの高等教育は專ら官吏、技師、化學者、法學者、文學者などを作り、更にこれらの精神者流の涸渴を防がんがために教授を作ることのみを知つて、肝心要めの男を造ることを忘れてゐたのである。

ドイツの指導階級は知識の方面では常に立派な仕事をして來たが、意力の方

面では殆んど常に碌なことをせず、言語道斷であつた。

思ふに、生來臆病な人間は、教育の力を以てしてもこれを勇氣のある人間に造り上げることは出來ないであらう。併し、また、他方に於て、生來臆病でなくても、體育を疎かにしたために體力もその練磨も他人に劣るに至り、惹いて天與の素質を發揮することが出來なくなつた者も世の中には少からずある。人間は身體が弱いと氣も弱くなり勝ちのものであるが、體力に自信がつくと氣も強くなり、勇氣も出れば、攻擊精神も醒めてくるものである。軍隊を見るとこのことがよく分る。大戰勃發當時のドイツの軍隊はあのやうに勇敢であつたが、あの軍隊だつて英雄ばかりゐたわけではないので、寧ろ凡人ばかりが揃つてゐたのである。たゞ、ドイツの兵隊は平時に於て優秀な教育を受け、ドイツ軍の優越を疑はざる自信を敵國の想ひも及ばざるほど深く叩き込まれてゐたのである。一九一四年の夏から秋にかけてドイツ軍が前進に前進を續けて旺盛なる攻擊精神と無類の剛勇とを發揮し得たのは、平時から兵隊の身體を鍛へに鍛

へた賜物であり、身體の餘り丈夫でなかつた兵隊でも倦まず撓まず鍛へられたために殆んど信じ難いほどの能力を發揮し、凄絶極まる激戰のまつたゞ中に於てすら微動だもしない强固な自信を堅持し得るに至つたからである。

今日、ドイツは瓦解して外國の蹂躙するまゝになつてゐるが、この秋に當つて最も必要なことは、ドイツ國民に自信を持たせることである。ドイツ國民の優越を疑はざる自信を持たせることである。ところでドイツ國民にこの自信を持たせるためには、これを子供の時から教へ込まねばならぬ。子供を教育するに當つて、ドイツの國民は如何なる外國の國民よりも優秀であり、體力に於てもその練磨に於ても無敵であるとの確信を與へることに努めなければならぬ。曾てドイツの兵隊は一人一人が己に對して自信を有してゐたのみならず、指揮官をも信賴してゐた。これ卽ちドイツ軍が勝利を收め得た所以である。ドイツの國民にしても、自由を恢復し得ることを確信するに至れば必ずや再び立ち上るであらうが、國民がこの確信を得るためには先づ國民の一人一人が同じやう

に己に對して自信を有するやうにならなければならぬ。

併し、教育を改めるといふことはなかなか容易な業ではない。これを簡單に考へると飛んでもないことになる。

ドイツの瓦解は史上にその類を見ないほど甚しいものであり、一朝一夕のことでなく、由つて來る所が遠いのであるから、國民が今日の窮境を脱するのも僅少の歳月のよくするところではない。ドイツの國民は今日までブルジョア教育に誤られて秩序治安の現狀維持に汲々たるおとなしい人間になつてしまつたが、世界の秩序を今日のまゝに維持することはドイツを永久に滅亡せしめることにほかならぬ。國民にして今日の屈辱を雪ぎたければ、ドイツを縛つてゐる奴隷の鐵鎖を斷ち切つて敵の顏へ叩きつけてやらねばならぬ。これは生やさしいことではない。これだけのことをするには、國民が意力を養ひ、擧つて自由を求め、激しい情熱に燃えて大いに努力する必要がある。かくして初めて從來成し得なかつたことを成し遂げて再び國運を挽回し得るのである。

卐

青少年の教育が上述の如く體育に重きを置くべきものであるとすれば、青少年の服裝もこの目的に副ふものでなければならぬ。然るに、當今の若い者は徒らに流行を追つて變な恰好をしてゐる。諺に『馬子にも衣裳』といふが、彼等は恰もこの諺の意味を取り違へてゐるかの如くで、まことに見るに耐へないものがある。

これではいけない。青少年の服裝は今言つた如く教育の目的に副はなければならぬ。若い者が眞夏といふのに長い喇叭ズボンを穿き、襟元まですつかり包まる上衣を着てそこらをうろつき歩いてゐるやうでは駄目で、着物に氣を取られるから身體の鍛錬などは思ひも及ばぬことになる。總じて若い者は服裝に氣を遣ふべきでなく、立派な身體を誇るべきである。世人は自慢や見榮を惡くいふが、自慢も見榮も事と場合によつては一概に排斥すべきでない。滅多に買へ

ないやうな美々しい着物を着て見榮を張るのはよくないが、鍛へさへすれば誰でも造り得る立派な逞しい身體を自慢するのは甚だ結構なことであるから、青少年には先づこのことを敎へ込む必要がある。そのためには先づ服裝から改めてかゝらねばならぬ。

若い者が運動に適する服裝をして肉體の美を露はに見せるといふことは國民の將來のためにも良いことである。處女が夫となるべき青年をよく知つてゐるといふことは大切なことで、今日では肉體の美が輕んぜられてお洒落が流行し、醜い身體も着物に包まれて外に見えなくなつてゐるが、昔のやうに身體の美醜が外から一目見て分るやうになつてゐれば、多くの女子が外觀ばかり着飾つたがに股の醜いユダヤ人の男どもに迷はされ、誑らかされて、あたら一生を誤ることもなくならうと思はれる。又、美しい身體を持つた者は子孫にも美しい身體を傳へ、惹いて國民全體の身體を立派にするといふことにもなる。

以前には學校で體育を疎かにしても軍隊に入れば身體を鍛へ直して貰へたの

であるが、今日のドイツにはこの肝心な軍隊教育といふものがないのであるから、以上に述べた如くドイツの青年子女の體育はこれを幼少の頃から行ふことが甚だ必要である。又、以前の軍隊教育は一人々々を鍛錬したのみならず、男女兩性の關係にも影響を及ぼしてゐた。軍隊に行つて來た者は軍隊に行かない者に比べて若い娘に喜ばれたものである。

民族主義の國家では子供が義務教育を受けてゐる間だけ體育を實施し、監督をなし、義務教育を終へてしまへば放任して顧みないといふが如きことをせず、學校を卒業した後も子供の身體がなほ發育を續けてゐる間は、この發育を助けて立派な身體を造り上げてやるやうに面倒を見てやらねばならぬ。青年を監督するのは國家の權利である。この權利は青年が學校を卒業すると共に消滅し、青年が軍隊に入ると共に復活するといふやうなものではない。青年を監督するのは國家の權利であると共に常時不斷に履行しなければならぬ義務である。然るに、今日の國家は健全な國民を造ることに興味を有しないから、不埒

にもこの義務を無視し、青年子女を監督せず、その體育にも配慮せず、彼等を街上や遊里に放置して顧みない。こんなことでは何時まで經つても健全な男女國民の出來あがる筈はない。

右に述べた如く青少年を教育するのが國家の義務であるとすれば、然らば如何なる方法を以てこの義務を果すかといふことが問題となるが、これに就いては今茲で論じなくても宜からう。寧ろ大切なことは國家が國家の手で青少年の教育を行ふといふことである。そのために有效な方法を眞面目に探求するといふことである。民族主義の國家では、單に知育の方面に於てのみならず體育の方面に於ても、學校を卒業した後の青少年を取締ることを以て國家の任務と心得、國家の施設によつてこれを遂行しなければならぬ。その際如何なる體育を施すべきかは今茲では論じないが、大體でいふと、學校を卒業した後の青少年の教育は他日軍人として服務すべき兵役の豫備教育たるべきであらう。戰前のドイツではかやうな豫備教育を行はなかつたから、壯丁は軍隊に入ると先づ極

めて簡單な操典の初歩から始めねばならなかつた。入隊前に豫備教育で身體を立派に造りあげて置けば、新兵として軍隊に入つてもこんな莫迦げたことをしなくて濟み、最初からもつと兵隊らしい兵隊になれるに違ひない。

戰前のドイツの軍隊では一人々々に『進め』から『止れ』まで教へ込まねばならなかつたが、民族主義の國家では、軍隊は青年に對して愛國的教育を施す最終最高の學校になる。軍隊は、壯丁が必要な武器の操作を學ぶと共に、將來の生活に必要な修養をも行ふ所になるのである。戰前のドイツの軍隊教育には非常に良い點があつた。卽ち、ドイツの青年は軍隊に入つて初めて一人前の男に仕上げられた。軍隊に於て服從を學び、それによつて他人に命令を下す要訣を覺えた。惡いことをして叱られる時は勿論のことであるが、必要な場合は假令惡いことをしないで叱られた時でも口ごたへをせず、默つて我慢するやうに教へられてゐた。民族主義の國家でも軍隊教育はかくの如き方針を取るべきである。

更に、ドイツの青年は軍隊に於て自信を養ひ、協同の精神を學び、ドイツ民族の比類なき所以を悟らねばならぬ。

兵役を終へて隊を出てゆくべき壯丁に對しては二通の證書を附與するが宜からうと思ふ。一は國民證書とでもいふべきもので、それを持つてをれば公務に就く場合に資格のあるものとして便宜が與へられる。他の一は健康證書とでもいふべきもので、それさへ持つてをれば健康な男として結婚して差支へないといふことになる。

民族主義の國家では、少女の教育も亦青少年の教育と同一の方針で行ふべきである。卽ち、少女の教育にあつても體育が第一で品性の陶冶や學問は第二、第三である。女子教育の目標は徹頭徹尾良妻賢母でなくてはならぬ。

卐

右に述べた如く民族主義の國家では教育の主眼は體育にあり、品性の陶冶は

第二であるが、第二だからといつて疎かにしてよいといふものではない。これもまた努めて行はねばならぬ。

人間の性質の中でも重要なものは人それぞれに生れついてゐるといへる。確かにさういへる。生來利己主義の人間は死ぬるまで利己的であり、生來理想主義の人間は死ぬるまで理想主義を捨てない。確かにこの通りであるが、併し、世の中には性格が一目瞭然にはつきりした人間ばかりゐるわけでなく、曖昧模糊たる人間も無數にゐるのである。生來の惡人は眼をつぶるまで惡人であつて、こんなのは何うにもしやうがないが、ほんの少しばかり惡人の素質を持つて生れて來たやうな人間は、正しい教育さへ受ければ立派な國民になる。又、逆に、それほど惡くない人間でも正しくない教育を受けると本當の惡人になつてしまふことがある。かく教育によつて善惡何れにもなる人間が世の中には澤山にゐるのである。

世界大戰中のことであるが、よくドイツの國民はどうもお喋言りでいけない

といはれたものである。ドイツ人は默つてゐられなくて何でも直ぐ喋言るから、大切な祕密さへわけもなく敵國へ洩れてしまつた事實がある。確かにこれは良くないことであるに違ひないが、併し、戰前のドイツの教育のことを考へて見れば、ドイツ人がお喋言りであることに何の不思議もない筈である。ドイツ人は寡言沈默といふことを教へて貰はなかつたのである。學校でさへ、先生に告げ口をする子供は賞められ、默つてゐる子供は賞められなかつた。告げ口をするのは子供の性質が『率直』だからで、立派なことであるが、默つてゐるのは强情のせゐで、唾棄すべきことであると考へたのである。現在でもドイツではかやうに考へられてゐる。概してドイツでは寡言沈默を男らしい美德として貴ぶべきことを教へたことがない。その證據に、今日でも、ドイツの學校では饒舌を擯斥しようとせず、そんなことはどうでもよい莫迦らしいこととして顧みられないのである。ドイツには名譽毀損や其の他で訴へたり、訴へられたりするものが非常に多く、國家はこれがために巨額の費用を使つてゐるが、こ

の種の訴訟の九割までは喋言りが原因になつてゐるのである。即ち學校で寡默の貴ぶべきことを敎へず、どうでもよい莫迦らしいこととして顧みないから起きるのである。こんなことはまだよいとして、恐しいのは誰かが無責任に喋言つたことが輕卒な人々の口の端を傳つて世間へ弘まることである。默つてをればよいのにうつかり喋言ると、工業上の重要な技術や何かが外國に洩れてドイツの經濟に多大の損失を與へることもある。否、外國に知らせてならぬ國防上の機密さへ國民のお喋言りから洩れて、折角の準備がすつかり駄目になることもあるのである。これが平時なら折角の準備が駄目になつたといふ程度の損害で濟むかも知れぬが、戰時になるとそれだけではすまない。國民のお喋言り好きが原因で軍隊が會戰に敗れ、そのために結局戰爭に負けてしまふといふやうなこともあり得るのである。愼むべきはお喋言りである。併し、何でもさうであるが、小さい時に習つておかなかつたことは後に行はうとしてもなかなか出來るものではないので、お喋言りの癖も子供の時に矯めておかないと年取つ

てからは直らぬものである。ところが、從來の學校の先生は奇怪なことをした。學校で小供が罪のない惡戲をして、先生に調べられても名乘つて出ないと、先生は生徒の中の誰かを摑まへて來てそれに犯人のことを喋言らせる。卽ち告げ口をさせるのである。これがいけない。子供には子供だけの世界があり、連帶觀念といふものがあつて、彼等は彼等だけで團結して大人と對立してゐる。これは今更言ふまでもないことである。十歲の少年は同じ年頃の少年と仲間になる方が大人と一緒になるよりも自然であり、當然である。それ故、少年が友達の告げ口をするのは卽ち仲間を賣るのであつて、これを大にして言へば國を賣るのである。國を賣るのも仲間を賣るのも畢竟は同じ性根の現れである。かやうな子供は『感心な、素直な』子供ではなく、性質の良くない子供と見るべきである。先生から言へば、告げ口の如き不德義を利用する方が先生の權威を高める上に便利であるかも知れぬが、これは童心を損ね、他日國を賣るが如き惡性の芽を植ゑつけるものである。小にして告げ口の好きであつた者が

長じて賣國奴になつた例は一再に止まらぬのである。

右に述べたことはほんの一例に過ぎぬが、今日でも學校の教育は品性の陶冶といふことを全く無視してゐる。これではいけないのであつて、將來はこの方面にも重きを置くやうにしなければならぬ。誠忠犧牲心は寡言沈默と共に大國民の必要缺くべからざる道德であつて、學校でこの道德を涵養することは今日の學校の教案に盛られてゐる色々なことよりも一層大切である。それから、また、めそめそと苦情を訴へたり、哀れつぽく泣言を並べたりするのも良くない癖であるから、學校ではこれをも矯正しなければならぬ。つらいことがあつても、侮辱を受けるやうなことがあつても、泣言をいはず齒を食ひしばつて堪へ忍ぶやうに子供の時から教へ込んでおかないと、他日いざといふ場合に愚痴ばかりこぼしてゐるやうになる。例へば、戰爭が起きて夫が出征することになると、女房は內地から愚痴の手紙を出し、夫は戰地から泣言の手紙をよこす。戰地と內地とをつなぐ郵便は愚痴と泣言との手紙の取次で手一杯といふことにな

る。これが一九一五年から一九一八年にかけてのドイツ人の實情であつたが、ドイツ人が國民學校時代から學問ばかりに偏らず、克己自制の精神を叩き込まれてゐたら、こんな醜態は演じなかつたであらう。

これを要するに、民族主義の國家では國民を教育するに當つて體育の次に品性の陶冶に重きを置かなければならぬ。今日のドイツ國民の道德的缺陷は甚だ多く、これを悉く矯正するは容易の業でないが、教育の方針を一變して上述の如く學問よりも體育と品性の陶冶とに重點を置くやうにすれば、少くとも現下の惡弊の一部は芟除し得るであらう。

卐

氣力と度胸との育成も責任觀念の涵養と共に缺くべからざるものである。

曾てドイツの軍隊では、不十分な命令でも出さぬよりは勝しといふことが謂はれてゐたが、これを青少年教育に適用すると、不十分な返答でもせぬよりは

勝しといふことになる。間違つたことを言ひはせぬかとそれを惧れて何も返答をしないのは恥づべきことである。青少年の教育はかやうな手近かな所から行ひ、だんだんと實行の度胸を養成するやうにしなければならぬ。

周知の如く、一九一八年十一月乃至十二月の革命に際しては、上はドイツ諸邦の王侯から下は師團長に至るまで一人として獨斷決行の勇氣を振ひ起すものなく、誰もが悉く手を束ねて爲す所を知らなかつた。遺憾ながらこれは否むべからざる事實であつた。これまたドイツの從來の教育が誤つてゐた結果であつて、それまで世人の氣にも留めなかつた缺陷が革命といふ重大事件に際して大きな醜い姿を取つて現れたのである。ドイツは今日外國から踏みつけにせられてゐながら本氣で抵抗しようとせず、意氣地なく忍從してゐるが、これとても一部の人々の言ふが如くドイツに武器がないためではなく、國民に氣力がないためである。今日のドイツは國を擧げて氣力を失つてゐるから、冒險を敢てするは大事をなす所以でないかの如く考へて、少しでも冒險と思はれるやうなこ

とには手を出さない。ドイツの或る將軍は『五割一分の成算が立たなければ動いてはならぬ』と言つたが、世の中にこれほど氣力のない臆病なことがあらうか。大きな仕事をするには危い橋をも渡らなければならぬといふことを知らぬためにこんなことを言つたのであらうが、ドイツに革命といふ悲劇が起きたのも、革命を阻止すべき者が空しく『五割一分の成算が立つ』のを待つてゐたからにほかならない。成功の保證を先づ運命に求めるやうな者は英雄的な思ひ切つた仕事を爲し得ないものである。良いと思つたら死を賭して行つて見るべきで、それでこそ仕事に値打がつく。手術をしなければ死ぬるに決つてゐる癌患者は、五割一分の成算が立つまではなどと言つてはゐられまい。助かる見込みは僅かに一分か五厘しかなくても、勇氣のある人間なら思ひ切つて手術を受けるであらう。また、かやうな人間なら仕事のためには生命を惜しまぬに違ひない。

思ふに、今日のドイツ人が氣力を有せず、怯懦にして決斷力に乏しきは、主

として從來の青少年教育が根本から間違つてゐたためである。誤れる教育の有害なる影響が何時までも消えず、その結果が爲政者の中に一人として度胸のある者がゐないといふことになつたのである。

責任の回避も亦排斥すべき惡弊である。責任の回避はドイツ今日の風潮であるが、これまた誤れる青少年教育の結果である。青少年教育の缺陷がそのまゝ公共生活に持ち込まれて弘く浸み渡り、議會政治といふ制度によつて彌〻益〻助長せられるに至つたのである。

ドイツの國民學校では子供が惡戯をした場合、如何にも後悔したやうに白狀したり、もうこれからは決して致しませんと詫びる子供は善い生徒とせられ、自ら進んで自分がやりましたといふ子供は惡い生徒とせられる。今日のドイツの國民學校の先生に言はせると、かやうに率直な生徒は度し難い惡性者で、ゆくゆくは絞首臺にも上りかねない末恐しい子供であるが、本當は率直に自己の行爲を認める子供の方が頼もしいので、かやうな子供が殖えて國民全體が率直

にならなければ駄目である。卽ち率直は寧ろ非常に大切な性質といふべきである。

これを要するに、民族主義の國家では、氣力と度胸との養成に深甚の注意を拂ふと共に旺盛なる責任觀念と自分の言動を潔く認める勇氣とを幼時から子供の胸底に植ゑつけなければならぬ。ドイツは種々なる宿弊に禍ひせられて今日の窮況に陷つたのであるが、上に述べた如き方針の必要を自覺して今後何百年か國民を敎育して行けば、やがて凡ゆる宿弊から脫却して今日のドイツとは全く違つた堅固な國家が出來あがるであらう。

五

次は知育である。今日のドイツでは、敎育と言へば主として知育であるが、ドイツの知育は少しばかり改良すれば民族主義の國家でも踏襲して差支へない。改良すべき點は三つある。

今日ドイツの學校で教へてゐることには無用なことが多い。九割五分までは役に立たず、從つて折角習つても直ぐ忘れてしまふやうなことばかりである。即ち今日の生徒は無用なことで惱まされてゐるが、民族主義の國家では先づ第一にこれを改めて、役にも立たぬことを生徒の頭腦に詰め込むやうなことを止めなければならぬ。又、特に今日の國民學校や中等學校で教へてゐることは全くどつちつかずの中途半端なことである。どの課目を見ても大抵は色々なことが山ほど盛り込まれてゐるが、あまり多すぎるから生徒の頭に入りきらず、頭に殘るのはほんの一部だけで、從つて生徒が世の中へ出て用ゐ得るものは學校で習つたことの極く僅かな部分である。それなら、學校で教へることは何もかも大切なことであるかといふと、さうでもなく、生徒が世の中へ出て何か專門の仕事をして飯を食つて行かうとするには、學校で教はつたことを一切合切殘らず覺えてゐても間に合はないのである。高等學校や專門學校を出て役人になつた人間を捉へて試して見るがよい。學校で頭が痛くなるほど勉强して來た連

中でも、三十五歳になり四十歳ともなれば、學校で詰め込んだ知識などは毛ほども殘つてゐないに違ひない。かく言ふと反對して喰つてかゝる人もあらう。『それはさうだが、併し、學校で色々なことを敎はるのは、單に色々なことを覺えて後々の役に立てるばかりではなく、更に頭腦を練り、思考力や特に記憶力を養ふためでもある』と。一應は尤もな話であるが、子供の頭腦といふものは、そんなに澤山のことを一時に詰め込まれても消化し切れるものでなく、また大切なこととさうでないこととを選り分けることも出來るものでないから、分りもしないことを無暗矢鱈に詰め込まれると、肝心のことを忘れて要りもしないことばかり覺える虞れがある。澤山のことを敎へるのは、單に子供の頭腦に澤山のことを詰め込むためでなく、生徒が他日世の中へ出て生活して行くに當り本人にも社會にも役に立つ知識を與へるためであるから、不用のことばかり覺えて肝心のことを忘れるやうでは、澤山のことを敎へ込まうとする本來の目的も達せられぬことになる。子供の時分にあまり澤山詰め込まれたために覺

え切れなくて、大人になつた時分にはもう何もかもすつかり忘れてゐるとか、或は一番大切なことを忘れてゐるといふのでは、骨を折つて教育する甲斐もなからうではないか。今日では何百萬といふ多數の生徒が學校で二つも三つもの外國語を學ばせられるが、折角習つた外國語を實際に生かして使ひ得るものは極く少數であつて、大抵の者は學校を出ると何時か忘れてしまふ。これも無駄なことである。例へば、十萬の生徒が學校でフランス語を教はつても、世の中へ出てそれを實際に活用するものは二千人あるかなしで、殘りの九萬八千人はその機會がないから、折角の知識を利用することも出來なくて生涯を終る人人である。かくも多數の生徒が學校で外國語のために費す時間は莫大なものであらうが、而もその外國語が何の役をもなさないとすれば、數千時間を無益の學科のために浪費したわけであるから、世の中にこれほど莫迦げたことはない。外國語を習ふのは一般的教養のためであるといふ者もあるが、それは誤りで、何を習つても生涯活用することが出來なければ教養にはならぬのである。

要するに、外國語を習つてもそれを實際に利用し得る人間は二千人しかゐないのに、この少數の人間のために九萬八千人といふ多數の人間が徒らに迷惑を蒙り、大切な時間を空費せしめられてゐるといふのが現狀である。

尤も、外國語とはいつてもラテン語は別である。ラテン語を勉强すると頭腦が緻密になり、物事を論理的に考へるやうになるから結構であるが、フランス語などを習つたとてそんな利益はない。それでも、學校ではどうしても生徒に外國語を教へねばならぬといふのなら、細かな煩瑣なことは止めて、その外國語の本質、その最も大切な骨格ともいふべきものを教へ、文法や發音の原則を授け、文章の構造などは範例で說明してやるべきである。一般の要求を充たすにはこれだけ教へておけば十分で、生徒にしても、その外國語を大體に亙つて會得し易く、記憶し易いから、無暗に詰め込む教へ方よりもこの方がどれほど良いか分らぬ。今日の如く何もかも殘らず教へ込むと、生徒はそれを使ひこなすことが出來ず、習つた後で直ぐまた忘れてしまふから何にもならぬが、右の

やうにして教へると、生徒はたゞ大切なことだけを勉强すればよく、而も大切なこととさうでないこととの選り分けは教へる方で先に行つてゐるのであるから、夥しく詰め込まれたものの中のあれやこれやを何の聯絡もなく個々別々に記憶するといふ虞れもなくなる。

學校で右のやうにして外國語を教へて置けば、世の中へ出て外國語を使ふ機會のない者にはこれで十分だし、又、世の中へ出てこれを實際に使ひたい者は、學校で習つたものを基礎として欲するまゝに研究を重ね、勉强をつゞけることが出來ることになる。

かくすれば授業に餘裕が出來てくるから、生徒はその時間を體育とか其の他前に述べたやうな大切な修養の方面に利用することが出來よう。

教育の方面には改良すべきものが多々あるが、就中歴史教育は是非とも從來のやり方を變へねばならぬ。世の中にドイツの國民ほど歴史の研究に熱心な國民はないといつてよいが、又、ドイツの國民ほど歴史の活用に拙劣な國民もな

い。歴史は現在の政治の過去への延長であり、政治は生成して行く歴史である以上、歴史教育と現在の政治活動の具合とは互に照應するものである。政治教育の改善を圖らずに政治活動の慘めな結果ばかりを見てかれこれ言つたところで何にもならない。ドイツ今日の歴史教育はなつてゐないから、その結果は九割九分まで取るに足らず、學生や生徒の頭に殘るものはくだらぬ出來事の日附か、さもなくば英雄豪傑の名や、その生れた年月日のやうなものばかりで、一貫した歴史の大筋はまるで記憶に殘らない。本當に大切で本質的なことは少しも教へず、澤山の日附や出來事を並べ立て、その中から事件の内面的原動力を搜り出すことを生徒の天分に委せておくといふのが今日の現狀である。かく言ふと、酷いことをいふといつて苦い顔をする者もあらうが、嘘言だと思つたら一度でもよいから議會の演說を聽いてみることである。議員といへば、大部分は少くとも中等學校を出たものであり、中には大學を出たものもあり、少くとも自分自身ではドイツ國民の選良を以て任じてゐる者である。然るに、かくの

如き議員が政治問題、特に外交問題に就いて論ずる演說の貧弱なことはどうであるか。これ卽ち彼等が正しい歷史教育を受けてゐない證據である。間違つた教育を受けたから飛んでもない議論をするのである。こんなことなら寧ろ歷史を學ばぬ方がましで、歷史を知らなくても健全な理性をさへ具へた人間なら、もつと正しいことを考へ、もつと正しいことを行ひ、國民のためにずつと役に立つに違ひない。

歷史教育に於て特に必要なことは、煩瑣なことを詰め込まずに治亂興亡の大筋を教へることである。さすれば、學ぶ者も益を受け、卽ち學んだことを他日利用することが出來、結局社會の役にも立つ。歷史を學ぶのは單に過去の出來事を知るがためでなく、將來のために必要なる教訓を過去に尋ね、國民の存續發展に必要なる指針を歷史に求めんがためである。この教訓を尋ね、指針を求めるのが歷史を學ぶ目的であつて、歷史を學ぶのはこの目的を達する手段に過ぎない。然るに、今日のドイツでは、歷史教育に於ても手段が目的になつてし

まひ、本來の目的といふものがまるで消えてなくなつてゐる。かく言ふとまた世間にはこれに反對して、歷史を深く研究するにはどうしても細かなことまで調べる必要がある、細かなことを知つて初めて歷史の大筋を摑み得るのではないかといふ者もあらう。併し、細かなことまで調べて歷史を深く研究するのは專門の歷史家のすることで、世間普通の人間にその必要はない。一般の人間は歷史の先生ではないのである。世間一般の人間が歷史を學ぶのは、國家國民の直面せる政局を見極め、これに對處するに必要なる識見を養ふためである。歷史家たらんとする者は學校を出た後で研究に努めるがよく、その場合に細かなことまで立ち入つて詮索すべきは言ふまでもないが、ドイツ今日の歷史教育なるものはかやうな專門家の基礎を造るには物足りないもので、普通一般の人間には繁雜に過ぎ、專門家には貧弱に過ぎるのである。

序でに言ふが、今日の世界歷史は人種問題の觀點から書き直されねばならぬ。これも亦民族主義の國家に於ては閑却してはならぬ問題である。

卐

これを要するに、民族主義の國家では、知育を行ふに當つて成るべく煩瑣なことを避け、大切な根本のことだけを教へるやうにし、それ以上のことは專門教育に委せなければならぬ。各個人は一般のことを大摑みに摑んでをればよく、たゞ世の中へ出た時になくてはならぬことだけを專門に深く學ぶべきである。事の大體を大摑みに摑むのは一般的な教養のためであるから、これだけは誰も必ず凡ゆる課目に亙つて修めねばならぬが、それ以上の專門に亙ることは各自の隨意に委せれば良い。

かやうにすれば課目も授業時間も少くなるから、これによつて生じた餘裕は前に述べた如く體育や品性の陶冶に利用し、氣力や決斷力の鍛錬に充當すべきである。

ドイツ今日の學校教育、特に中等學校の教育は甚だ不備であつて、世の中へ

出て身を立てるのには少しも役に立たない。その證據に今日では種類を全く異にする三つの學校の何れを出ても同じ地位に就き得るのである。卽ち、詰め込んだ專門の知識よりも一般的な教養が物を言つてゐるのである。又、專門の知識が入用であるとしたところで、前にも述べた如く今日の中等學校の教育にこれを求めることは勿論出來ない相談である。

かやうな中途半端は駄目であるから、民族主義の國家ではこれを排斥しなければならぬ。

卐

民族主義の國家から見て知育の方面で改むべき第二の點は次の通りである。

現代は物質文明の時代であるから、ドイツの學校でもだんだんと數學、物理、化學など實用的な學科に重きを置くに至つたのは當然で、工業と化學とが物を言ふ世の中であり、少くとも外觀ではこの二つが日常生活の最も顯著な特

徴をなしてゐるのであつて見れば、實科に重きを置くのも必要であらうが、一般の國民教育までがだんだんとこれに沒頭して他を顧みないやうになつては危險である。寧ろ一般の國民教育は實利よりも精神に重きを置き、修身に力を入れ、物理や化學などに就いては基礎的なことだけを授けるに止め、專門にやりたいものは上の學校で研究するやうにすれば良い。さうしないと飛んでもないことになる。國家國民の存續發展を期する上に於ては技術も其の他の學問も大切であらうが、それよりも更に大切なのは人間である。物理や化學にばかり力を入れるとこの肝心な人間が出來損なつてしまふのである。特に歴史教育に重きを置くべきは言ふまでもないが、この場合、古代のギリシャやローマの歴史を教へることを閑却してはならぬ。ローマ史の如きは、その大要を正しく會得すれば、單に現代のみならず永遠の指針たり得る立派な教訓である。ギリシャ文化の理想は典型的に美しい藝術作品の内に表れてゐるが、これをも看過せず重視して良く生徒に教へ込まなくてはならぬ。ヨーロッパは幾つかの國に分れ

て、その國民と國民との間には色々な差別があるが、ギリシャ人やローマ人と我等ドイツ人との間には同じ人種として血の繋りのあることを忘れてはならぬ。數千年の歳月を隔ててゐても、ギリシャ人とゲルマン人との間には切つても切れぬものがある。今日のヨーロッパの文化は要するにこのギリシャ人とゲルマン人とが數千年の歳月を超絶して相共に協力して造りあげたもので、今日世界に捲き起つてゐる國際文化闘爭も畢竟はこのギリシャ・ゲルマン文化の維持といふ一大目的のために行はれてゐるのである。

繰返して言ふが、一般の國民教育と特殊の專門教育とは明確に區別しなければならぬ。今日の專門教育は次第に墮落して財神の奴隷たらんとしてゐるから、かくの如き金儲け一點張りの傾向を掣肘するためにも、一般教育に於て精神に重きを置き、修身に力を入れる必要がある。況して商工業と雖も國民が理想を知らず道德を辨へない國家に於ては、繁榮しない。卽ち國民が唯物的でなく、利己的でなく、國家のために喜んで己を捨てるやうな心構へになつてゐな

くては繁榮しないのであるから、國民教育に當るものは愈〻深く心すべきである。

卐

大體、今日の青年教育なるものは、立身出世に必要な知識を青年に授けることを以て第一の目的としてゐる。それは、謂ふ所に依れば『青年は他日社會の有用な一員にならねばならぬ』からである。而して、この有用な一員になるといふことは、世の中へ出て月並みな方法で生活して行ける人間になるといふこと、飯の食ひはぐれのない人間になるといふことである。又、國家とか國民とかに關する教育も甚だ淺薄で成つてゐない。元來、國家は一つの形式に過ぎないのであるから、これに人間を引きつけ或は結びつけようとしてもそれは難かしい。形式とは容器のことで、容器は壞れ易い。而も、今日では、前にも述べた如く『國家』の眞の意義を知るものが少いのである。そこで、今日流行の『愛

國教育』といふやうなことでお茶を濁すやうになる。戰前のドイツでは、群小の王侯を神の如く祭り上げてそれを崇めるのを貴きこととし、ドイツの眞の偉人を尊ぶことなどは全く捨てて顧みられなかつた。全く無分別な教育をしたもので、莫迦な話であるが、お蔭でドイツの一般國民はドイツの歷史を殆んど知らぬといふことになつた。歷史の大筋を摑んでゐないといふことになつたのである。

かやうな教育を受けた國民が有事の際に本當の感激に燃えて國民として奮起するが如きは望んでも得られぬことで、得られぬのが寧ろ當然である。國民教育を行ふに當つては、過去の歷史の中から澤山の人物を賢愚大小の別なく取り出して來て無雜作に並べ立てることを止め、少數の偉人を抽き出して、ドイツ國民をしてこれこそ國民全體の共有せる大人物であることを知らしめ、齊しく感奮せしめて、これらの人物を中心に團結させるやうにしなければならぬ。然るに、ドイツの教育はそれを忘れてゐた。眞に偉大なる人物を選び出して、國

民にこれこそ卓絶せる國民的英傑であることを敎へ、國民の注意をこれに蒐め、以て國民の感情を統一しなければならぬ。然るに、ドイツの敎育はそれをしなかつた。人物のみならず國民の事蹟に就いても、單に色々な事件を羅列することを止め、國民の名譽となるべき偉大な事蹟を特筆して國民の矜持を高めるに努むべきであるが、ドイツの敎育はそれをしなかつた。恐らく、戰前のドイツでは、かくの如き敎育は偏狹な排他心を煽る愛國主義として好まれなかつたのであらう。恐らくは、王室中心の單純な愛國主義の方が穩便で、國民の熾烈な矜持から生れる情熱の方は過激と思はれたのであらう。王室中心の愛國主義で敎育して置けば、國民はいつでも唯々として命令に服するから御し易いが、國民の矜持を基にして敎育すると、國民は何時か上の言ふことを聽かなくなる虞れがある。王室中心の愛國主義は結局老兵倶樂部の專賣に終つてしまつたが、國民の情熱は一度び點火せられると何所まで燃えるか豫測を許さぬものがある。國民の情熱は悍馬の如きもので、誰が乘つても意のまゝに動く素直な

ものではない。卽ち、國民の矜持を中心とした愛國主義には王室中心主義者にとつてはかやうな危險がある。戰前のドイッ當局が國民に王室中心の愛國主義を吹き込んで國民の矜持を中心とした愛國主義を避けたのは當然のことである。泰平無事の時ならばこれでも宜からうが、何時か戰爭が起きて、砲彈は釣瓶擊ちに擊ち込まれ、毒瓦斯が戰場に渦卷くやうになると、愛國心も根本から試驗を受けてその堅否を暴露せざるを得なくなる。然るに、戰前のドイッ當局は夢にもかやうなことに想ひ到らなかつたらしい。世界戰爭でドイッが敗けたのも結局はドイッの國民に熾烈な情熱がなかつたからである。當時のドイッ國民の間には、皇帝や王侯のために死なうとする氣持は殆んどなく、而も國民中心の愛國心も殆んどなほ未だ目ざめてゐなかつたのである。

ドイッに革命が起き、それと共に王室中心の愛國主義も地を拂つて何所にも見られなくなつてからは、歷史敎育は目的を全く失つてたゞ物を知るといふだけのことになつた。現在の共和政府は國民に愛國精神のなくなつたことを少し

も憂ひとしないが、さりとて國民は共和政府の思ふまゝにもならない。國民主義の勃興しつゝある今日、王室中心の愛國主義の存立し得る道理はないが、國民は現在の共和國のために死んでも悔いないといふ氣持にもなれないのである。ドイツの國民は四年半も戰つたが、若し『共和國のため』にといふのであつたら誰だつてあれほど長く戰ふ氣にはなれなかつたであらう。これは疑ふ餘地のないことで、共和國といふこの奇怪な政體は眞先きに戰場から遁げ出した連中が拵へたものである。

今日のドイツ共和國は自立自存の能力のないものである。それにも拘らずどうにかかうにか無事に存續してゐるのは、聯合國の言ひなり次第に償金を支拂ひ、領土を割讓する覺悟をしてゐるからである。ドイツ共和國は聯合國に受けが良い。恰も他人を利用する者にとつては弱蟲の方が硬骨漢よりも御し易いから好まれるのと同じことである。それ故、ドイツ共和國が敵側に受けが良いといふことは、このドイツ共和國がドイツ國民にとつて最も惡い政體であるとい

ふことである。聯合國はドイッ國民を奴隷の地位に置かうとしてゐる。而もドイッの當局はかくの如き聯合國の言ひなり放題になつてゐるから、聯合國にとつてはこれほど調法な相棒は求めても他に得られない。さればこそドイッ共和國は聯合國に受けが良いのである。さればこそ共和國といふこの奇怪な代物が今日なほ存立を續けてゐるのである。從つて、眞の國民主義の教育などは今日のドイッには求めても無駄で、政府當局はたゞ國旗黨（註2）の旗持共に『萬歳』を叫ばせて滿足してゐるのである。尤もこれらの旗持も血を以て國旗を守らねばならぬ時が來れば忽ち脱兎の如く遁げ出すに決つてゐよう。

民族主義の國家は民族の存立のために戰はねばならぬ。ドーズ案の受諾などによつて僅かに存立し或は存立を續けんとするが如きものであつてはならぬ。民族主義の國家は今日の共和國政府が疎かにして顧みないところのものによつて民族の存立を圖り、國家の防衛に努めねばならぬ。惟ふに、我等の追求する民族主義の國家は形式内容共に卓拔無比であるから、敵國の嫉妬羨望は愈〻切

にして抵抗壓迫は益〻大なるものがあらう。これに對抗して國家を防衛すべき手段は多々あるが、就中最良の保障は武器でなくて國民であり、萬里の城壁でなくて、愛國の至誠に溢れ、熱烈なる國民的感激に燃ゆる男女の人垣である。

以上述べた所から考へれば、知育の方面で考慮すべき第三の點は次の通りでなくてはならぬ。

民族主義の國家では、學問も國民の自尊心を高める手段でなくてはならぬ。單に世界歴史を教へる場合のみならず、文化方面の如何なる歴史を教へる場合にも、專ら國民の矜持を涵養することを以て主眼としなければならぬ。例へば或る發明家のことを說き示す場合には、この發明家は偉大なる發明をした、而も彼はドイツ人であつた、卽ち我等の同胞はかやうに偉大な發明をした、といふやうに述べて國民の誇を培ふべきである。或は、また、何か偉大な事業に就いて說き示す場合にも、單に偉業を讃歎するのでなく、この偉業を成就したものが同胞であることを指摘して、かくの如き偉人を有することの誇を强め、國

民の自尊心を高めるやうに努めねばならぬ。ドイツの歴史の中から最も卓越した人物を選び出し、國民がこれを仰望の中心として堅固に團結するやうに青少年を教育するのが今日の急務でなくてはならぬ。

學校で教へることをかやうな立場から決めてドイツ人の自尊心を涵養することに教育の重點を置けば、青年も當今見るが如き生半可な平和主義者や民主主義者などにならず、學校を卒業する時には頭の天邊から爪先まで立派なドイツ人になつてゐるに違ひない。

國民の愛國心も不純であつたり、見せかけだけで中味が空つぽであつては駄目である。それ故、眞のドイツ人を養成するには、まだ頭の固まらぬ子供のうちからドイツ人として心得べき鐵則を教へ込まねばならぬ。卽ち、國を愛し國民を愛する者は、國のため、國民のために何時でも身命を捧げる覺悟を有する者である。何が何でも儲けたい、損をするのは嫌だといふところに愛國はなく、色々な階級がたゞ寄り合つてゐるだけで國民として團結してゐないところ

に愛國はあり得ない。萬歳を唱へてもたゞそれだけでは何にもならぬ。それだけで愛國者といふことは出來ぬ。愛國者は健全なる國民の存立維持のために身命を賭して悔いざる者でなければならぬ。併し、國を愛し、その國民の一人たるを誇り得るためには國内に恥づべき身分など一つもなく、國も國民も愛するに足り、誇るに足るものでなくてはならぬ。國民の一半が貧困のどん底に呻吟し或は墮落してゐるやうでは、見るも無慚で自慢したくも出來ない道理であらう。國民が一人殘らず心身共に健全であれば、その時に初めてその國民の一人たる喜びが自ら各人の胸中に湧き、それが次第に昂まつて所謂國民の矜持と稱する崇高な感情になる。而して、また、この崇高な矜持を感じ得る者は己の屬する國民の偉大を知り得る者である。かういふやうなことを子供のうちから敎へ込むのである。

かくの如くにして國民の矜持を中心とする愛國主義と社會正義との調和した觀念を子供の腦裡に植ゑつけて置けば、嚮て國を愛し、その國民の一人たるを

誇り得る立派な國民が自ら生れて來る。互に相和し、同じ矜持によつて固く結ばれ、萬代不易、不撓不屈の國民が生れて來るに違ひなからう。

現代の人間は狂熱的で排他的な愛國主義 Chauvinismus を排斥するが、これは人間が無氣力になつてゐるからである。現代の人間には荒々しいことを行ふ氣力がなく、また荒々しいことが嫌ひである。こんな人間は大事をなすに足りない人間である。思つても見よ、凡そ我等人類の間に捲き起された驚天動地の大事業なるものは殆んどすべて狂熱の結果ではないか。否、その或るものはヒステリックな情熱の賜物とさへ言ひ得るではないか。若し情熱に驅られることなく、誰もが小廉曲謹で安寧秩序の維持をこれ事としてゐたら、偉大な變革などは此の世の中に出來なかつたであらう。

今や世界は將に一大變革に遭遇せんとしてゐる。これは確かに疑ひを容れぬことである。若しなほ疑ひありとすれば、それは世界の逢着すべき大變革に於て果して能くアーリア人が勝つか、それとも、永遠のユダヤ人が勝つか、とい

ふことである。

アーリア人とユダヤ人との間に鑢て行はるべき角逐は必ずや空前絶後の大闘爭になるに違ひない。それ故、民族主義の國家は豫めこれに備へ、かくの如き闘爭に堪へ得る國民を作るといふ方針の下に青少年を教育すべきである。

民族の角逐場裡に於て勝利を占め得るものはかくの如き教育に先鞭をつけた國民である。

卐

今まで述べて來たことは總て國民教育を行ふ上に於て缺くべからざることであるが、民族主義の國家に於てかやうな教育を行はねばならぬ所以は、畢竟するに、人種觀念や人種感情を涵養せんとするに在る。否、民族主義の國家に於ては、教育の主眼は人種觀念や人種感情なるものを自明の本能として子弟の腦裡に刻み込み、その胸底へ植ゑつけるに在ると言つても差支へない。民族の血

は純潔でなくてはならぬが、何故純潔でなくてはならず、何故混濁させてはいけないか、また、純潔とはどんなことか、といふことを學校で十分に教へるべきで、このことを知らずに學校を出る子女が一人でもあつてはならぬ。さもなくば、ドイツ民族の存立を保つことも出來なければ、文化の向上を圖ることも出來ぬのである。

總て生物は自己保存の本能と共に種族保存の本能を有するものである。人間もその例に洩れない。それ故、どんな教育を受け、どんな立派な身體や頭腦を作つても、それが種族保存の本能を實現するに足りないものでは何にもならぬのである。

今日でもドイツ人は他國の文化の肥料になる人間だといはれてゐる。眞に遺憾千萬なことであるが、世人はこれが如何に悲しむべきことであるかを知らない。今日の國民は一般に思慮が淺くて、ドイツ人たる者が本國を捨てて他國に移り、他國の人間と結婚し、他國の文化を肥して一生を終るのを見ても、單に

ドイツ人が一人減るだけであるかの如く考へて平氣であるが、よく考へると、これはなかなか容易ならざることで、ドイツ人が他國の肥料になつて自ら怪しまないやうでは、ドイツ人の知識や能力が如何に優れてゐようとも、ドイツ人は軈て墮落するに決つてゐる。ドイツ人の血が他の民族の血と混れば、ドイツ人の血の混つた民族の方の文化は向上しようが、ドイツ人の方の文化はだんだんと低下するばかりである。今日、ドイツの子女に民族の血の純潔を維持することの必要なる所以を十分に教へて置かないと、他國の文化の肥料になるドイツ人が將來益〻多くなるに違ひない。

種族保存の建前から人種觀念の涵養に眼目を置く教育も、最後の仕上げは軍隊生活で行はれなければならぬ。ドイツ人の普通教育は軍隊教育で終を告げるのである。

卐

民族主義の國家に於ては、今まで述べ來つた如く心身の鍛錬といふことが甚だ大切であるが、同時に人物の拔擢淘汰といふことも亦甚だ大切である。今日ではこの大切なことが疎かにせられ、一般に高等教育を受け得る者は良家富者の子女といふことになつてゐて、本人の才能の有無は二の次、三の次とせられてゐる。元來、人間の才能といふものは他と比較してみて初めてその有無大小の分るものである。何代も續いた富豪や門閥の子弟より、教育がなく、學問の點に於ては劣つてゐても、百姓の子供に却つて才能の優れたものゐることもある。良家の子供は色々な教育を受け、豐かな環境にゐるから、樣々な印象に接し、從つて種々なる知識を得てゐようが、それと才能の多少とは何の關係もない。若し、才能のある百姓の子供をつれて來て、早くから良家の子供と同じに豐かな環境に置いたら、その才能は田舍にゐた時とはまるで見違へるやうなものとなつて現れるであらう。かくの如く學問の有無と才能の有無とは別であるが、今日でもこの區別が明瞭に現れ、門閥や學問よりも生來の天分が物を言

ふ方面が恐らくなほ一つある。卽ち藝術である。こゝでは『習ふ』„lernen“ことが出來ず、何から何まで天與の才能に委せなければならぬ。勉强するのはこの天分を十分に伸ばし育てるためであつて、本人に素質がなければ、親が金を持つてゐようと、地所を持つてゐようと役に立たない。この事實に徵しても、天分といふものが上流社會や富豪の專賣でないことがよく分る。寧ろ古來の偉大なる藝術家の中には極貧の家に生れた者が少くなく、百姓の小忰で後に巨匠として永く名聲を謳はれるに至つた者もあるのである。

かくの如き事實を見て知つてゐながら、これから受ける教訓を今日の誰もが精神生活の全般に適用しようとしないのは、要するに思慮分別が淺いからである。中には、成る程、藝術の方面ではその通りでも、所謂實學の方面では必ずしもさうとは言へぬと考へるものもある。世には動物を馴らすに巧みなものがあつて、悧口な尨犬に至妙な藝を仕込むが、これは所謂訓練であつて、尨犬が藝を覺えるのは何も理解力が發達してゐるからではない。人間の教育にも確か

にこの訓練と似たものがある。人間に色々な知識を機械的に詰め込むのがそれで、人間はそれによつて或る程度の熟練に達し得る。どんな人間でも、才能の有無に拘らず、教育の力で幾らか學問が出來るやうになるものである。併し、かうして覺えた知識は犬や猿の藝と同じことで、本人の理解力が働いて得たものではない。卽ち生命も魂もない知識である。平凡な人間でも、先生がついてゐて犬や猿を仕込むやうに仕込んだら、普通平凡な人間以上の物識りにもなれようが、かうして得た知識は要するに死物であつて結局何の役にも立たない。死んだ學問をしてゐる人間は生きた辭引にはなれるかも知れぬが、まさかの場合には周章狼狽するのみで、人生の難關を切り拔ける術を知らず、何か事ある毎に他から指圖を受けなければ自分では何にも出來ない。況してや自力を以て人類の進步發達に寄與するなどといふことは思ひもよらぬことである。要するに機械的に詰め込んだ知識は役に立たないもので、こんな知識を持つてゐるのではせいぜい今日のドイツ政府の役人になれる位のものであらう。

國民の日常生活には色々な部面がある。國民の中にはこの生活部面ごとに才能のある人物がゐるであらう。これは言ふまでもないことである。又、知識も大切である。死んだ知識でも才能のある人物がこれを利用すれば生きて來る。これも亦言ふまでもないことである。而して、この大切な知識と才能とが結び着くと、茲に初めて獨創の仕事が出來るやうになるのである。

才能のない人間に機械的に知識を詰め込むのは、教育と訓練とを混同して人間を動物扱ひにするのであるが、今日の世間はそれとも氣がつかずに大きな間違ひをしてゐる。例を擧げて說明してみよう。近頃の繪入雜誌などを見ると、どこそこの黑ん坊が學問をして初めて辯護士になつた、教師になつた、いや、牧師になつた、音樂家になつた、といふやうなことが書いてある。莫迦なドイツ人はこれを見て、成る程訓練といふものは不思議なものだ、こんな奇妙なことをする、といつて今日の教育術なるものの威力を三嘆する。ところが、何ぞ圖らん、茲にもユダヤ人の狡猾な陰謀が潛んでゐるのである。ユダヤ人は各國

の國民に人類の平等を說いて民族の差別を忘れさせようとしてゐるが、黑ん坊でも訓練さへ受ければ牧師や辯護士にもなれるといふのは、つまり、この平等の說の正しいことを證明せんがためにほかならぬのである。これほど人を愚にした話はないが、今日のブルジョア連中は頽廢墮落してゐるから眞面目に考へてみようともせずにたゞ感心してゐる。正氣の沙汰ではない。優秀な文化民族に屬する數百萬の人間が文化民族にふさはしからぬ境遇から脫却するを得ない今日、猿に近い蠻人を辯護士などに仕立てあげようとすること自體が冒瀆である。立派な天分を享けて生れた數十萬、數百萬の人間がプロレタリアの貧乏な生活をなさざるを得ない今日、ホッテントットやズールーの蠻人を敎師や牧師に仕立てるなどは確かに天意に反することである。何故かといへば、ホッテントットやズールーを敎師に仕立てるのは尨犬に藝を仕込むのと同じく訓練であつて、眞の學問をさせる『敎育』ではないからである。それほどの親切があつて、黑ん坊を訓練するだけの努力を文化民族の子弟の敎育に用ゐたならば、そ

の效果は千倍も萬倍も大きなものがあるだらうし、如何なる子弟でも黒ん坊とは比較にならぬほど速く教師になり、牧師になり、辯護士になり得るに違ひない。

黒ん坊が學問をして辯護士や牧師になつたといふのは今のところまだ例外であつて、ざらにあることでないから我慢も出來るが、今日のドイツでは、高等教育を受け得る者必ずしも才能や素質のある者とはきまつてゐない。これ眞に慨歎すべきことである。年々多數の子弟が才能もないくせに高等の學校へ進んでゐるのに、他方には多數の子弟が才能に惠まれてゐながら高等教育を受けることが出來ずにゐるといふ狀態は、考へるだに堪へ難いことである。これがために國家國民の蒙る損失は量り知るべからざるものがある。近來重要な發明といへば大抵北アメリカで行はれてゐる。これには色々な理由があらうが、一つは、北アメリカではヨーロッパと違つて下層の人間でも高等教育を受けることが容易で、從つて才能を十分に伸ばすことが出來るやうになつてゐるからであ

らう。

發明は詰め込んだ知識で出來るものでなく、才能で活かした知識によらねばならぬ。然るに、今日のドイツでは、かやうな知識に重きを置かず、學校で良い點を取りさへすればよいとせられてゐる。

かくの如き點取り主義の教育も民族主義の國家では排斥しなければならぬ。民族主義の國家は如何なる既成階級にも私せず、如何なる階級のためにも特にそれをして支配勢力たらしむる如き保護に任ずることなく、社會の各層から天分の優れた者を拔き出して來て有用の地位に就かせるやうにしなければならぬ。國民學校で普通の子供に一般の教育を施すのみが國家の責務でなく、才能のある者にはそれ相當の高等教育を受け得るやうに取り計つてやるのも國家の責務である。階級や貧富の差別を問はず、才能のある者は誰でも最高學府まで行けるやうに進學の道を開いてやることが特に肝要である。これは民族主義の國家の斷じて果さなければならぬ任務であつて、これさへ果せば、國家は役に

も立たぬ物識り連中の支配を免れて天分の豊かな指導者を有し得るやうになるに違ひない。

國家は上下貧富の別を問はず才能のある者に高等教育の門戸を開放すべきであるといふ理由は他になほ一つある。外國でもさうであるが、特にドイツでは、所謂知識階級は彼等だけで固い殼を作り、その中に閉ぢ籠つて、まるで化石のやうになつてゐるため、一般大衆との間に生きた聯絡がない。これには二つの弊害がある。生きた聯絡がないため、知識階級には大衆に對する理解と同情とがない。これが弊害の第一である。本來、知識階級は國民大衆の心理を理解してゐるべきものであるが、久しく大衆から離れてゐるために大衆の感情が分らなくなり、今日では大衆とは全く緣のないものになつてゐる。それから、また、大衆との間に生きた聯絡がなく、彼等だけで隔離した生活をしてゐるために、知識階級は何時の間にか氣も心も弱くなつてゐる。これが弊害の第二である。氣力の點では何といつても素朴な國民大衆の方が箱入娘のやうな知識階

級よりも優れてゐる。從來、學問の點ではドイツ人は人後に落ちなかつたが、それだけに氣力が弱く、度胸が足りなくなつてゐた。例へば、ドイツの政治家には『學問』があればあるほど實行力に缺けたものが多かつた。ドイツは世界戰爭で負けた。これは外交上の準備が十分でなかつたためでもあるし、軍備が充實してゐなかつたためでもあるが、かやうな手落ちが出來たのも、畢竟は當時のドイツの政治家に學問のある者が少かつたためではなくて、學問の有り過ぎる者が多かつたためである。學問のある人間といふものは、色々な知識を頭に詰め込んでゐるが、多くは健全な叡知に缺け、事に當つて決斷がつかず、氣力も度胸もないものである。世界戰爭はドイツにとつては興亡の運命を賭けたる死活の戰爭であつた。然るに當時のドイツ宰相は哲學をひねくつてゐるやうな弱蟲であつた。ドイツ國民はかくの如き弱蟲に率ゐられて死活の戰爭に臨んだのである。宿命といはざるを得ない。若し、かのベートマン・ホルウェヒの代りに膽の太い逞しい野人に率ゐられてゐたならば、一兵卒の血と雖も無駄に

は流れず、戰爭はあれほど慘めな結果を告げなかつたであらう。そればかりではない。十一月革命の無賴漢どもがあのやうに易々と成功を收め得たのも、ドイツの指導者を以て任ずる連中が知識ばかりを詰め込まれて度胸に缺けてゐたからである。卽ちドイツの指導者が知識の偏重に禍ひされて優柔に流れ、國家の權力を十分に活用せず、寧ろ卑屈にも制抑して、破落戸共のために成功の條件を調へてやつたのである。

才能のあるもののために高等教育の門戶を開放する教育方針に就いては、加特力教會の組織は大いに模範とし參考とすべきものがある。加特力の僧侶は無妻主義を建前としてゐるから、後繼者を己の子供に求めるわけに行かず、どうしても廣く國民大衆の間から探し出して來なければならぬ。これは非常に大切なことである。世間にはこのことがよく分つてゐないやうであるが、加特力教會に不思議な恐しい底力があるのも實はこの無妻主義の賜物である。卽ち、無妻主義を奉じてゐるため、加特力教會では僧侶の補充を常に主として國民の下

層階級のものによつて行はざるを得ないのであるが、これあるがために教會は國民大衆の感情を良く理解し、國民大衆も亦教會に親しみ得るのである。更に、又、前に述べた如く氣力とか實行力とかの點に於ては下層階級の方が上層階級よりも優れてゐる。加特力教會には下層階級出身の僧侶が多いのであるから、氣力も實行力もそのまゝ下層階級から傳はつて來てゐる。これ卽ち加特力教會が常に潑剌として若く、精神の柔軟を失はず、而も鋼鐵の如き意力を具へてゐて眞に驚くべきもののある所以である。

今日の知識階級は下層階級から絕えず新しい血を取り入れて若返へるやうにしなければならぬ。それには教育の方針を改めることが必要で、綿密丁寧に注意を働かせて國民の間から才能のある者を搜し出し、選び出し、これに學問をさせて國家の用に立つやうにさせなければならぬ。これは民族主義の國家の義務である。國家も政治家も單に國民に職を與へ官吏をして食を得しめんがために存在するのではない。彼等をしてその任務を果さしめなければならぬ。それ

には才能もあり意志も強い人物を官吏に仕立てることが必要である。これは官吏ばかりでなく、他の方面でも同様であつて、國民の精神指導に當る人物はその任に適するやうに養成せられなければならぬ。才能のある者を育て上げて適所に用ゐ、以て國家の役に立たせることが出來れば、國家は必ず發展する。素質の等しい二つの國民が競爭するとすれば、才能の優れた人物が所を得て精神指導を行つてゐる方の國民が勝ち、各人の天分よりも身分や階級に重きを置き、專らその利益のために政治を行ひ、政府が彼等の共同の秣槽になつてゐる國民の方が負けるに決つてゐる。

尤も、右に述べたやうなことは今日のドイツでは行はれさうにもない。例へば、こゝに高官の息子と職人の悴とがあり、一は無能で他は有能である場合に、高官の息子を職人にして職人の悴を役人にするといへば、それは無理だと言ふであらう。今日の如く職人を卑賤な者として輕蔑してゐる世の中では確かにこれは無理に違ひない。それ故、民族主義の國家にあつては、先づ勞働とい

ふことに就いて從來とは全く違つた考へ方をしなければならぬ。今日では一般に筋肉勞働を卑しむ風があるが、これが惡い。これを改めるのは容易なことでなく、或は百年も二百年もかゝるかも知れないが、何としても教育の力でこの弊風を一掃し、職業に高下をつけず、技倆の良否によつて人間の値打を決めるやうにすべきである。愚にもつかぬものを書いてゐても筆で働く人間だから偉くて、頭の良い精密工でも職工だから卑しいとせられる今日の世の中では、これも法外であり、言ふべくして行はれないことであるかも知れぬが、筆で働く人間が偉くて筋肉勞働に從ふ人間が卑しいといふ見方は誤つた教育の結果であり、事理に背いてをり、本來にはなかつたことである。職業に高下をつけるのは現代の物質文明の病的現象の一つであつて、不自然な狀態である。

總て勞働には二通りの價値がある。卽ち唯物的なものと唯心的なものとがそれである。唯物的な價値といふのは效用のことで、勞働を物の方面から見て公共生活に對する重要の度合を測り、國民にとつて直接に或は間接に效用の高い

ものを造るのが良くて、效用の低いものを造るのが劣つてゐるとする。そこで、效用の高いものを造り出す者は良い報酬を受け、然らざる者は安い報酬を貰ふといふことになる。然らば唯心的な價値とは何かといふと、これは仕事を物の方面からでなく心構への方面から見たものである。その仕事が必要不可缺なものであることを認めるのである。單に效用といふことから見れば、日傭人夫の手傳ひ仕事は發明家の仕事に比べて甚だつまらぬやうであるが、國民全體の生活から見れば、發明も大切であるが人夫の手傳ひ仕事も缺くことの出來ぬものである。國民全體としては、勞働を物の方面から見て國民全體に對する效用の多少を測り、それに應じて報酬を與へるべきであらうが、心の方面から見ることをも忘れず、仕事の場合に自己の持場に於て最善の努力を盡してゐるなら職業に高下も卑賤もなく、各人皆平等であるといふことを心得てゐなければならぬ。人間の値打といふものは報酬の多寡で定むべきものでなく、仕事に當つて最善の努力を盡してゐるか否かで測るべきものである。

賢明な國家にあつては、各人にその能力に從つて仕事を與へるを以て理想とする。言ひ換へれば、適材を適所のために育成するのである。ところで、各自の才能なるものは生來の天分であつて、教育によつて得られるものでなく、人間の手では如何とも爲し難いものである。それ故、賢明な國家にあつては、人間の値打をその職業のみによつて測るといふことは有り得べからざることで、職業は謂はば社會から當てがはれたもの、卽ち各自の環境とそれに應じて社會から受けた教育とによつて定められるものである。人間は社會から委ねられた仕事を忠實にやり遂げねばならぬ。そこに人間の本當の値打がある。元來、職業なるものは人生の目的ではなく、人生の目的を達成すべき手段に過ぎない。然らば人生の目的とは何かといへば、それは修養であり、精神の向上にほかならぬ。然るに、精神の向上を成し遂げるには、國家といふものを土臺とせねばならぬ。國家を土臺とした文化社會の枠の內にあつて初めて精神の向上も修養も出來るのである。それ故、人間はこの根本の土臺たる國家の維持に寄與する

ところがなくてはならぬ。寄與する方法は自然の定むるところであつて人に依つて異なるが、誰でも地位身分職業の如何に拘らず勤勉正直に働いて國家に報いることが大切で、その能力に應じて報國の誠を致す人間は我等が心から尊敬すべき立派な人間である。物質上の報酬は國家や社會のために盡した效果の程度に應じて受け取るべきものであらうが、心の報酬は國家によつて立派に育て上げて貰つた生來の能力を以て專ら國家に盡してゐる人間なら誰でも一樣に受け取り得るものである。それ故、一介の職人でもその能力に應じて働いてゐる者は貴く、役人でも無能にして日を盜み祿を盜んでゐる者は恥づべく卑しむべき人間だといふことになる。又、國家が才能に應じて仕事を授けるやうになれば、出來ない仕事を强ひるといふ無理のなくなるのも勿論のことである。

又、國民各自がその能力に應じて國家に盡してをれば、そこで初めて平等といふことが言へる。法律上の平等といふことが初めて成り立ち得るのである。

現代は正に自潰しつゝある。現代は普通選擧の世の中であり、權利の平等な

どと盛んに騒いでゐるが、平等の眞の意味を知つてゐるものがない。今日の世人は人間の値打を物的報酬の多寡で測るから、最も貴い眞の平等が分らぬのみならず、眞の平等の成り立ち得る根本を壞してゐるのである。元來、人間の能力とか仕事とかいふものは千差萬別であるから、そんなものを土臺にして人間の平等を考へようとしても、それは出來ない相談である。平等を考へたければ、人間が各自の仕事を忠實に行つてゐるか否かを吟味すべきで、忠實に行つてゐれば、そこに初めて心の平等があり得るのである。世人は貴賤貧富など自然が與へた偶然の外形によつて人間の値打を判斷するが、心の平等を悟ればかくの如き間違ひを避けることが出來、誰でも自分で自分の値打を造り出すことが出來るやうになる。

專ら報酬の多寡によつて互に對手の品定めをする現代にあつては、上に述べたやうなことは世人の耳に入るまい。併し、世間の無理解などは我等の所信を放棄すべき理由とはならないのである。現代は既に腐敗してをり、病患を包藏

していぬる。これを治し、これを救ふには病患の原因を剔抉するだけの勇氣が必要である。また、新しい世界觀を奉ずる國民社會主義運動の當面の任務も茲にある。卽ち、固陋な因襲を悉く振り棄てて、ドイツ國民の間からこの新しい世界觀の使徒たり得るものを拔き出して來て、これに組織を與へなければならぬ。

卐

或は異を立てて、人間の仕事を心の方面から測るといひ、物の方面から測るといつても、この二つはそれほど簡單に區別し得るものでなく、從つて一般に筋肉勞働の卑しめられるのは報酬が少いからであつて、已むを得ざることであり、これらの人間が十分に學問をなし得ず、文化に與ることが出來ず、卽ち何の罪もない人間の精神文化が發展し得ずにゐるのも當然ではないか、つまり、筋肉勞働が嫌はれるのは報酬が惡くて勞働者の文化が否應なしに低下し、從つ

て勞働者といふものが一般から卑しめられるに至つたのは甚だ自然ではないか、といふ人もあらう。

一應はこれも道理である。さればこそ我等も將來は報酬にあまり大きな差別をつけてはならぬといふのである。かういふと又反對して、報酬に差別をつけなくなつたら大きな仕事をする者がなくなると言ふ人があるかも知れぬが、それは杞憂である。高い報酬を貰はねば大きな仕事をしないといふのは時代が腐敗墮落してゐる證據で、昔から今に至るまで報酬の多寡が人間に仕事をさせる唯一の動機であつたなら、世の中に今日見るが如き立派な科學も文化も生れなかつたであらう。古來の大發明や大發見、或は學問上の大業績や人類文化の金字塔など、これらは概ね金を欲しがり金を命とする人々によつては爲されず、富を願はず、現世の幸福をあきらめた清貧の人々によつて成されたものである。

今や世を擧げて黃金の前にひれ伏すに至つたやうであるが、いつかは黃金よ

りもつと貴いものを拜む時が來るであらう。今日の世の中には、たゞ金や財產ばかりを目あてに生き、たゞそのために仕事をする人間が多いが、そんな人間は有つてもなくても同じことで、居なくなると世の中が淋しく貧しくなるといふやうなことはない。

將來は國民の誰もが生活に困らぬやうな時代であつて欲しい。また、さういふ時代を造るのも我等の運動の理想の一つである。それかといつて、人間はただ食つて樂しんで行けさへすればよいといふやうに考へられては困る。仕事が異なれば報酬も異ならざるを得なからうが、その差別を適正にして、眞面目に働いてゐる者は誰でも國民の一人として、また人間として恥しからぬ相當の生活を立てて行けるやうにしてやるのも我等の任務である。

かく言ふと、また嗤つて、それは理想で現實の世界では到底行はれぬ空論に過ぎないといふ人もあらう。

我等とても何時か完全無缺の時代が來るとは思はぬ。又それ程迄芽出度くは

ない。併し、社會に缺陷のあることが分つたら、その缺陷を除き、弱點のあることが知れたらその弱點を正して理想の實現に努むべきで、それが國民の義務である。完全無缺の時代が此の世に現れる道理がないからといつてこの義務を忘れてよいわけはない。現實はなかなか冷酷で、人間が何かやらうとすると色色な故障を持ち出して邪魔をするものである。それを恐れてゐては駄目で、先づやつてみなければいけない。理想の境地に向つて努力すべきである。間違つた判決を下すこともあるからといつて裁判所を廢止してしまふわけにも行くまいし、何時まで經つても病氣がなくならないからといつて藥を棄てるわけにも行くまい。それと同じことで、世の中は思ふやうにならぬもの、何かやらうとしても障碍が起きて失敗することが多いが、それかといつて何も彼も斷念してたゞ手を束ねてゐるといふわけには行かぬのである。

理想の力といふものは大切なものである。これを莫迦にしてはいけない。曾て世界大戰に於てドイツの兵隊が勇敢に戰ふことの出來たのも理想の力による

のである。今日我等の仲間に臆病で運動に躊躇する者があるなら、特にその者が曾て兵隊であつた者であるなら、先づこれを思ひ出して貰ひたい。ドイツの兵隊が戰場で喜んで死んだのは、毎日の麵麭のためでなく、祖國を愛するがためであつた。祖國の偉大を信ずるがためであり、國民の名譽を重んずるがためであつた。ドイツの國民がかくの如き信念を捨て、かくの如き理想を離れて革命の約束にたぶらかされ、現實の福利を求めて武器をリュックサックと換へるに及んでドイツは戰爭に敗けた。ドイツの國民は地上に極樂を現ずる代りに世界の輕蔑を受け、今日見るが如き窮況に落ち込んだのである。

今日のドイツ共和國は專ら實利に生き、算盤の達者な連中に支配せられてゐるから、我等は先づ國民の間に理想に生きる國家を仰ぎ求め、これを信ずる心を植ゑつけなければならぬ。

註1　北方系　金髮碧眼の北ヨーロッパ系民族。
　　東方系　黑髮黑眼のアルペン民族。

ディナール　小亜細亞の人種と關係があり、オーストリア、南ドイツ等に分布せる黒髪黒眼の民族。

西方系　地中海沿岸に分布せる皮膚やゝ褐色の民族。（譯者）

註2　一九二四年に社會民主黨を中心として出來たマルクス主義の鬪爭團體。（譯者）

第三章　國家所屬者と國民

今日の所謂國家にあつては概ね人民を二つの種類に分けてゐる。卽ち國民 Staatsbürger と外國人 Ausländer とがそれである。國民とは出生又は歸化によつてその國の國民權 Staatsbürgerrecht を享有する者をいひ、外國人とは他の國の國民權を享有する者をいふ。この二つの者の間にどちらともつかぬ曖昧な者がなほ一つある。卽ち所謂無籍者がそれで、今日の何れの國家にも所屬せず、何れの國家でも國民權を享有しない人間である。

今日では、國民權なるものは、上述の如く、誰でも或る國家の國內に生れさへすればそれによつて自ら與へられるものであつて、人種や民族の如何は顧みられない。ドイツの植民地に住んでゐた黑ん坊でも、ドイツの本土に移つて來て子供を生むと、生れた子供は國民權を得て『ドイツ國民』になる。同樣に、

ユダヤ人でも、ポーランド人でも、アフリカの土人でも、アジア人でも、ドイツの國内に生れさへすれば雜作もなくドイツの國民になり得るのである。

ドイツの國民となるには出生の他になほ歸化による方法もある。勿論、歸化には色々な條件がある。例へば、歸化を希望する者が强盜や女衒の如き犯罪人でないこと、政治上の危險思想を有せず、卽ち政治上の凡物であること、歸化すべき國家に迷惑をかけぬこと等である。迷惑をかけぬことといふのは勿論政府に財政上の厄介をかけないといふことで、算盤ばかり彈いてゐる世の中であつて見ればさもあるべきであらうが、今日ではそれに止まらず、將來多額の稅金を納めて呉れさうな人間なら政府の方から進んで歸化を促すことさへ珍しくない。人種や民族の事に就いては少しも考へないのである。

外國人がドイツの國民になる手續は、恰度自動車倶樂部に入會するのと大した變りのないほど無雜作なものである。卽ち、歸化を希望する者が請願書を提出すると、當局は一應調査して許否を決定し、許可ときまれば、一枚の紙片に

よつて當人に歸化願が叶つてドイツの國民になつたことを通知する。而もこの通知が甚だふざけたものであつて、歸化を希望してゐるものがズールーの黑ん坊であつても、それに對して『本證に依りて貴下はドイツ人となりたり』といふのである。

黑ん坊がドイツ人になるなどといふことは正に手品であるが、今日この手品をやつてのけるものが國家の元首である。全能の神すら成し能はぬことを役人に成り上つたバラセルソ(註)がわけもなくやつてのける。元首が筆の先をちよつと動かすと、蒙古の田吾作でも一瞬にして押しも押されもせぬ『ドイツ人』になるから不思議である。

今日では、歸化を許す場合に當人の民族關係を無視するばかりでなく、身體の健康狀態をも全然顧慮しない。黴毒で身體の崩れかゝつてゐるやくざ者でも、前に述べた如く財政上の迷惑をかけず、政治上に危險でない人間でありさへすれば、今日の國家は喜んで歸化を許し、國民としてこれを迎へるのであ

る。

かくの如くにして今日の所謂國家は年々歳々夥しい毒素を吸收し、而も最早やその弊害を如何ともする能はずして自ら惱んでゐる狀態である。

次に、國民と外國人との區別はどうかといふと、これがまた大ざつぱである。國家の官公職に就き得ること、場合によつては兵役の義務に服さねばならぬこと、選擧被選擧の權利を有すること、これらの權利義務を有するのが國民であつて、それを有しないのが外國人である。國民と外國人との區別はこれだけに過ぎない。何故かといへば、個人の生命財產など色々な權利の保護、或は個人の自由などは外國人も國民と均しく享有するところであつて差別がない。否、外國人なるが故に却つて多分に享有してゐることすら珍らしくない。少くとも今日のドイツ共和國ではさうである。

こんなことは總て誰も聞きたくない話に違ひないが、今日のドイツの國民權ほど莫迦げて狂氣じみたものは恐らく他にはあるまいと思ふ。この點に於て聊

か考への優れてゐるらしい國が現今たゞ一つある。勿論それはドイツ人御自慢のドイツ共和國でなくてアメリカ合衆國である。アメリカ合衆國では、當局が多少とも理性に從つて事を行はうとしてゐる。卽ち、健康の惡い者の入國は原則としてこれを禁止し、或る人種に屬する者の歸化はこれを全然許可しないことにしてゐる。これは民族主義の國家からすれば當然の考へ方であるが、アメリカ合衆國もどうやらこれに氣づいたものと見える。

我等の追及する民族主義の國家では、人民を三つに分ける。卽ち國民と國家所屬者 Staatsangehöriger と外國人とがそれである。

出生によつて享有し得るものは原則として國家所屬性のみである。國家所屬性を享有するといふだけでは官公職に就くことも出來なければ選擧被選擧の權利もなく、卽ち政治に參與することも出來ない。かやうな者を國家所屬者といふ。そこで、國家所屬者に就いて先づその所屬人種乃至民族の如何を確かめなければならぬ。他の人種乃至民族に所屬する國家所屬者が隨時に所屬國家を離

脱してその所屬民族の國家の國民になることは本人の自由である。外國人とは他の國家に所屬する者のことで、たゞこの點が國家所屬者と違つてゐる。

ドイツ民族に所屬する者にしてドイツの國家に所屬する男子は、先づ國家の命ずる義務教育を受けて人種乃至民族的自覺を與へられる。次いで、これまた國家の命ずる體育を卒へ、然る後軍隊に入る。軍隊教育は一般教育であつて、ドイツの男子たる者は一人としてこれを免るゝを得ず、心身の能力に應じて軍務を果し得るやうに各人を鍛錬する。かくして兵役の義務を終へた心身共に健全な男子は茲に初めて嚴肅に國民權を與へられる。國民權は生涯を通じて最も大事な身分證明であつて、これさへあれば國民たるものの凡ゆる權利を附與せられ、國民たるものの凡ゆる特權を享受し得る。これは當然の話で、國民の一人として國家の存立と發展とを雙肩に擔つてゐる者と、單に『儲ける』ために國內に寄留してゐる者との間には明白な區別を設けるべきである。

國民證を貰ふ場合には國家や社會に對して嚴肅に忠誠を誓はなければなら

ぬ。ドイツ人たる者は、假令その間に貴賤貧富の差別があつても、國民證を所持する以上は等しくドイツの國民たることに變りはない。ドイツ人たる者は他國の帝王たらんよりも、假令道路掃除夫であらうとドイツの國民であることを名譽とするやうにならなければならぬ。

國民は外國人に對して優越の地位にあり、特權を有するものである。我等の追及する民族主義の國家では國民が國家の主人だからである。國民はかくの如く優越の地位にあるから、從つてその義務も重く、一旦國民權を得ても、破廉恥漢、無節操な者、卑劣な犯罪者、賣國奴等は、この名譽ある國民權を何時でも剝奪されて再び國家所屬者に逆戻りしなければならぬ。

ドイツの女子は國家所屬者であり、結婚によつて初めて國民になる。但し有職婦人は結婚してゐなくてもドイツ人ならば國民權を享受することが出來る。

註　テオフラスト・パラセルソ Theophrastus Paracelsus　中世ドイツの自然科學者にして神

祕主義者、醫者にして哲學者（一四九三年十一月十日――一五四一年九月二十四日）。神祕主義者であつたため魔術師扱ひをせられるに至つた人物である。（譯者）

第四章　人物本位と民族主義の國家觀念

民族を本位として國民社會主義を奉ずる國家の重要使命が、國家の運命を雙肩に擔つて立つ者を育成し、これを保持するにありとすれば、國家は單に民族の血統の純潔なる者を增殖し、教育して、實生活に有用なる人物を造り出すことに努むるのみならず、更に國家の組織をもかくの如き使命に適應したものにすることが必要である。

マルクス主義では、人間は平等でその間に差別はないといふが、我等はさうでなく、人種の優劣を認め、人種の優劣に從つて人間の値打に差別をつける。血液の重要なる所以を認め、民族の相違を認めれば、結局民族の優劣を以て個人の値打を測らざるを得なくなる。又、人種の優劣に從つて民族に優劣ある如く、民族を同じくしてゐても個人の間には優劣がある。こゝまで突きつめて考

へないとマルクス主義の人間平等說を破ることは難しい。民族は決して平等でなく、その間に色々の差別がある。それと同じく、等しくドイツ人といつてもその性能は千差萬別である。單に頭腦だけを見ても良し惡るしがある。何故かといふと、ドイツ人を造りあげてゐる血液は誰の血液でも大體に於て同じであるが、仔細に見るとその間に千態萬樣の微妙な相違があるからである。

かやうに民族の間に優劣の存する如く個人の間にも差別のあることを知れば、そこで先づ考へつくことは比較的に單純なことである。卽ち國民の中でも特に民族の存續發展に必要な分子を愼重周到に保護して十分に增殖し得るやうにしてやることである。

比較的に單純なことと言つたが、それはこの問題が誰でも殆んど機械的に考へつくことであり、また解決し得ることであるからである。併し、國民全體の中から、精神も思想も共に高邁な、眞に有爲な人物を拔擢し、登用し、これに力を添へて、當人のみならず國家のために手腕を發揮させるといふことはなか

なか容易でない。人物をその能力手腕によつて選別するといふことは機械的になし得ることでなく、平生不斷の生存競爭によつて初めて行ひ得ることである。

デモクラシーの無差別平等思想を排して最も優れた民族、即ち最も優れた人類にこの世界を與へようとする世界觀では、その民族内でもアリストクラシーの原則を堅持して最も優れた人物に民族の指導を委ね、最も勢力のある高い地位を與へる。即ち多數決主義の思想を排して人物本位の思想を取るのである。

民族を本位として國民社會主義を奉ずる國家は、經濟機構を改めて貧富の差を少くし、或は經濟に關して大衆にもつと多くの發言權を有せしめ、或は報酬を公正にして賃銀に大きな別をつけないやうに努むるには違ひないが、たゞそれだけを見て民族主義の國家を機械的に他の國家と區別せんとする者があれば、それこそ飛んでもない皮相に囚はれたものであつて、我等の謂ふ所の世界觀の何物たるかを知らざるものである。こゝに今列擧した事柄は總て大切では

あつても、國家永遠の存立を保障し得るものではない。況んやこれによつて國家の大をなさんとするが如きは思ひも寄らぬ話である。經濟機構の改良などは要するに外形の改革である。外形の改革を以て滿足せんとする國民は國際競爭の角逐場裡に於て斷じて勝者たるを期し得ない。經濟機構を改めて貧富の差を少くするが如きは確かに正しいことであるが、たゞそれだけを以て能事終れりとする革新運動は眞の運動でない。既成の狀態を內部から改造するのでなく、その爲す所は悉く皮相に止まつてゐるのであるから眞の大改革を望むことは出來ない。眞の革新運動は國民の精神を革新するものでなければならぬ。今日のドイツは色々な缺點を具へてゐて我等はそのために苦しんでゐるが、ドイツ國民の心持が根本から改まりさへすれば、これらの缺點も否應なしに革まるに違ひないのである。

右に述べた所をもつと分り易くするために、こゝでもう一度、人類文化の發展の眞の動因を考へて見る。

人間が他の動物とはつきり違つて來たのは人間に發明の才能が現れたためである。發明の初歩は、奸計を企み、術策を弄することであつた。計略を用ゐると他の動物と生存競爭をするのが樂になる。また、實際に生存競爭で勝つことが出來るやうになつたのである。この最も原始的な發明はその後廣く普く用ゐられてをり、後世、否、今日の人間の眼から見ると、人間の社會の到る所に行はれてゐるから、最初にこの發明をした者が何人であつたか、個人であつたか、それとも大勢で寄つてたかつて考へ出したのか知る由もない。動物にも、或る種の奸計を企み、術策を弄するものがあるが、さういふ狡猾も我等の眼にはその種類の動物の全體に共通な事柄として映り、其の起源は詮索するすべもないから『本能』といつたやうなことでお茶を濁してゐるのである。

併し、この本能といふ言葉ほど無意味なものはない。生物の進化發展を信ずる以上は、最初に生きんとする意欲を表し、生きんがために戰ふ手段を考へ出し、卽ち最初に詐計を工夫したものがあつたことを信ぜぬわけには行かないの

である。動物の場合でも、一匹の動物が偶〻或る詐計を工夫してそれを用ゐると、他の動物がそれを摸倣した。それをまた、他の動物が摸倣した。かくして詐計を用ゐることが次第に廣く弘まつて、遂には仲間の動物の全體にゆき渡り、何れもが殆んど巧まずして無意識に行ふやうになり、果てはその種類の動物の本能と見られるに至つたのである。

これを人間の場合にあてはめて考へると良く分る。今日、人類が他の動物と戰ふに當つて用ゐてゐる詐計は、元は確かに誰か頭の良い人間が工夫して考へ出したものに違ひない。人間は色々なことを決心したり、實行したりするが、それも元は誰か思ひ切つたことをする人物がやつてみたのであつて、それが廣く人類の間に傳はり、今日では人間の當然の行動と見られるに至つたのである。今日戰略の根本として軍人には當然自明の事柄になつてゐる色々な原則もこれと同じく、元は誰か頭の良い人物が考へ出したもので、それが數百年、數千年の間に廣く行はれて遂に當然の原則として一般に通用するに至つたのであ

る。

他の動物と戰ふに當つて詐計を用ゐるのを人間の最初の發明とすれば、第二の發明は色々な物や生物を人間の生活に利用したことで、これが今日見るが如き本當の意味の發明の始りである。物質的發明としては先づ石を武器として使用したことを擧げねばならぬ。次いで動物を飼ひ馴らすことを考へた。それから、人工で火を作つた。かくして次第に種々様々な驚嘆すべき發明が現れて今日の發明全盛時代を生むに至つたのであるが、これらの發明の中でも時代の新しいものほど、或は重要なもの、有益なものほど發明した人間がはつきり判つてゐる。何れにせよ、今日我等の周圍に見る物質的發明は一つとして天才のある人物の創造力から生れたものでないものはない。これらの發明は人類を次第に動物の水準から引き上げ、遂にこれから引き離して呉れたもので、卽ち發明は人類の向上に與つて力のあるものである。曾て極めて單純な詐術が森の中で獸を逐うた原始人を援助してその生存鬪爭を容易ならしめた如く、現代の發

明は深遠な學問の形を取つてはゐるが、これまた、人間を援助して今日の生存競爭を容易ならしめ、將來の鬪爭の武器となるべきものである。發明、發見、或は事物の本質に徹底した深遠な見識には差し當つて所謂實利實效を期待し得なくても、それらが人間の發明、發見であり、人間の思索の結果である以上は、結局この地球上の人間の生存鬪爭を援助するに決つてゐる。凡ゆる發明が力を合せて人間を助けて吳れるから、人間は次第に周圍の動物の世界から向上し、萬物の靈長として押しも押されもせぬ地位を鞏固にすることが出來たのである。

かくの如く、あらゆる發明は個人の創造の才能から生れたものであつて、數百萬、否、數十億の人類はこれらの個人の發明を生活鬪爭の武器として利用する。それ故、これらの個人は欲すると欲せざるとに拘らず多少とも人類の恩人である。

今日の物質文化は多くの個人の發明に基くものである。卽ち多くの發明家が

互に足らざるを補ひ、他の發明を元にして更に新しい發明を重ねて行つたから、今日の文化が生れたのである。それと同じく、發明家の考案し工夫したことを實地に應用して、器械や何かに仕上げるのも亦個人の才能に俟たなければならぬ。生產過程もその最初は發明と同じことで、結局個人の才能を離れては考へられない。理論といふものは一見空論に似て實利と懸け離れてゐるかのやうでも、色々な發明の根據になり得るものであるが、これも亦同じく個人の才能から生れるものである。大衆は發明もしなければ、考へることも、纒めることも出來ない。如何なる發明も總て皆個々の人間卽ち個人の才能から生れるのである。

社會にせよ、國家にせよ、發明の才能を有する人間卽ち創造の天分を具へた人物を尙び、その手腕を容易に發揮させ、それをして社會全體の福祉を增進させるやうな組織を持つものは良い社會であり、良い國家である。物質的發明たると精神的發明たるとを問はず、發明は發明家によつて行はれる。發明は大切

であるが、その發明を行ふ人物は尙更に大切である。それ故、發明家の如き賢能の人物を國家社會全體のために有效に活用することは、國家や社會の最大の任務である。否、單に手腕を發揮せしむるに止まらず、國家や社會の組織そのものが賢能の人物の手腕によつて運營せられてゐなければならぬ。かくして初めて國家も社會も機械主義の咒詛を免れて生命のある組織になることが出來る。國家や社會の機構は賢能の人物が上にゐて大衆が下にゐるやうになつてゐなければならぬのである。

それ故に、國家も、社會も、賢能の人物が大衆の間より頭を擡げんとするとき、これを妨げざるのみならず、國家社會本來の使命に從ひ、百方手段を盡してこれに便宜を與ふべきである。人類の向上發展に必要なものは大衆でなくて創造の天分を有する人材である。かくの如き人材は本當に人類の恩人であるから、これを尊重し、これに權勢を與へ、その手腕を十分に發揮せしめるのが國家社會全體の利益である。頭腦も無ければ、手腕もなく、天與の才能の微塵も

ない大衆が跋扈してゐては、國家は治まらず、全體の利益も何もあつたものではなく、天分の優れた賢能の人物が上にゐて國政を運用して初めて國家も榮えるのである。

前にも述べた如く人材の選別は苛烈なる生活闘爭場裡の優勝劣敗の關係によつて行はれるのである。この闘爭場裡に於て、多くのものは中途で挫け、倒れ、最後まで戰ひ拔いて選ばれた者として殘るのは極めて僅かな者である。優勝劣敗の關係による淘汰は今日でもあらゆる方面で行はれてゐる。思想界でもさうであり、藝術界でもさうである。否、經濟界に於てすらこれが行はれてゐる。たゞ、今日の經濟界では淘汰が自然のまゝに公正に行はれなくなつてゐるといふだけである。優勝劣敗の淘汰は、國家の行政方面にも、軍隊にもこれを見ることが出來る。これらの方面では、優れた人物が重んぜられて上に立ち、下に對して權威を有し、下に立つ者は上に對して責任を負ふことになつてゐる。卽ち人物本位といふことが行はれてゐるのである。然るに、獨り當今の政

治方面だけは全くこの天然自然の原則に背いてゐて人物本位が行はれない。人類の文化は總て天才を具へた個人の創造したものであるのに、國家の政治方面特に政府の要路では多數決主義が幅を利かし、而もそれが次第に國民の生活全般に浸潤してこれを荼毒し、これを破壞し始めてゐる。今日世界の諸國に人物本位を棄てて人物よりも大衆に重きを置かんとする傾向が現れてゐるのは、要するにユダヤ人の陰謀であつて、彼等の寄生してゐる國家に多數決主義を持ち込み、これによつてその國家を攪亂しようと企ててゐるのである。多數決主義を取り入れるとアーリア人種の建設的な原理が廢つてユダヤ民族の破壞的な原理がのさばり出す。卽ちユダヤ人は他の民族や人種の『破壞の酵母』であるのみならず、結局に於て人類文化の破壞者である。

人間の生活のあらゆる方面で人材を抑へて大衆に幅をきかせようとするのはユダヤ人の陰謀で、この陰謀が純文化の方面に現れたのがマルキシズムである。この陰謀が政治方面に現れたのが代議政治で、今日では、下は町會村會の

如き微細な組織より、上は全ドイツを統御する最高政府に至るまで、悉くこの代議政治に惱まされてゐる。また、この陰謀が經濟方面に現れたのが勞働組合運動で、勞働組合は勞働者の利益とならず、他民族の國家を破壞して世界を支配せんとするユダヤ人の傀儡になつてゐる。經濟界は人物本位を棄てて大衆の干涉する所となるに從ひ、萬民の用に立つべき大切な能力を失つて次第に衰退せざるを得ない。勞働者の利益を計るよりも經濟界を支配することを以て目的とする工場委員會の如き制度は、總て國家の經濟を破壞する手段である。かくの如き組織は國家の經濟全體を破壞するが故に、結局個人の生活も亦これによつて損害を蒙らざるを得ない。口先だけの理窟で國民を滿足させようとしてもそれは到底駄目で、國民は、日常必須の物資を十分に與へられ、國家の經濟全體が榮えなくては個人の生活も豐かにならぬといふことを悟つて初めて滿足し得るのであるから、理論は如何にあらうとも、各人の享有する物資が減少するやうな經濟組織は良い組織といふことは出來ない。

假令大衆本位のマルキシズムが現在の經濟組織を旨く引き繼ぎ得るにしたところで、それだけではマルキシズムが正しい主義であるといふことにはならない。マルキシズムの得失は現存のものを引き繼いでゆけるといふことだけでは決せられぬ。寧ろ大衆本位のマルキシズムに現在我等の見るが如き文化を造り出せるか否かが問題である。今日既に出來上つてゐる經濟組織をそのまゝ受け繼いでマルキシズムの指導の下に運用してゆくことは出來ても、大衆本位の理論を應用して今日見るが如き文化を造り出すことが出來ぬとあつてはマルキシズムも知れたものである。

マルキシズムにかくの如き文化創造の能力がないことは既に試驗ずみといつてよい。マルキシズムは未だ曾て何所にも文化を造り出したことがなく、獨創の經濟組織を編み出したこともない。否、それのみでなく、從來から存在する組織を大衆本位の理論に基いて運用して行くことさへ出來ず、幾何もなくして、妥協苟合を事とする大衆本位から人物本位に轉向せざるを得ざるに立ち到

つた場合が少くない。マルキシズムの政黨にあつても、黨内ではやはりこの人物本位を取らざるを得なくなつてゐる。

かくの如く、民族主義の世界觀がマルキシズムの世界觀と根本的に異なる所は、前者が啻に人種の優劣を認めるのみならず、人材の大切なる所以をも認め、人材をして國家の柱石たらしめんとしてゐる點にある。卽ち、人種の優劣を認めると共に國内に於て人材主義を主張する所に民族主義の世界觀の特質があるのである。

若し、國民社會主義運動に携はる者がかくの如き世界觀の根本特質を忘れて、徒らに今日の國家の外形の改革を事とし、或は大衆本位の立場を取れば、國民社會主義運動は結局に於てマルキシズムと選ぶ所なきものとならう。自ら稱して世界觀といふが如きは烏滸の沙汰である。期するところの社會改革が人材主義を排して大衆本位に移ることにありとすれば、今日の既成政黨と同じく國民社會主義も亦マルキシズムの毒素に蝕ばまれたものといはなければなら

ぬ。

民族主義の國家は人材の大切なる所以を認め、適材を擧げて十分に手腕を發揮させ、國家全體の生產能力を高めて國民各自の分け前を豐かにし、かくして國家國民の福祉を增進すべきである。

從つて、又、民族主義の國家は、政治の凡ゆる方面、特に政府から、代議制度の多數決主義卽ち大衆本位主義を排除して、力量手腕の優れた人物を活用すべきである。

以上述べた所を要約すると次の如き結論が生れる。

國民の中で最も頭腦の優れた人物が何時でも必ず政治の局に當つて國民を統率して行けるやうになつてゐる國家は、制度に於ても、政體に於ても、最も良い國家である。

これを經濟界に例をとつて見るに、如何に有爲な人物でも簡單に上からそれと決めてかゝれるものではない。人に知られるには下から叩き上げて行かねば

ならぬ。下は小さな商賣から上は大きな企業に至るまで一通りや二通りの苦勞では物にならず、油斷をすると忽ち實生活の試驗に落第してしまふが、それと同じく政治の方面でも、有能の人物は簡單に『見つかる』ものでない。政界に頭を擡げんとする者もやはり並大抵の努力では目的を達成することは出來ないのである。但し、拔群の天才は常規を以て律すべきでなく、例外である。

それ故に、國家は、下は小さな町村の自治組織から上は最高政府に至るまで、人材主義が確實に行はれるやうになつてゐなければならぬ。

かくの如き國家では、政治は多數決で行はず、責任を負ひ得る人物がこれを行ふのである。從つて『會議』"Rat"といふ言葉も本來の意味を取り戻すことになる。爲政者は顧問の助言を求めるが、最後の決定を下す者は唯一の爲政者自身である。

曾てプロイセンの軍隊が非常に强く、ドイツ國民の干城として驚嘆すべきものがあつたのは、各指揮官が權威を以て下を率ゐると共に上に對して責任を負

ふことを知つてゐたからである。我等の國民社會主義運動はこの原則をそのまま國家の組織に取り入れんとするものである。

併し、かくの如き國家でも、今日我等が議會と稱してゐる機關を全くなくしてしまふわけには行くまい。但し、かやうな機關の決議は事實上に於て助言たるべく、全責任を負ふべきもの、又負ひ得るものは常にたゞ一人の爲政者である。從つて、又、一切の權威と命令の權利とを有する者もこの唯一の爲政者でなければならぬ。

議會は人材に擡頭の機會を與へる場所である。議員の中でも優秀な人物は他日國家の樞要な地位に就き得る。この點から見ても議會そのものは必要なる存在である。

そこで、また、次の如き結論が生れて來る。

民族主義の國家では、下は小さな自治組織から上は最高政府に至るまで多數決主義の代議制度なるものを認めない。所謂議會は、選ばれて國家の統率者た

る地位に就いた人物の諮問機關としてこれを輔け、その命令によつて仕事を分擔し、必要の場合は、各自の分擔した仕事に就いて絶對の責任を負ひ、諮問機關の議長或は領袖は全般の仕事に就いて責任を負ふべきである。

民族主義の國家では、經濟問題などの如く特殊の知識や經驗を要する問題に就いてはその方に蘊蓄のない連中に諮問するが如きことをしない。民族主義の國家では、議會を最初から政治代表と職能代表との二つの會に分け、この二つが旨く協力して働けるやうに、調節機關として、優れた人物ばかりを選り拔いて作つた元老の會のやうなものを二つの會の上に置くのである。

政治代表の會 Politische Kammer でも、職能代表の會 Berufliche Kammer でも、或はまた元老の會 Senat でも、表決は行はない。これらの機關は何れも仕事の機關であつて表決の機關ではない。議員は諮問に答へて意見を述べる權利はあるが、議決する權利は與へられない。決定する權利は責任を負ふ議長にあるのみである。

以上の原則は一人の人間に絶對の責任を持たせると共に絶對の權力を與へんとするもので、これが行はれれば、次第に立派な政治家が現れて國民を旨く統率して行くやうになるであらう。かやうなことは無責任な議會政治の行はれてゐる今日では夢にも考へられぬことである。

文化や經濟が今日の大を成したのは人材主義が行はれたからであるが、國家もその組織に人材主義を取り入れれば、その隆盛は期して待つべきであらう。

卐

以上に述べたのが國民社會主義の國家觀念であるが、この觀念は果して實現し得るものであるかどうかといふと、勿論容易ではないが必ず實現し得るものである。こゝで何人も忘れてはならぬのは、今日の議會に見るが如き民主主義の多數決政治は決して昔から人類の間に行はれて來たものでなく、時々史上に現れて來てゐるに過ぎず、而もさういふ時代では國民も國家もきまつて墮落し

てゐるといふことである。

國民社會主義の理想を實現することは取りも直さず現在の國家を改革することである。改革は國家の憲法のみならず、其の他の凡ゆる立法に及び、國民生活の全般にも及ばなければならぬ。かやうな改革は理窟だけで出來るものでなく、上から言ひつけるだけで出來るものでもない。これを成し遂げるには、國民社會主義の運動が人物本位の精神に貫かれて黨内に理想の國家組織を實現してゐることが必要である。

それ故、國民社會主義運動は、既に今日より上述の如き信條を殘る所なく體得して、これを黨内に實現し、他日國家の組織をもこれに倣はせ、國家に對して黨内から立派な有用の人物を提供し得るやうに準備しておかねばならぬ。

第五章　世界觀と組織

今まで述べて來た所は民族主義の國家の概觀であるが、かゝる國家は單に國家の必要とする所を知つただけでは實現せられない。民族主義の國家の如何なるものであるかを知るに止まらず、進んでかゝる國家を我等の間に建設する方法を考へねばならぬ。これが大切なことである。今日の國家から利益を得てゐるものは主として既成政黨であるが、かくの如き既成政黨が心を飜へし、自ら進んで今日の態度を改めるといふことは到底望むべくもない。況してや今日の政黨の實權を握つてゐる幹部が殆んど悉くユダヤ人であるに於てをやである。ユダヤ人は世界の各國を滅ぼして地上の覇者たらんとしてゐるものである。若し我等が今日の趨勢をこのまゝ放任してをれば、汎ユダヤ主義の豫言が何時か必ず實現して世界は悉くユダヤ人の所有になるに違ひない。

ドイツの所謂『ブルジョア』や『プロレタリア』は果して幾百萬を數へるか、知らぬが、共にその大部分は怠惰で、莫迦で、おまけに臆病であるから、ユダヤ人と戰ふことも出來ず、戰はんともせず、ずるずると破滅の底へずり落ちつつあるが、ユダヤ人はさうでなく、世界制覇の目的を自覺して脇目もふらずに進んでゆく。それ故、ユダヤ人によつて左右せられる政黨は專らユダヤ人の利害のために働かざるを得なくなる。ユダヤ人の利害がアーリア人種の利害との間に何等相通ずる所のないものであることは言ふまでもない。

そこで民族主義の國家の理想を實現せんとするものは、既成政黨や其の他今日の公共生活を支配してゐる種々なる現存勢力に賴ることなく、民族主義の理想のために戰はんとする意志と能力とを具へた新しい勢力を探さねばならぬ。民族主義の理想を實現するに當つて先づ最初に成し遂ぐべき仕事は、民族主義の國家觀を明瞭に創り上げることではなくて、ユダヤ的な既成觀念を叩き潰すことであるから、これは取りも直さず鬪爭である。如何なる革命に於ても一番

骨が折れるのは、新しい狀態を造りあげることではなくて、これを妨げる邪魔物を除くことである。革命が起きると、偏見に囚はれたる者や利害關係を有する者が一緒に團結してこれを妨害し、彼等の好まざる、或は彼等の存立を脅かす如き新しい理想の擡頭を極力防遏せんとする。これは史上に屢〻見るところであり、古今東西軌を一にしてゐる所である。

革命には二つの方面がある。その一つは、新しい理想を强調して、その實現に努めることで、これは革命の積極的な方面といふべく、他の一つは既成の現存狀態を叩き潰すことで、これは革命の消極的な方面といふべきである。何方も大切であるが、新しい理想の鬪士は先づこの消極的な方面に力を注がねばならぬ。遺憾ながらこれは已むを得ぬことで、どうも仕方がない。

根本から新しい理想のために戰はんとする鬪士は、先づ、鋭利な批判を武器として攻勢に出なければならぬ。鬪士各自には面白くなくても、これは必ず疎かにしてはならぬことである。

今日でも、所謂民族主義者の中には、自分等は建設的に働いて理想の實現に專念せんとするものであつて、消極的に批判して他を攻擊する積りはない、などと自慢さうに言ふ者があるが、かくの如きは歷史を知らず、頭の惡い古物ともいふべき徒輩であつて、その言ふ所は似而非『民族主義』の囈語であり、今日の世間をさへ少しも知らぬ證據である。マルクス主義にだつて理想はある。ユダヤ人の國際金融獨裁の確立といふ目的があり、これが實現達成のために働く建設的な方面がある。併し、マルクス主義には他になほ破壞的な方面があるのである。マルクス主義は七十年の長きに亙つて主として批判を事とし、恰も酸の鐵を蝕むが如く飽くことなく批判を續け、攻擊を續けて、遂にドイツの帝政國家を潰してしまつたのである。謂ふ所の『建設』はその後のことである。また、これはマルキシズムたらずとも當然のことであつて、筋道に叶つてゐる。幾ら新しい理想を掲げて新しい狀態を說いたところで、たゞそれだけでは既成の現狀を除き得るものでない。現狀の維持を欲する者とか、現狀から利益

を得てゐる者は、幾ら革新の必要を說き聞かされても耳にとめるものでなく、考へを改めて革新の傘下に馳せ參ずるものではない。若し、所謂建設的な方面に偏つて破壞的な方面を疎かにし、反對する者は反對するに委せておくといふことになれば、あれも善い、これも惡くないといふことになり、新舊二つの狀態が同時に存立してどつちが善いのか區別がつかなくなる。そこで、謂ふ所の世界觀は他の黨のものと並立することになり、黨は口舌のみに終始する黨となり果てて、結局、世界觀の實現を成し遂げ得なくならう。然るに、我等の世界觀なるものは他の世界觀と兩立するを得ないものであつて、他の黨と並立するが如き黨の役目では滿足されない。世間が悉く他の世界觀を棄てて新しい世界觀を認め、新しい世界觀に從つて生活全體を革新して吳れることが是非とも必要である。卽ち、新しい狀態を代表する世界觀は舊い狀態を代表する世界觀の存續を許し得ないのである。

宗敎にもこれと恰度同じことがある。

基督教でも、その教義を弘めるのには、單に說教するだけでは駄目で、是非とも先づ異端を征伐することが必要であつた。これは或は狂信ともいふべく、偏執ともいふべきであらうが、堅固な信仰はかくの如き偏執から生れたのであつて、基督教が布教に成功したのも實はこの偏執のお蔭であつたともいへるのである。

これに對して或は異議を立て、世界史上に見るところの異教排斥は概ねユダヤ的な考へ方が然らしめたものであつて、ユダヤ人のユダヤ人たるところは偏執にあり、狂信にあるのではないか、と言ふ人もあらう。尤も千萬なことである。遺憾ながら事實は正にその通りであつて、かやうな偏執はユダヤ人が此の世に現れるまでは人類の未だ曾て知らざる所であつたに違ひない。併し、そんな詮索をしたところで、今日の世の中が偏執我慢の力に俟たなければどうにもならぬ狀態になつてゐることに變りはない。ドイツ國民を現在の窮狀から救ひ出さうとする以上は、これこれのことがなかつたらどんなに良からうだの、か

くかくのことがなかつたら旨く行くだらうだのと徒らに愚痴をこぼしてゐたのでは駄目で、どうすれば現在の不都合な狀態を除き得るか、先づそれを考へねばならぬ。既成の世界觀が偏執我慢の烈しいものであれば、それを破るにはやはり偏執我慢の強い、而も純眞なる、新しい世界觀を以てするほかはない。

異敎を斥け、他宗を認めぬのは精神上の暴行にほかならぬが、かやうなことは大昔にはなく、基督敎の流布と共に現れて、それ以來世の中に幅を利かすやうになつた、と考へればあまり良い氣持もしなからうが、今日でもなほかやうな精神上の暴行が世の中に行はれてゐるのは否むべからざる事實であり、强制には强制を以て齒向ひ、暴行には暴行を以て對抗する外に方法のないのも否むべからざる事實である。新しい理想を實現するには先づこれを妨害するものを倒さなければならぬ。倒して後に初めて新しい狀態を建設し得るのである。

政黨は妥協苟合を事とするが、世界觀はこれを知らない。政黨は反對黨の存立を容認するが、世界觀は唯我獨尊無過誤を建前として他の世界觀を容認しな

い。

如何なる政黨でも、結成の當初は、他の政黨を押し除けて天下を獨占せんとする傾向のあるもので、そこに世界觀ともなり得る信念らしいものが必ず見られるのである。ところが、政黨は、概ね淺薄な綱領を以て滿足するから、世界觀のために戰ふ場合に見るが如き氣魄を失ひ、希望が小さいから、集つて來る者が鬪志のない懦弱な斗筲の徒輩ばかりになる。かくして、政黨は、概ね結成後間もなく、取るに足らぬ憫れな存在になり終り、世界觀のために十字軍を起すなどのことは止め、所謂『積極的協力』によつて出來るだけ早く政府の要所に割り込んで飯の種にありつき、出來るだけ永くそこに嚙りついてゐることばかりを考へるやうになる。この外に政黨の目的はなくなつてしまふのである。そこで、若し、亂暴な競爭對手が現れて飯櫃の側に割り込み、力に委せて先客を押し退けるやうなことでもあれば、押し退けられた彼等黨人は、或は暴力を用ゐ、或は奸計を弄して、前の方へ、前の方へと、これまた飢ゑた連中の間を

かい潜り、掻き分け、理想も信念もあればこそ、飯櫃にありつくまでは身をも心をもたゞそればかりに勞して休むことを知らない。これこそ政界の豺狼といふべきであらう。

凡そ世界觀なるものは他の世界觀の存立を許し得ないものであるから、既成の狀態を惡いと認めながらそれをそのまゝにして置くとか、或はその存續に力をかしてやるとかいふことのあるべき道理がない。惡いと認めた以上は、凡ゆる手段を盡してそれを除き、對手の抱く理想なるものを叩き潰すのが本當である。

かくの如く全く破壞を目的とする鬪爭は、誰の目にも著いて忽ち危險視せられ、從つて四面楚歌の苦況に立ち易い。その困難なことは、恰度新しい理想を實現せんがために積極的に鬪爭する場合と同じである。これをやり遂げるには是非とも果敢な鬪士が要る。卽ち、新しい世界觀が新しい理想を揭げて他の世界觀を克服するには、國民の間から最も氣力のある者を選び、これを集めて强

固な戰鬪團體を造りあげることが必要である。同時に、新しい世界觀の中から特に大切な觀念を抽き出し、これを鬪士にもよく分るやうに簡潔明瞭に標語の如く纏めて新しい鬪爭團體の信條たらしめることが必要である。從來の政黨の綱領は要するに選擧目當のものばかりであるが、新しい世界觀の綱領は既成の秩序や狀態に對して、卽ち既成の世界觀一般に對して宣戰を布告するものでなくてはならぬ。

それなら、世界觀の鬪士は誰でも皆その指導者の理想や思想を巨細に知悉してゐなければならぬかといふと、そんな必要はない。根本の精神ともいふべき二三の要點をしつかり摑み、大綱を辨へて、彼等の世界觀は必ず勝つといふ自信に徹底することが何よりも大切である。これを軍隊に就いて見れば、兵卒は高等戰略まで悉く知つてゐなければならぬといふことはない。兵卒としては、嚴格な軍紀を守り、與へられた任務の正しさを疑はず、これをやり遂げれば必ず戰さに勝つものと信じて、これに全力を盡すやうに教育せられてをれば

それで良いのである。大なる希望を抱いて洋々たる未來に生きんとする大運動の闘士も亦正にかくの通りでなければならぬ。

他の點は暫く別として、單に教養や見識のみに於ても兵卒が悉く將軍と同じであつたら、その軍隊は役に立たぬ。それと同じく、一つの世界觀を代表する政治運動でも『頭の良い』者ばかりが集つてゐるのでは物にならぬ。政治運動でもやはり單純素朴な兵卒が必要で、さもなくば運動の内部の紀律が保たれぬことになる。

凡そ組織とか團體とかいふものは、頭腦の優れた少數の者が上にゐて指揮し、頭腦よりも感情で動く多數の者が下にゐてそれに躡いて行くから成り立ち得るのである。同じ中隊でも、二百人の隊員が悉く教育の高い人間であるのと、十人だけ教育が高くて殘りの百九十人が教育の低い人間であるのとでは、訓練する上に非常な難易があり、軍隊としては後者の方が良いに違ひなからう。

これに目を著けて旨くやつたのが社會民主黨である。社會民主黨は黨員を集

めるに當つて、曾て軍隊にゐて紀律を教へ込まれた者を國民大衆の間から選び取り、それを更に社會民主黨の嚴格な規律で鍛へあげることにしたのである。又、黨の組織も宛ら軍隊同然で、黨員は將校と兵卒といつたやうなものに分れてゐた。卽ち、兵隊出身のドイツ人勞働者は兵卒で、知識階級のユダヤ人が將校、勞働組合幹部のドイツ人が下士といつたやうなことになつてゐたのである。ドイツのブルジョアはマルクス主義の政黨に無教育の黨員の多いことを嗤つてゐたが、焉んぞ知らん、社會民主黨が彼の如く大を成し得たのは無教育の大衆を味方に取り込んだからである。蓋し、ブルジョアの既成政黨は頭ばかりで手足がなく、誰もが理窟ばかり並べてゐて役に立たぬ烏合の衆にほかならなかつたが、マルクス主義の政黨では、教育のない者を集めて黨兵ともいふべき軍隊同然のものを造りあげた。この黨兵の中には曾て軍隊にゐた者が多く、これが、曾てドイツの將校に對して行つたのと同じやうに、今度は黨兵として黨の領袖のユダヤ人に絕對に服從したから紀律が保たれた。ドイツのブルジョ

アは獨りお高く止まつてゐて人間の心理などには目も呉れなかつたから、社會民主黨が無教育の人間を集めて黨員にした理由を深く考へて見ようともせず、從つて、また、社會民主黨に隠れた恐しい底力のあることをも悟らなかつた。否、政黨は教育のない黨員の多いものよりも『知識階級』の黨員の多いものほど良く、また、政府を組織するにしても知識階級の黨員の多い政黨でなければ資格がなく、機會も少い、といふやうに思つてゐた。本來、政黨の强味は黨員が頭の良いものばかりで獨特の卓越した知性の持ち主だといふ所にあるのでなく、黨員が頭の良い領袖を信頼してこれに絶對に服從する所にある、卽ち紀律にある。大切なのは上下の紀律の正しい指導といふことである。戰場で二つの軍隊が對峙した場合、どちらが勝つかといへば、最高の戰略まで教育を受けた隊員ばかりの軍隊は負け、指揮が優れてゐると共に部下が指揮に絶對に服從して手足となつて動くやうに良く訓練せられてゐる軍紀の嚴しい軍隊の方が勝つ。然るにドイツのブルジョアにはこんなことさへ分らなかつたのであ

る。

以上は如何なる世界觀でもそれは果して實現し得べきか否かを調べる場合に常に念頭に置いてゐなければならぬ大切な事柄である。

世界觀を實現して他の世界觀に對して勝を占めんとすれば、その世界觀を鬪爭運動に移さねばならぬが、運動の鬪士は前に述べた如く概ね敎育の低い人間であるべきであるから、運動の綱領はかくの如き鬪士にもよく分る平易なものでなくてはならぬ。運動の究極の目的は不動たるべく、指導精神は深遠たるべきであるが、それだけにまた綱領は獨創に富み、人間の心理に適つたものであるべきであり、卽ち人心を收攬するに足るものでなくてはならぬ。如何に高遠なる理想でも大衆の助力がなければ永久に理想たるに止まつて實現するを得ないのである。

民族主義の理想は今日なほ漠然たる希望の域を脫してゐないが、これを明白に實現するには、民族主義に關した色々な思念の中から最も大切な本質的內容

を有するものを抽き出して誰にも分り易い綱領に纒め、これによつて大衆を牽きつけ、大衆をしてこれを信條として民族主義のために戰はしめねばならぬ。こゝにいふ大衆とは卽ちドイツの勞働者のことである。

かやうなわけで、我等の新運動にあつては綱領は僅か二十五個條に壓縮せられた。これらの綱領は大衆に我等の運動の趣旨を傳へるのを主眼とするもので、謂はば國民社會主義の政治的信條であり、一はこれによつて同志を集め、一はこれによつて同志に齊しく連帶の義務を認めさせ、以て同志の團結を保たんとするものである。

ところで、我等の選擇した綱領に就いてその是非善惡を考へる場合に必ず忘れてならぬことが一つある。我等の運動の綱領は根本の信念に基いたものであつて究極に於て絕對に正しいのであるが、これを個條に纒めるに當つては先にも述べた如く大衆に分り易く組み立てる必要があつた。從つて、同志の間にも、今後時日を經ると共に或る個條はすつかり書きかへたがよいとか、もつと

旨く言ひ表したがよいとかいふ問題も出て來るに違ひなからう。併し、かやうな修正をすると大抵は碌でもない結果になる。元來、綱領といふものは運動の信條であり、宗教に於ける教義の如く確乎不動であつて、同志の信仰する所でなければならぬ。その信條が批判を受けるやうになれば、運動は動搖せざるを得ない。一つでも修正問題が起きると必ず議論百出して、それでゐて旨く纏つたものが出來るかといふとさうでなく、新しい善いものは出來ないで、徒らに紛議の種子を蒔き、同志の間に混亂を生ぜしめるに過ぎないことが多い。若し、それでも綱領の修正が問題になるやうであつたら、運動が分裂しても綱領の形式の纏つてゐる方が善いか、それとも綱領の形式には缺くる所があつても、運動が纏つてゐて、同志の間に内紛がなく、一致團結してゐるのが善いか、篤と考へて見るべきで、考へれば誰だつて前者が惡くて後者の善いことに氣が着くであらう。綱領の修正は概ね外形に止まるものであるから、修正をやり出すと限りがなく、直しても直してもまだ直したくなる。おまけに、人間は

多くは淺薄なものであるから、綱領の形式と運動の精神とを混同し、形式が變ると共に使命も變つたかの如く考へる虞れが大いにある。そこで、綱領の修正せられるのを見ると、理念のために戰はんとする意志も氣力もなくなり、外部に對して戰ふことを止めて內輪で論爭を事とし、そればかりで日を送つて精根を盡すやうになる。

要するに、教義とか綱領とかいふものは大體に於て間違つてゐず、筋が通つてゐさへすれば、その後になつて多少實情に副はぬ所が出て來ても直したりせず、そのまゝ存置するのが善いので、今まで運動の信條として絕對に信ぜられて來たものを中途で直して紛議の種子を蒔くと、結果は非常に面白くない。殊に運動が未だ目的を達せず、勝利を期してなほ戰ひ續けてゐる間は、綱領に手を觸れてはならぬ。何故かといへば、綱領の正しさを絕對に信ずればこそ戰ふ力も出て來るのである。戰ひの最中に綱領の形式を度々變へられては、戰ふ者は不安を覺え、疑義を抱かざるを得なくなる。

綱領の生命は外部の形式にあるのではなく、內部の精神にある。而して精神は恒常不變でなくてはならぬ。この運動の精神を毀損しまいとすれば、內訌や不安の種子となるものを悉く退けて理念のために戰ふに必要な鬪志を保持すべきである。

この點に就いても加特力教會には學ぶべきものがある。加特力教の信條の中には當今の自然科學や調査研究と相容れぬものがあり、ちよつと直せば矛盾しないで濟むやうになるものも少くないが、教會では一字だつて信條に手を觸れようとしない。科學にしたところで、その學說は永久不變のものでなく、絕えず動搖してゐる。教會がそんなものに賴つてゐては立つて行けない。一旦定めた教義を飽くまで固執する所に教會の强味がある。また、それでこそ教義も信徒の信條になり得るのである。加特力教會は、この道理を辨へて、科學の學說に諂つて信條を修正するといふことをしなかつたから、今日の如く盛んになつた。これからも世間のことは何もかも限りなく變つて行かう。この間にあつ

て、加特力教會は恰も北斗の如く動かず、終始その教義を改めないで今後益〻熱烈な信者を吸收することであらう。

それ故、民族主義世界觀の勝利を衷心より希望する者は、第一に世界觀を代表する運動が鬪爭力のあるものでなければ勝利を收め得ないこと、第二に運動の根本たる綱領が確乎不動のものたるべきことを銘記してゐなければならぬ。綱領は、一旦善しと認めて決定した以上は、時流に迎合して修正すべきでない。少くとも運動が勝利を收めるまでは斷じて綱領に手を觸れるべきでない。未だ勝利を收めないのに綱領の是非を論ずるが如きは同志の團結を破るものであつて、綱領をいぢり廻す者が殖えれば殖えるほど運動の鬪爭力は愈〻分裂せざるを得ない。今日『修正』を行つても明日になればまた氣に入らず、明後日になればまた修正するといふことになり、一度始めたが最後、遂に底止する所を知らぬことにならう。

右に述べたことは新しい國民社會主義運動に携はる者の心に銘じて忘れては

ならぬことである。既に述べた如く、國民社會主義ドイッ勞働黨は根本の綱領として二十五個條の項目を採用した。これは確乎不動のものである。現在の黨員たると今後黨員となる者たるとを問はず、苟も我等の運動に加盟する者は、黨の綱領をかれこれ批議したり、作りかへたりすることをせず、一意これを堅持して實現を圖るべきである。さもなくば次代の者も亦それに倣ひ、徒らに形式を追ひ、黨内の無用の詮議に精力を消耗して新しい黨員を吸收することを得ず、運動に新しい鬪爭力を加へることを忘れるに違ひない。蓋し、一般の黨員にとつては、運動の生命は綱領の字句の末にあるのでなく、綱領の精神にあるからである。

我等が國民社會主義運動にドイッ勞働黨といふ黨名を與へたのも右の趣旨に見る所があつたためで、あのやうに通俗な綱領を造つたのも、又、綱領の普及に當つて現在實行してゐる如き方法を取つたのもこれがためである。民族主義の理想を實現せんがためには、ドイッ民族を代表する政黨を造る必要があつ

た。單に領袖たるべき知識人のみならず、勞働者をも包容する政黨を造る必要があつたのである。

かくの如き强力な政黨を造らずに民族主義の理想を實現しようとしても、それは到底出來ない相談である。過去に於て出來なかつた如く、現在に於ても將來に於ても出來ないに違ひない。洵に、我等の運動は民族主義の理想を實現せんとする鬪爭であり、また我等の運動を措いて民族主義の理想を代表するものはない。國民社會主義運動の根本思想は民族主義の精華であり、民族主義の思想はまた國民社會主義の精華である。國民社會主義の勝利を願ふ者はこの事實を認め、これを肝に銘じて忘れぬやうにしなければならぬ。國民社會主義ドイツ勞働黨を差措き、他の政黨によつて民族主義の理想を實現せんとしても、それは出來ないことで、そんなことをするのは大抵騙りのためである。國民社會主義のために戰はんとする者はこの事實をも篤と心得てゐなければならぬ。

世には我等の運動を非難して國民社會主義ドイツ勞働黨が民族主義の理念を

『壟斷』するのは怪しからぬと言ふ者もあらうが、それに對してはたゞ次の如く答へれば宜い。

我等は確かに民族主義の理念を壟斷してゐるが、單に在來の理念を壟斷してゐるのではないので、實用の役に立つものを新しく造つたのである。

民族主義といふ言葉は從來も人の口に上つてゐたが、その內容がはつきりせず、纏つてゐなかつたため、ドイツ國民の運命に何らの影響をも與ふることが出來なかつた。民族主義といふ言葉で今まで現されて來た思想は種々あり、それが必ずしも悉く間違つてゐるわけではなく、中には正しいものもあるが、何しろ區々雜多であつて、互に矛盾撞着するものが多く、渾然一體となり得る內面的聯絡がない。又、內面的聯絡があつても甚だ弱く、從つて國民運動を指導し組織する力がなかつた。

これに反して、國民社會主義運動は、民族主義の各思想に生命を與へて、これを渾然と統一したのである。

卐

昨今では『民族主義的』といふ言葉を我が物顔に用ゐてゐる團體が數へきれぬほどあり、大政黨と稱するものまでが盛んにこの言葉を使つてゐるが、これなども畢竟は國民社會主義の運動に刺戟せられた結果である。國民社會主義の運動がなかつたら『民族主義的』なる言葉を口にするが如きは彼等の思ひも及ばぬことであつたに違ひない。第一、民族主義的といふ言葉の意味が彼等には分らなかつたであらう。特に從來の政黨や團體の領袖の中には、民族主義的なる言葉の內容を心得てゐる者は一人もゐなかつたやうである。蓋し、この民族主義的なる言葉が人々の口の端に上るやうになつたのは、國民社會主義ドイツ勞働黨がこの言葉に纏つた內容を與へてから後のことである。國民社會主義ドイツ勞働黨が人心を收攬し、支持者を獲て黨勢を擴張して民族主義の思想の威力を實證すると、他の政黨までが利慾に驅られて民族主義を看板に揭げるやう

になつたのである。

從來、既成政黨の行動は總て卑賤な動機に出で、選擧の成否を目安としたものであつた。今日、彼等が民族主義的なる言葉を口にするのも黨員が國民社會主義運動に牽きつけられるのを防ぐために過ぎない。卽ち、彼等の民族主義はたゞ見せかけばかりの看板であつて內容のない空虛なものである。今日でこそ既成政黨も民族主義的なる言葉を共の他の言葉と共に標語として盛んに使用してゐるが、かやうに使用するに至つたのは僅か二年前からのことであつて、民族主義といふと、三年前までは彼等はこれに迫害を加へたもので、四年前には彼等から憎まれ、五年前には叩かれ、六年前には莫迦と罵られ、七年前には嘲笑せられ、八年前には民族主義といつても誰もその意味さへ知らなかつたものである。然るにそれを彼等が今になつて俄かに我が物顏に使用するに至つたのは、新しい世界觀を奉ずる國民社會主義運動の擡頭に驚き、放つて置くとこの運動が次第に勢力を占めて彼等既成政黨の存立を悉く許さなくなる虞れを生じ

て來たためにほかならぬのである。

かくの如く、今日では既成政黨も民族主義を看板にしてゐるが、ドイツ國民の要求するものは何であるか、ドイツ國民のために爲すべきことは何であるかといふことに就いては、彼等は少しも知る所がない。これまた、彼等の口にする『民族主義的』なる言葉が借り物たる證據である。

單に既成政黨のみでなく、今日では個人の間にも、矢鱈に民族主義を口にし、何らかの固陋な觀念を基にして取りとめのない計畫を捏ねあげるものがあるが、かくの如きは似而非民族主義者であつて困つたものである。彼等が據り所とする觀念は、それだけで見れば悉く間違つてゐるわけでもないが、一部のものの觀念であつて廣く世間に通用せず、從つて大きな纏つた鬪爭團體を組織する力がない。かやうな似而非民族主義者は、或は彼等自身考へたものの中から、或は讀んだものの中から己の氣に入つたものを拾ひ集めて來て、それで綱領をつくり上げてゐる。眞の民族主義者にとつては、眞向から反對して來る對

手よりもかやうな似而非民族主義者の方が却つて危險である。こんな連中は、餘程取柄のある者でも無用な理論家の域を出でず、大抵は有害な法螺吹で、顏中に髯でも生やして仰々しく原始ゲルマン人の身振をして見せさへすれば己の行爲や能力の無意味無內容をごまかし得るかの如く考へてゐる徒輩である。

こんな徒輩のすることは總て役に立たぬが、それにつけても新しい國民社會主義運動が鬪爭を開始した當時のことを思ひ起すと感慨の深いものがある。

第六章　國民社會主義ドイツ勞働黨創立

當時の鬪爭と演說の意義

我等が最初の大會を催したのは一九二〇年二月二十四日であつて、場所はホーフブロイハウスの大廣間であつた。この大會が終つて間もなく、我等は直ちに次の大會の準備に取りかゝつた。從來は、ミュンヘン位の町では、小さな演說會でも毎月一回づつ開いたら聽衆が來るかどうか疑はしいとせられてゐた。況して一と月に二回も開いたら聽衆は尙更來ないに決つてゐる。然るに我等は今や八日目毎に、卽ち毎週一回づつ大演說會を開かうといふのである。その頃、既に、自分は聽衆が來て吳れさへすれば途中で歸らせずに必ず終りまで演說に耳を傾けさせるだけの自信を持つてゐたが、その肝心な聽衆が果して來て吳れるかどうか、それがどうも心配でならなかつた。

ミュンヒナー・ホーフブロイハウスの大廣間はこの當時から我等國民社會主義者にとつて殆んど神聖な場所になつた。毎週一回、殆んど定つてこの大廣間で演說會を開いた。度を重ねるに從つて聽衆は次第にその數を增し、倍々熱心になつて來た。演題としては、その頃誰も氣にかけなかつた『大戰の責任』を始めとし、媾和條約、其の他苟も國民を警醒するに足り、或は立黨の精神から見て必要と思はれるものは何でも採り上げられたが、そのうちでも特に我等が力を用ゐ、注意を拂つたのは媾和條約のことであつた。これに就いて當時我等が大衆に對して何度も繰返して豫言したことは今日までに既に殆んど悉く的中して我等の言つた通りになつてゐる。大戰の責任や媾和條約に就いて論議することは今日では甚だ容易であるが、當時にあつてはなかなかさうでなかつた。因循卑屈なブルジョアでなく、マルキシズムに染つたプロレタリアの集つてゐる所で公然と『ヴェルサイユ條約』を攻擊することは共和政府に對する反逆にほかならず、復辟とまではゆかなくても反動の志を抱く證據と見られたもので

ある。それ故、演壇に立つてヴェルサイユ條約を批評し始めようものなら、忽ち聽衆の間から判で押したやうに『ブレスト・リトヴスク條約はどうした、ブレスト・リトヴスクは』といふ彌次が飛び出したものである。一齊に怒號し、咆哮し、遂に聲が嗄れて出なくなつてしまふか、それとも辯士が演說をあきらめて引き退つてしまふまで喚き立てるのである。こんな物の分らぬ國民が他にまたとあらうか。自分はかやうに猛り立つ聽衆を見てゐると情けなくなつてしまひ、頭を壁に叩きつけて死にたいほどにも思つた。ヴェルサイユ條約は屈辱の條約であり、强制の條約であり、ドイツ國民を裸になるまで掠奪せんとする前代未聞の條約であるが、國民はそれに氣がつかなかつた。說明して吳れる者があつても耳を藉さず、聽かうとしなかつたのである。これも國民がマルクス主義に毒せられ、敵國の宣傳に誤られて正氣を失つたためであるとすれば是非もないことで、國民ばかりを責めるわけにもゆかない。責むべきは寧ろ國民をかくの如き狀態に放置してゐるものの方であつて、その罪は眞に測るべからざ

るものがある。マルクス主義や敵國の宣傳が國民を惑はしてゐるとすれば、その惑ひを解き、蒙を啓いて眞實を知らしめ、以て國民の墮落を喰ひ止めねばならぬ。然るに、ブルジョアは果して何を爲したか。何も爲さなかつた。ブルジョアは何も爲さなかつたのである。當時身を挺してその任に當るものが一人もゐなかつた。今日所謂民族主義の使徒を以て自ら任じてゐる者の中には確かに一人もゐなかつた。恐らく彼等と雖もヴェルサイユ條約の非を知らないわけはなく、顏を合せれば惡く言つてゐたに違ひないが、仲間同志の集りやお茶の會で內證に喋言るだけで、狼のやうな連中の所へ出かけて堂々と自說を主張する勇氣がなかつた。折角出かけたと思へば狼と一緒になつて調子を合せて咆えてゐたのである。

國民社會主義ドイツ勞働黨はまだ出來たばかりで小さく、中堅の黨員も少かつた。そこで、自分は、黨勢を擴張して黨員を獲得するには、先づ戰爭の責任問題を採り上げて事の眞相を暴露するに越したことはないと考へた。その後の經

過から見ても、大衆に對してヴェルサイユ條約の正體を敎へたことが我等の運動の大成に寄與してゐるのは明かである。併し、當時はまだ大衆がヴェルサイユ條約をデモクラシーの勝利として歡迎してゐた頃であるから、これを公然と非難するのは容易でなかつたが、それでも自分は敢然として攻擊し、我等は飽くまでもヴェルサイユ條約に反對するものであることを大衆の腦裡に叩き込んだ。僞せ物といふものはどんなに飾つてゐても何時か嚴しい現實によつて化けの皮をはがれるに決つてゐる。ヴェルサイユ條約も他日必ずその憎むべき正體を大衆の前に現すに違ひない。その時に至れば、大衆も早くから眞相の暴露に努めた我等の態度を想ひ起し、成る程と合點して我等を信用するやうになるに違ひない。

苟も國家、國民の死活に關する問題を扱ふ以上は、假令國民が上下を擧げて所見を誤まり、我等と判斷を異にしてゐても、我等はそれに雷同せず、人氣に障らうと、憎まれようと、或は喧嘩にならうと、敢然として我等の主張を維持

しなければならぬ、といふのが當時既に自分の抱いてゐた意見であつた。我が國民社會主義ドイツ勞働黨は輿論の傀儡でなくして輿論の指導者でなくてはならぬ。大衆の奴隷でなくて大衆の主人でなくてはならぬのである。

有力な反對黨が手管を弄して國民を欺き了せ、國民に正氣の沙汰とも思へぬことをやつてのけようとさせたり、間違つた意見に與したりさせてゐるのを見ると、未だ强固ならざる新黨は、動もすれば誘惑を感じて、反對黨の綱領の中で國民に人氣のあるものを自黨の綱領の中に取り入れようとするものである。特にその綱領に外見だけでも正しい根據がありさうに思へるとき、この誘惑は一層强い。人間といふものは兎角卑怯であるから、誘惑されて一旦これに陷ると今度はそれを辯護しようとして何やかやと理由を搜したがるもので、また大抵の場合自己の主張と矛盾しないやうな恰好の理由を見つけ得るものである。

自分もかやうな誘惑にぶつかつたことが幾度かある。我等の運動も、人工で作られた輿論に捲き込まれ、或は輿論に引きずられて人氣に投ぜんとしたの

である。それを喰ひ止めるには必死の努力が必要であつた。最近の例を一つ擧げると、ドイツ國民の死活などまるで眼中にない惡德新聞が南ティロール問題を煽り立てたことがあつた。この問題をやかましく言ひ立てればドイツの不爲になるに決つてゐる。ユダヤ人はそれを心得てゐるから盛んに書き立てて輿論といふものを造り上げた。然るに所謂『國民主義』を標榜する人士や政黨乃至愛國團體は少しもそこに氣がつかず、ユダヤ人のために働くことになるとも知らないで、たゞ所謂輿論なるものを恐れるのあまり世間に雷同し、愚かにもユダヤ人の操るまゝにイタリアのファッシズモ(註)を攻擊した。我等ドイツ人にとつては、このファッシズモこそ今日の墮落した世の中で望み得る唯一の光明であつた筈であるのに、それを攻擊したのである。イタリアのムッソリーニはファッシズモの大旆を掲げて少くともイタリアをユダヤ・フリーメーソンの桎梏から解放し、世界を覆滅せんとする國際主義に對して國民主義を以て戰つてゐる人物である。然るに、所謂ドイツの愛國者は、世界を股にかける國際ユダヤ人が

徐々に而も確實にドイツの咽喉を締めつけてゐる時に、このイタリアのムッソリーニとそのファッシズモとを攻擊してゐたのである。それといふのも所詮は意志が弱かつたのである。誘惑に負けたのである。風に順つて帆をあげ、輿論に雷同して世間に附和する方が弱者には樂に決つてゐる。併し、これは輿論に對する降伏といはねばならぬ。人間は兎角卑劣であつて自他を欺きたがるもので、それ故、輿論に對する降伏をも降伏と認めず、何のかのと言ひ拔けるかも知れぬが、彼等が世間に附和したのは、彼等が臆病であつて、ユダヤ人の造りあげた輿論を恐れたがためにほかならなかつたことは確かな事實である。その他の理由は意識して罪を犯した小人の哀れなる口實に過ぎない。

我等の運動もうつかりしてゐるとこの輿論に捲き込まれる虞れがあつた。捲き込まれたら運動もそれまでであるから、何としてもそれを防がねばならなかつた。當時ドイツの國内にはイタリア攻擊の火の手が煽られて焰の如く燃え熾つてゐた。その間に立つてイタリア攻擊の不可を說いて輿論に反對するのは世

間の人氣を得る所以のものでなく、大勇の者と雖も容易になし得ざるところである。併し、古今の偉人傑士の中には、かくの如き場合に敢然衆論に反對し、所信を斷行して遂に殺されたものが少くない。偉人の偉人たる所以もこゝにあるのであつて、さればこそ後世の者も跪坐して崇拜するのである。

我等の運動は知己を後世に待たんとするものであつて、現在一時の喝采に喜憂してはならぬ。現在の輿論に逆ふのは艱難を求めることであるから、個人としては不安に堪へぬかも知れぬが、何も恐れることはない。不遇の時節を克服すれば必ず救はれて勝利の榮冠を得るのである。世界を革新せんとする運動は現在を目安とせず、將來のために邁進すべきである。

古今の偉人傑士は、事を爲すに當つて、概ね最初は世間から少しも理解せられなかつたものである。彼等の見識や意志は輿論と正反對なものが多いからである。併し、史上に不滅に殘るものは概ねかくの如き人物の業績であるといつて差支へない。

我等の意見も世間から容易に理解せられないものであることは、公然と世間に打つて出て運動を始めた時から既に分つてゐた。自分は決して『大衆の機嫌を取らうとせず』大衆の僻見を破ることに努めたのである。何時でも、また、何所でもさうであつた。當時自分が出かけて行つた演說會では、自分の言はんとすること、考へてゐることと聽衆の考へてゐること、望んでゐることとがいつもあべこべであつた。自分はさういふ人間を二三千人も前にして二時間ぐらゐ喋言つたのであるが、彼等の信念が間違つてゐることを說き、邪見の依つて來る所を一々明かにし、彼等をして遂に我等の信ずる所を信ぜしめ、我等の世界觀を奉ずるに至らしめるのが自分の演說の目的であつた。

その頃、自分は演說を重ねてゐるうちに嫌て大切なことに氣がついた。何かといふと、それは敵の武器をもぎ取つて直ちにそれで敵を擊つといふことである。我等の運動、特に我等の演說を妨害しにやつて來る者の言ふことはいつも決つてゐた。我等の演說を彌次る、その文句がまるで『筋書』を讀むやうにい

つも同じであつて、どう考へても彼等ははつきりした目的の下に一律に訓練を受けてゐるものとしか思へなかつた。また、事實その通りで、宣傳の規律といふことにかけては敵ながら眞に立派なものであつた。自分は、これが敵の武器であることを知つて遂にこれを封じ得たのみならず、あべこべにこれで敵を擊つ手段を工夫した。これは今日もなほ窃かに誇りとするところであるが、二年ほどの間に、自分は敵の武器を以て敵を擊つ祕訣を完全に會得したのである。

敵の武器をもぎ取つてそれで敵を擊つといふのはどういふことかといふと、演說會で討論の時に出て來さうな反對論の形式や內容を前以て豫測し、敵が言はんとするところを機先を制して此方で封じてしまふのである。卽ち、敵が反駁に用ゐさうな論據を此方から持ち出して一々これを說破してみせるのである。聽衆といふものは、反對の意見を抱いてゐても、その意見なるものが元來彼等自身の頭から出たものでなく、敎へ込まれたものであるから、此方で先廻りをして彼等の賴りにしてゐる論據を叩きこはしてやれば、惡意のある者でな

ければ容易に納得し、疑念の晴れるに從つて却つて此方の演說に耳を傾けるやうになるものである。

『ヴェルサイユ媾和條約』と題して自分が初めて演說したのは所謂『敎化士官』として軍隊にゐた時であつたが、敵の武器を以て敵を擊つ祕訣を悟つてからは、この題目を少し變へて『ブレスト・リトヴスク媾和條約とヴェルサイユ媾和條約』とした。單に『ヴェルサイユ媾和條約』だけでは駄目だといふことは、自分が初めてこの問題で講演して間もなく、否、自分の講演に就いて討論が行はれてゐる間に既に氣のついてゐたことで、世間の人間はブレスト・リトヴスク條約に就いて何も知つてゐず、色々な政黨の巧妙な宣傳に誤られて、ブレスト・リトヴスク條約こそ古今未曾有の恥づべき暴虐行爲であるかの如く考へてゐたのである。色々な政黨が大衆に對して嘘八百を並べ立て、繰返し繰返して宣傳したから國民はそれを信じ、ブレスト・リトヴスク條約はドイツの敢てした犯罪であり、ヴェルサイユ條約の苛酷も畢竟はこの犯罪に對する當然の

應報に過ぎないと考へるに至り、ヴェルサイユ條約を非難するのは不法を敢てするものであるとして本氣に腹を立てるものも少くなかつた。かの『回復』Wiedergutmachung といふ奇怪な言葉がドイツ國内に行はれて誰もこれを恥としなかつたのも、やはり、宣傳に誤られたがためで、國民の中には惑はされてこの奇怪な僞善をも高尚な正義を行ふ所以であるかの如く考へるものが多かつた。情けない話であるが、事實は正にこの通りであつた。さればこそ自分もブレスト・リトヴスク條約の眞相を說明するに努めたわけであるが、これが非常に良く利いたと見え、それまではヴェルサイユ條約反對の宣傳を行つても效果のなかつたのが、ブレスト・リトヴスク條約の說明を加へるに及んで國民が耳を傾けるに至つたのである。自分は兩條約を對照して逐條比較し、ブレスト・リトヴスク條約が眞に人道的で、極めて寬大であり、ヴェルサイユ條約が眞に非人道的で、極めて苛酷なものであることを說明した。その結果は非常な成功であつた。その頃の我等の演說會は大抵二千人ぐらゐの聽衆が集つたものであ

つたが、自分が兩條約に就いて演說を始めると、最初は二千人の九割までは敵意に充ちた憎惡の眼を以て自分を見つめてゐるが、三時間もじゆんじゆんと說くと、聽衆は悉く心の底から義憤に燃えて來るのであつた。かくして何千かのドイツ人は、心と頭との中から大きな嘘を拔き取られて、その後へ眞實を植ゑつけられたのである。

當時、自分が最も大切な演題として力を入れてゐたものが二つある。一つは『世界戰爭の眞因』といふのであつて、他の一つが上に述べた『ブレスト・リトヴスク媾和條約とヴェルサイユ媾和條約』である。自分はこの二つの問題に就いて大衆の納得のゆくまで何度も何度も形を變へて演說した。その結果、少くとも兩條約に關しては大衆も遂に明白な判斷を下すに至り、それを機會に我等の運動に參加するものも出て來たのである。

これらの演說會は自分一個にとつても利益があつた。自分は會を重ねるにつれて何時のまにか大衆對手の辯士となり、演說口調も滑かに、身振手振も上手

になつて、數千人の聽衆を容れる大きな會場でも意のまゝに演說し得るやうになつたのである。

ヴェルサイユ條約に關するドイツの輿論は今日では殆んど一變してゐる。既成政黨はこれを以て恰も彼等自身の手柄であるかの如く吹聽してゐるが、前にも述べた通り、仲間同志の間でこそこそと話し合つたことはあつても、公然とヴェルサイユ條約の非を鳴らして國民の啓發に努めた政黨は當時一つもなかつた。偶〻國民主義を標榜する政治家があつてヴェルサイユ條約の不都合を說いたとしても、それは同志の者、意見を同じくする者の集つてゐるところに限られ、同志の間で考へてゐることを强調するだけのことであつた。併し、當時のドイツでは、かやうに仲間同志の間で話しあつてゐたのでは役に立たなかつた。教育を誤られ、意見を異にして反對の立場にある國民大衆を前に憚るところなく公言し、啓蒙と宣傳とによつてこれを覺醒せしめるといふことが何よりも必要であつた。

自分は小冊子をも國民の啓蒙に利用した。先に軍隊にゐた頃に、自分はブレスト・リトヴスク條約とヴェルサイユ條約とを比較對照して兩條約の是非を明かにした小冊子を書いたことがある。これは部數も非常に多く刷られて廣く讀まれたものであるが、まだ殘部があつたから、自分はそれを取りよせて我が黨のために利用した。これも成績は頗る良かつた。この當時の我等の演說會では、色々なビラや新聞や小冊子を聽衆席の前の机の上に並べて置くことにしてゐたが、自分としてはやはり演說に主力を注いでゐた。蓋し、大衆の心を摑んで大革命を起し得るものは演說を措いて他にないからである。

古來、驚天動地の大事業は、何れも舌の力に依つて成就せられたものであつて、筆の力に依るものでないことは既に本書の第一卷で述べた通りである。曾て、一部の新聞は、この自分の說を取り上げて問題とし、盛んにこれが是非を論じたが、自分の說に反對して頻りに喰つてかゝつたのは多くは狡猾なブルジョア階級の連中であつた。これは當然のことであつて、概してブルジョア階

級とか知識階級とかいはれる連中は未だ曾て舌の力で人の心を動かさうと努めたことがなく、專ら筆先の仕事で滿足して來たのであるから、演說によつて大衆を左右するだけの力の備はつてゐる筈がなく、それ故、舌の力は筆の力に勝るといふ自分の意見を悅ばず、これに反對するのである。今日ドイツのブルジョアが大衆の心から離れ、大衆の心を知らず、從つて大衆の心を摑むことが出來なくなつてゐるのは、今まで長い間舌の力を忘れて筆の力に賴り過ぎて來た結果である。

聽衆を見渡しながら演說してゐると、自分の言つてゐることが何れだけ理解せられてゐるか、聽衆を自分の思ふ通りに動かすにはどう言つたら良いか、どう言つたら惡いかといふやうなことが聽衆の顏色で直ぐ分るから、演說する者の方でも絕えず演說に工夫を加へることが出來るが、筆を執つてゐるものには讀者の顏色を見る機會がない。一定の大衆を眼の前に置いて筆を取るのでないから、書くことがどうしても抽象的で空疎になり、從つて心理の機微を見失つ

て活殺自在の妙味を缺くことになり易い。演說の上手な者は概して書くことも巧いが、書くことの巧い者は絕えず練習してゐないと巧く喋言れないものである。おまけに、大衆といふものは本來懶け者であつて、舊慣に泥み、己の氣に入らぬやうなことや己の信ずる所と違つてゐることを書いた書物などは決して自分から進んで讀まうとはしない。それ故、折角何らかの目的の下に書物を著しても讀んで呉れるものは概ね同臭同好の人々だけである。尤も、宣傳ビラとかポスターとかいふものは、書いてあることが短くて直ぐ分るから、同臭同好の連中でなくても一應は目をとめて讀んで呉れるものである。この點からいふと、繪畫や寫眞は更に良く、映畫は更に良い。映畫を見るのにはあまり頭を使ふ必要がない。たゞ觀てさへをればよい。せいぜい極く短い字幕を讀めばよいのである。大抵の人間が長つたらしく書いたものを讀むよりも寫眞や映畫を見たがるのはこれがためで、書物だと退屈しながらも終りまで讀まないと分らぬが、寫眞や映畫は何もかも一瞬に造作なく見せて呉れるから樂である。

書物の場合では、折角書いても誰の手に渡るか分らない。その上、讀者によつて內容や體裁を變へるといふ融通がきかない。概していふと、最初から讀者の種類とか頭の程度とかを目安にしてそれに合ふやうに書いたものほど效果がある。それ故、大衆に讀ませる書物は文體でも何でも最初から大衆向きに、知識階級に讀ませるものは最初から知識階級向きに書くべきである。

かやうにそれぞれの向きに應じて書くのでなければ、書物では演說に近い效果を收め得ない。玆に辯士があるとする。論ずるところは書物に書いてあるところと同じであつても、大衆向きの利口な辯士なら、同じ題目を二度と同じ形式で喋言るやうなことはない。必ずその時その所の聽衆の心に訴へるやうに臨機應變に演說する。大衆を見渡しながら演說してゐると、適當な言葉が意を用ゐずして自然に出て來るのである。少しでも脫線すると、眼前の聽衆が默つてゐないから、直ぐそれと氣がついて訂正するやうになる。前にも述べた通り、會場を見渡しながら演說してゐると、自分の言ふことが聽衆に判るか、口

調が早過ぎはしないか、また、話の趣旨が十分に徹底したか、といふやうなことが聽衆の顏色で直ぐ分る。そこで、若し自分の言ふことが聽衆に判らぬやうなら、誰にも分るやうに調子を低くして、むづかしいことを避け、聽衆が躡いて來られないやうなら語調を緩め、どんなに頭の働きの鈍いものでも躡いて來られるやうに、注意してゆつくりと說き、また、話の趣旨が徹底せず、どうしても納得がゆかぬやうであれば、他の卑近な例を引いて何度でも繰返し說明し、或は聽衆が言葉に出さぬまでも反對の意見を抱いてゐるやうならば、それを殊更自分の方から持ち出して反駁を加へ、反對の連中が一人殘らず兜を脫いで降參してしまつたことが態度や表情に現れるまで徹底的に說伏するのである。

世間には兎角先入の偏見に囚はれてゐるものが多い。理窟があるのでなく、大抵は知らず識らずの裡に感情から依怙地になつてゐるのであるから仕末に惡い。他人の言ふこと爲すことをまるで本能的に嫌ひ、感情的に憎み、偏見から

反對する。これを改めさせることは學問上の謬見を改めさせることよりも遙かにむづかしい。概念や知識の誤謬は學問によつて訂正することが出來るが、感情から來る反對は理窟ではどうにもならぬ。かやうな人間を對手にする場合にはどうしてもこの感情といふ神祕な代物に對して直接に働きかけるほかなく、而してこれを爲し得るものは獨り辯論の士のみであつて、文筆の士ではないのである。

ブルジョア新聞の中には、編輯も甚だ巧妙で、相當澤山の發行部數を有し、廣く國民に讀まれてゐるものもある。それにも拘らず、大衆はブルジョアの味方にならず、却つてその敵になつてゐる。これなども筆の力が舌の力に及ばぬ證據である。知識階級が發行したり著述したりする新聞や書物は年々歲々洪水の如く世間に氾濫してゐるが、恰も油を塗つた革が水を彈じくやうに下層階級はこれを受けつけない。これは何故かといふと、ブルジョアの書くものの內容が間違つてゐるためでもあらうが、間違つてゐなくても、書いたものだけでは

大衆の心をひきつけることが出來ないからである。況してブルジョア新聞の如く記事が大衆の心理から離れてゐて、讀んでもピンと來ないやうでは尙更である。

ところが、世間には、例へば『ドイツ國民』系に屬するベルリンの某大新聞の如く、上述の主張に反對して、マルキシズムが勢力を得たのは筆の力によるものではないか、特にカール・マルクスの著作が基礎となつて今日の隆盛を見るに至つたのではないか、と言ふものもある。世の中にこれほど見當違ひの皮相な考へ方も少い。マルキシズムが大衆の間にあのやうに驚くべき勢力を扶植し得たのは、何もあの書物のお蔭ではない。ユダヤ人の考へてゐたことを形に表し、文字で示した、あの資本論のためではなく、猛烈な宣傳によるのである。宣傳によつて次第に大衆の心を摑んだのである。ドイツの勞働者でマルクスの資本論を讀んでゐるものは十萬人中百人とはをるまい。讀んでゐるのは知識階級の連中や特にユダヤ人であつて、下層階級から平黨員としてマルキシズ

ムに馳せ參じた連中はまるで讀んでゐないのである。また、資本論なる書物は元來大衆のために書かれたものでなく、ユダヤ人の世界制覇機關卽ちマルキシズムを指導すべき幹部のために書かれたものであつて、世界制覇機關の火をたくためには新聞といふ全然別個のものが使はれたのである。玆にマルクス主義の新聞とブルジョアの新聞との相違がある。マルクス主義新聞の記者は演說の達者な煽動家であるが、ブルジョア新聞の記者はたゞの記者であつて、煽動をするにも文筆でやらうとする。社會民主主義の新聞ではどんなへつぽこ記者でも演說の出來ないものはなく、讀者の心理を隅から隅まで心得て記事を書いてゐるが、ブルジョア新聞の記者はいつも机の前ばかりにゐるから、偶〻大衆の前に出ると人いきれだけでもう氣分が惡くなり、口も利けなくなる。こんなことでは書くものだつて知れたもので、大衆を動かすことの出來ないのは當り前である。

マルキシズムが數百萬の勞働者を味方に獲得したのは、マルキシズムを始め

た人々の文書の力によるのでなくて、上は煽動の使徒たる練達の幹部から下は小さな勞働組合の役員、同情者、彌次馬に至るまで、數千、數萬の者が心を合せて倦まず撓まず宣傳に努めたためである。これは要するに辯論の力である。マルクス主義の人々は幾百幾千回となく大衆を集めては演說を行つた。彼等は煙草の烟の濛々と立ち罩めた酒場のやうなところでも卓子の上につつ立つて勞働者對手に演說をやり、かくしてだんだんと深く大衆の心理を摑み、輿論の城塞を攻略するのに最も有力な武器を擇んだのである。それからまた、彼等は熾んに集團の示威運動を行つた。十萬人の大行列である。大衆は個人としては蛆蟲の如く微々たる存在に過ぎぬが、宛ら飛龍の如き蜿蜒たる大行列に加はれば、己も俄かに大きくなつてその一部になつたやうに感じ、この飛龍の吐き出す熱い焰の息はいつか憎むべきブルジョアの世界を燒き亡ぼして必ずプロレタリアの獨裁政治をもたらさずにはおくまいと考へるやうになる。大衆は示威運動からかくの如き信念を植ゑつけられてマルクス主義の味方に馳せ加つたので

ある。

大衆の中には、かやうな宣傳の結果社會民主主義の新聞を讀むやうになつたものが多い。而も、その新聞なるものが、これまた書いてゐるのではなくて演說してゐるのである。ブルジョアの新聞では、教授だとか、學者だとか、理論家だとか、文章家だとか、色々な連中が頻りに記事を書いてゐるが、滅多に演說しない。卽ち舌よりも筆に重きを置いてゐる。ところが、マルキシズムの方では記者が辯士揃ひであつて、いつも演說ばかりやつてゐてたまにしか書かない。卽ち筆よりも舌に力を用ゐてゐるのである。マルキシズムの新聞に筆を執つてゐるのは概ねユダヤ人であるが、ユダヤ人は一般に詭辯に巧みであつて、臨機應變に誤魔化すことが上手であるから、筆を執つても地味な文章は書かず、まるで煽動演說のやうなものを書くのである。

ブルジョアの新聞もだいぶユダヤ主義の惡いところにかぶれて墮落し、大衆を本當に敎化しようといふ氣持は全くなくなつてゐるやうであるが、それは別

としても、これらの新聞が大衆の心構へに對して何らの感化をも與へ得なかつたのは主として上述の理由によるのである。

感情から來た偏見を正し、聽衆の氣分や機嫌をがらりと變へさせるといふことはなかなか容易な業ではないが、演說の成功不成功も種々樣々な事情と關係がある。敏感な辯士に取つてはこれは今更言ふまでもないことであるが、演說の時刻さへ演說の效果に對して多大の影響を與へるものである。同じ演題で同じ辯士が同じ演說をしても、演說會を午前十時に開いたのと、午後三時に開いたのと、夕方に開いたのとでは演說の成績がまるで違つて來る。自分もかやうな事情のまだ分らぬ新米時代に演說會を午前中に開いて失敗したことがある。今でも特によく覺えてゐるのは『ドイツに對する聯合國の暴壓』と題して聯合國に對する抗議の積りでミュンヘンのキンドル・ケラーで演說をやつた時のことである。キンドル・ケラーは當時のミュンヘンでは最大の會場であつた。從つてそんな場所で演說會を開くのは非常な冒險であるやうに思はれたが、自分

は黨員や一般聽衆に成るべく澤山來て貰はうと考へ、來易いやうに便宜をはかつた積りで開會の時刻を或る日曜日の午前十時と定めたのである。ところが、それが全く失敗に終つた。お蔭で非常に良い教訓を得たが、演說會としては非常な失敗であつた。會場は滿員で、見たところ甚だ盛況であつたが、會場の氣分が氷の如く冷めたくて、人氣が引立たず、誰も熱狂しなかつた。辯士の自分も取りつく島がなく、少しも聽衆の心に觸れることが出來ないで全く困つた。演說が平常より拙かつたとは思はぬが、效果は殆んど零であつた。自分は全く不滿な心持で會場を去つたが、自分としては良い經驗をした。その後も二三度午前中に演說會を開いて試めしてみたが、成績はいつもこの時と同じで良くなかつた。

これは併し何も驚くには當らぬことである。試みに芝居を見てみよ。出し物も同一、役割も同一でありながら、午後三時に見るのと、夜の八時に見るのとでは、效果も印象も驚くほど違ふ。敏感でかやうな氣分をはつきり感じ別ける

ほどの人なら、晝間の芝居は夜の芝居ほど強い印象を與へるものでないことが分る筈である。これは映畫に就いても言へることであるが、映畫に就いても同じことが言へるといふこと、これがまた大切なことである。芝居は夜と晝とで役者の氣の入れ方が違ふかも知れないとも言へるが、映畫は晝だつて夜の九時だつて同じものである。それでありながら晝と夜とで映畫の印象の異るのは全く時間の作用によるのである。單に時間のみならず、場所も人心に影響を與へる。場所にも良否があつて、どういふわけだか氣分が冴えず、人氣を引立てようと努めてもどうしても引立たない場所があるものである。また、場所の持つ傳統と關聯して人々の心に浮ぶ思ひ出や或は考へ方も印象に非常な影響を及ぼすもので、同じ歌劇「パルシファル」でも、バイロイトでやつたのと、他の場所で演つたのとでは、觀客に對する效果がまるで違つて來る。マルクグラーフの古都バイロイトのフェストシュピール・ヒューゲルに聳え立つ劇場の神祕な魅力は他に求めることの出來ないもので、外觀の同じなものを何所へ建てたと

ころで到底及びもつかないのである。

要するにこれらの場合では人間の意志が時間や場所に左右せられて自由を失つてゐるのである。演說會の場合でもやはり同じであるから、反對の意見を抱いてゐる人々の押し寄せて來る演說會では特にこの點に留意して工夫を凝さぬと、聽衆に此方の主張を受け入れさせることはむづかしい。思ふに、朝や日中は人間の意力がまだ燒んで確かりしてゐるから、違つた意志や意見を押しつけようとするものがあるとそれに對して强く反抗するが、夕方にはもう疲れて弱くなつてゐるから、外來の强い意力にわけもなく負けてしまふものらしい。反對の意見を抱く連中の詰めかけてゐる演說會は取りも直さず相反する二つの勢力の格鬪場である。この格鬪に勝を制するには辯士が使徒の如く辯舌に優れてゐなければならぬのは言ふまでもないが、さういふ辯士でも、敵の氣力の張り切つてゐる日中や朝では駄目で、やはり敵の抵抗力が自然に弱つて緩んで來る頃をねらはないと、此方の主張を容易く受け入れさせることが出來ないのであ

る。

加特力教會では、會堂の內部をわざと薄暗くして何となく神祕な感じを與へ、燈明をかゝげ、香爐に薰香をたきなどしてゐるが、これもやはり人の心を容易く動かして信仰に導かんがためである。

宣傳には色々な條件があるが、中でも大切なのは心理の機微を摑むことである。反對論者を對手に演說で戰ふ辯士はだんだん敏感になつて、時間や場所が人心に影響を與へるといふやうなことをも會得して、心理の機微を摑むに至るものであるが、筆の人にはこれが殆んど望めない。それ故、書いたものは働きが限られてゐて、概していへば、從來から存在する信念とか意見とかを保存したり、鼓舞したりするだけである。古來、歷史上の大變革にして筆の力で成し遂げられたものは一つもない。變革が起きると、それに就いて何やかやと書いたものは出るが、書いたものから變革が出るのではない。

フランス革命は、大小無數の煽動政治家が當時塗炭の苦に陷つてゐた國民を

煽動して起させたもので、國民の情熱が刺戟によつて遂に爆發し、ヨーロッパの全土をあげて戰慄するほどの暴動になつたのであるが、世間にはあのやうな煽動政治家を俟たなくてもフランス革命は哲學上の理論によつて成就し得たであらうといふ者がある。それは間違ひである。近代の大革命と謂はるゝロシアの共產革命も決してレーニンの著作のお蔭で成功したのでなく、大小無數の煽動政治家が辯舌の力によつて大衆の憎惡心を煽り立てたからである。

あのやうに無學文盲のロシア國民がカール・マルクスの著書を讀んで共產革命に共鳴したなどといふことは到底考へられない。數千の煽動家が共產主義をこの世に行はんがため大衆を旨く瞞し、今革命を起せば直ぐにも地上に天國が現れるかのやうなことを言つたから、國民がそれに乘つたのである。

フランスやロシアの革命ばかりではない。過去の革命は皆かくの通りであつた。今後の革命も亦この通りであらう。

ドイツの知識階級は、舌の人は筆の人よりも頭が惡いに決つてゐると思ひ込

んでゐるが、これは甚だ迂闊で世間を知らぬからである。筆よりも舌といふ自分の主張に反對する『國民』系の新聞があつたことは前に述べたが、ある時、この新聞は、有名な雄辯家の演說でも印刷に附されたものを讀むと大抵がつかりすると書いた。これなどは知識階級の考へ方を最も良く表したものといへよう。今でも憶えてゐるが、戰爭の最中に或る新聞がその頃イギリスの軍需大臣であつたロイド・ジョージの演說を手嚴しく批評して、平俗、淺薄、月並みで分り切つた詰らぬもの、とさかしら立つて扱きおろしてゐるのを讀んだことがある。ロイド・ジョージの演說は後に小さな合本となつて世に現れたから、自分もそれを手に入れて讀んでみたが、なかなかどうして、平俗月並みどころではなく、演說の何れを取つてみても、總て大衆の心を摑み、大衆の魂に呼びかけた傑作たらざるはない。情けないことに、ドイツの三文記者にはこれが少しも分らなかつたのである。恐らく、ドイツの新聞記者は己の鈍い頭に殘つた印象で演說を批評したのであらうが、ロイド・ジョージはイギリス有數の煽動政

治家であつて、演說するに當つては專ら大衆を對手にしてゐた。廣くイギリスの下層階級に呼びかけ、これに對して出來るだけ大きな影響を與へんとしてゐたのである。かやうな立場から見ると、ロイド・ジョージの演說は立派に成功せるものといふべきで、大衆の心理に深く通ずる者でなければかやうな演說は出來るものでない。さればこそ、ロイド・ジョージの演說は當時のイギリス國民の間にあのやうに絕大の反響を呼び起したのである。

ロイド・ジョージの演說に較べると、ベートマン・ホルウェヒの演說は甚だ賴りないものであつた。ベートマン・ホルウェヒの演說は讀んでみたところでは成る程立派に相違ないが、演說としては役に立たなかつた。彼には國民に呼びかける能力がなかつたのである。畢竟大衆の氣持が少しも分らなかつたのである。それにも拘らず、ドイツの新聞記者は、ベートマン・ホルウェヒの演說は立派で、ロイド・ジョージの演說は駄目だといふ。ドイツの新聞記者は、教養は高いかも知れぬが腦味噌が雀のほどもなく、學問、學問で化石してしまつ

てゐるから、大衆目當の演說は面白からう筈がなく、面白くないからそんな演說をするイギリスの大臣の頭腦を輕蔑した。これに反してドイツの政治家の演說は、如何にも上品で、精神に富んでゐるから、元來上品好きの新聞記者には受けが善かつたのである。併し、ロイド・ジョージの方がベートマン・ホルウェヒよりも役者が何枚も上であつたことは確かで、これはロイド・ジョージが國民の心を收攬し、指導し、遂に國民を自分の意のまゝ思ふ通りに動かしてゐたのを見ればよく分る。用ゐる言葉が平易で、言ひ廻しが巧く、引例が甚だくだけたもので誰にもよく判るやうになつてゐる。これが卽ちこのイギリス人の卓越せる政治家たる所以である。蓋し、國民を對手とする政治家の演說の優劣はその演說が大學教授に與へる印象によつて判別すべきものでなく、國民に與へる影響の如何によつて定まるもので、辯士の優劣も亦この標準によつて計るべきものである。

卐

僅か數年前に初めて生れた我等の運動が、今日既に政界に重きをなして、內外の敵から目の仇にせられるほどの勢を得てゐるのは洵に驚くべき發展といはねばならぬが、これまた我等が知識階級よりも大衆を對手にするの必要を忘れず、主として筆よりも舌を用ゐ來つた賜物である。

運動に關する文書も大切には相違ないが、今の所では、文書は將來運動の上下各階級指導者となるべき者に讀ませて統一ある敎育を施すために用ゐるくらゐのもので、反對の意向を抱いてゐる大衆を味方に獲得するには役に立たない。恐らく本當の社會民主黨員や共產黨員で國民社會主義の書物や小冊子を買つて我等の世界觀を研究し、或は彼等の世界觀に對する我等の批評を檢討するやうな者は殆んど一人もをるまい。新聞にしても、社會民主黨や共產黨の新聞とはつきり知れてゐるものなら讀みもしようが、國民社會主義の新聞など手に

取つて讀むものは恐らくゐなからう。また、假りに讀んだとしたところで役には立たなからう。一枚ぐらゐの新聞では何も分るものでなく、書いてあることもちりぢりばらばらなら讀んだ印象もちりぢりばらばらで、頭に殘るものは恐らく一つもあるまい。毎日續けて讀むなら善からうが、一錢の錢さへ無駄には使へない連中に、公平な研究のためだから反對黨の新聞を月極めで讀めといつて勸めるわけにはゆくまいし、また勸めるべきでもなからう。大衆の中で反對黨の新聞を自ら進んで購讀しようといふやうな者は萬に一もあるまい。黨の機關紙を讀むのだつてその黨の黨員になつてからのことで、それも黨の運動狀況を知るために續けて讀むに過ぎない。

演說風の言葉を用ゐた宣傳ビラは新聞とは趣が違ふ。殊にそれが一目で分る題目として時事問題を捉へてをり、おまけに無代で配布される場合には、誰でもそれに目を通し易い。ビラを手にしたものは、多少念を入れて讀めば新しい見方や考へ方乃至は新しい運動のあることに氣がついて注意するやうにならし

う。併し、宣傳ビラの效能はたゞこれだけのことで、せいぜい人々の注意を促すに止まり、人々を新しい運動に參加させてしまふことは出來ない。ビラはただ何物かに就いて暗示を與へ、興味を促すのみであるから、單にビラを撒いただけでは駄目で、これに繼いで讀者を根本的に啓發教化しなければ效果はない。この啓發教化の役目をつとめるものが卽ち演說會である。

從來の仲間から分れて新しい運動に投じて來た者は、初めの間は馴染みもなく、動もすれば獨りぼつちで寂しく賴りなく感ずるものであるが、そんな時に大きな演說會でも開かれると、そこに初めて夥しい同志を見ておのづから力强く感じ、勇氣を振ひ起すやうになる。大抵の人間がさうであるから、演說會といふものはこの點から見ても必要なものである。一人では氣怯れがして進みかねる兵卒でも、中隊とか大隊とかの中で大勢の仲間と一緒にゐると、恐しい突擊でも平氣でやるやうになる。大勢と一緒にゐると、實際は非常に危險な場合でも、何かしら安全であるやうに思はれるのである。

大勢の同志の集會は、個々の黨員を鼓舞すると共に、黨員の結束を强固にして團體精神を作興する。衆に先んじて新しい運動に投じた者は、會社にゐる者でも、工場にゐる者でも、周圍から酷い迫害を受け易い。そんな場合に、自分は決して一人ぼつちではない、大きな團體の一員であり、闘士であつて、自分の背後には澤山の仲間がゐる、といふ確信がなければ、迫害に堪へる元氣も出ず、到底やつて行けない。而もこの澤山の仲間が自分の背後にゐるといふ確信を最初に與へて呉れるものは、大勢の同志が集る大會である。新米の黨員が小さな工場から、或は己の微力を痛感せしめられてゐる大きな會社から出て來て、初めて大會に足を踏み入れ、三四千の同志の間に身を置いて、この夥しい連中が何かの術にかゝつたやうに陶醉し、感激して、盛んに氣勢をあげてゐるのを目のあたりに眺め、また、新しい運動がこれほどに成功して、數千の人間がこれに賛同してゐるのを見ると、おのづから新しい教義の正しいことを悟り、それまで信じてゐた教義に對して疑を抱くやうになる。所謂群衆心理なる

ものの不思議な魔力のお蔭である。何千とも知れぬ人々の意欲や憧憬が、否、何千とも知れぬ人々の力が一つとなつて一人一人に湧き出でる。かくして、會場に來る時にはなほ疑ひ迷つて足の重かつたものも、去る時には自分も團體の一員になつたといふ確信を抱いて歸つて行く。

國民社會主義運動に從ふ者は、右に述べた如き辯舌の力を忘れてはならぬ。特にブルジョアの迂闊な連中が何と言つたつてそれに動かされてはならぬ。彼等ブルジョアは確かに物識りではあるが、ドイツといふ一大國家を滅ぼしてしまつたのも亦彼等であつた。否、ドイツを滅ぼしたのみならず、彼等自身の存立と彼等自身の階級の勢力をも滅ぼしてしまつたのである。彼等は恐しく利口で、何でも出來るし、何でも心得てゐるが、たゞ一つ、ドイツ國民がマルキシズムの魔手に捕はれるのを防ぐことだけは彼等も心得てゐなかつた。マルキシズムに對しては、彼等は氣の毒とも慘めともいひやうのないほど無力であつた。今日彼等は思ひ上つて自負してゐるが、それは要するに自惚れてゐるので

あつて、同じ自負でも自惚は誰も知る通り莫迦と一つ木に實るものである。

ドイツのブルジョアは今日でも舌の力を輕視してゐるが、それは要するに彼等自身の演説がまづくて役に立たぬことを知り過ぎるほど知つてゐるからである。

註　原文にはファッシズモ、ムッソリーニ、イタリア等の文字はなく、或る體制 ein System、人物 der Mann、地球の一角 eine Stelle der Erde 等となつてゐるが、そのまゝ直譯しては意味が通じ難いから、前後の聯絡を考へて勝手ながら固有名詞を入れて譯出した。（譯者）

第七章　赤色戰線に對する鬪爭

自分は、一九一九年から一九二〇年、一九二一年と、三年に亙つて屢〻ブルジョア政黨の所謂演說會なるものを聽きに行つたものであつた。自分は子供の頃肝油を飲まされたことがある。肝油は飲んだ方がよい、飲めば身體のためになるといふことであるが、どうも不味くて飲みにくい。ブルジョア政黨の演說を聽いてゐると恰度肝油を飲ませられてゐるやうな思ひがした。ドイツの國民を繩で縛つてブルジョア政黨の『大會』會場に引つぱり込み、演說のすむまで入口の扉を閉めて一人も外に出さぬやうなことを二三百年も續けてすれば、或は幾らか效能が現れるかも知れぬが、正直のところ、それでは國民の方がたまらぬ。白狀するが、自分などは、そんなことをされると多分生きてゐるのが嫌になり、ドイツ人たることを御免蒙りたいと思ふやうになるに違ひない。併

し、そんな無茶なことは幸ひにして當今では出來ない話であるから、まだ墮落してゐない健全な國民なら、惡魔が聖水を恐れる如く『ブルジョアの國民大會』を避けるのが當然であらう。

これら大會の辯士はブルジョア世界觀の豫言者たる人々であつたが、自分は彼等を目のあたり見るに及んで、彼等が演說に重きを置かぬ所以がよく分つた。彼等が演說は駄目だといふのは少しも不思議でない。當時、自分は色々の演說會を聽きに行つた。民主黨の演說會にも行けば、ドイツ國權黨の演說會にも行き、ドイツ國民黨の演說會にも行けば、バイエルン國民黨卽ちバイエルン中央黨の演說會にも行つた。(註1) これらの演說會に行つて直ぐ氣のついたことは、聽衆が同種一色に塗り固められてゐることであつた。會場に來てゐる聽衆は殆んど皆味方ばかりで、全體の空氣がだらけ切つて、少しの規律もなく、たつた今未曾有の革命を成し遂げて來た國民の大會といふよりも、寧ろ退屈な骨牌會といつた方がよく似合ふくらゐであつた。辯士の方でもこの穩かな氣分

を亂さぬやうにこれ努めてゐるといつた具合で、演說といふのに、氣の利いた新聞の論說みたやうな、或は學術上の論文かとも思はれるやうな原稿を讀みあげる。卽ち彼等の演說は朗讀演說であつて、荒い言葉は一切使はず、ところどころに氣の拔けた洒落をはさむのであるが、その都度、幹部の連中はお義理に笑つてみせる。それも、高い聲でからからと笑ふのでなく、お上品に含み聲で忍び笑ひをするのである。

辯士も辯士であるが、幹部の連中も亦甚だだらしのない代物であつた。

嘗てミュンヘンのワグナーザールにライプチヒ會戰記念演說會の催されたことがあつて、自分もそれを聽きに行つた。演說をやつたのは、いや演說を讀んだのは何處かの大學の教授で、上品な老紳士であつた。幹部の席は正面の一段高い壇上にあつて、左に片眼鏡の男、右にも片眼鏡の男、二人の間に挾まれてこれは片眼鏡をかけない男が腰をかけてゐたが、三人が三人ともフロックコートを着てゐたから、全體の光景は何のことはない、これから死刑の宣告を下

す法廷のやうであつた。或は子供の洗禮を行ふ儀場のやうでもあつた。何れにせよ、演說會の會場といふよりは宗教上の式場といつた方が當つてゐたのである。それに、また、老紳士の演說なるものが大變で、印刷にして讀んだら善いものかも知れないが、演說としては全く言語道斷であつた。ものの三四十分も經たぬうちに、會場は隅から隅までいゝ氣持に眠り始めた。その眠りを妨げるやうにして聞えるものは、時々一人二人と出て行く男女の足音や、給仕女が何か食器のやうなものをがたつかせる音、それから次第に多くなる會場の欠伸ばかりであつた。好奇心から來たのか、それとも命ぜられて會場の監視に來たのか知らぬが、三人の勞働者が恰度自分の前の椅子に腰をかけてゐた。三人は時時目顏で話し合つてゐたが、やがて肘でつゝき合ひをしたかと思ふと靜かに起つて會場を出て往つてしまつた。その樣子で見ると、彼等も演說を妨害しようといふ氣持になれなかつたらしい。また、こんな演說なら何もわざわざ妨害する必要はない筈である。そのうちに演說も漸く終りに近づいたが、終りに近づ

くにつれて教授の聲は次第に低くなり、次第にかすれて聞えなくなつた。演說がすむと、二人の片眼鏡の男の間に腰をかけてゐた座長が、やをら起ち上つて、滿場の『ドイツの紳士淑女諸君』に呼びかけ、X教授の唯今の演說は洵に意味深遠、他の追隨を許さざる結構な演說でありまして、これこそ本當の『內的體驗』と申しませうか、一つの『業績』と申して差支へなく、興趣深く又有難く拜聽致しましたが、皆樣も定めし同樣御滿足のことと思ふのであります。就いては、この立派な演說のあとに立會演說などを開いては、折角のこの神聖な時間を冒瀆することになりますから、皆樣の御同意を得て討論を取り止めることに致し、それよりも皆樣の起立を願つて『はらからの固く結びしくにたみ、我等』を唱和したいと思ひますと言つて、ドイツの歌で會を閉ぢることにしてしまひ、たうとう會衆を起立させた。

會衆は聲を合せて歌ひだしたが、聞いてゐると、第二節の所では何だか聲が小さく低くなり、折返しの所で再び大きく高くなり、第三節の所ではいよいよ

小さく低くなつた。どうやら、會衆の中には、この歌の文句を知らぬものが澤山にゐたらしいのである。

又、假令、皆が皆、歌の文句をすつかり知つてゐて、聲を張りあげて天までひゞけと唱つたところで、こんな性根の腐つた連中に一體何が出來るか。

歌が終ると演說會は散會となつたが、さうすると、誰も彼も外へ飛び出し、或る者はビヤホールへ急ぎ、或る者はカフェーへ駈け込み、或る者は新鮮な空氣を求めて街を歩いて行つた。

まつたく、新鮮な空氣を吸ひたい、外へ出て新鮮な空氣を吸ひたい、といふのがこの演說會の終つた時に自分の抱いてゐた唯一の願ひであつた。而も、この演說會は、あらうことかあるまいことか、何萬とも知れぬプロイセン人、何萬とも知れぬドイツ人の勇猛果敢な戰鬪を記念するために開かれた演說會であつた。何たることか、こん畜生、もう一度こん畜生！

かやうな演說會は政府も勿論欣んでゐた。甚だ『穩か』な會だからである。

これがさうでなくて、亢奮した聽衆が、俄かに堰を切つた洪水の如くお上の制止を破つて市民らしい慎みを忘れ、或は俄かに場外に流れ出して、そのまゝカフェーやビヤホールへは行かずに、四列縱隊を作り、足並を揃へて『譽れも高きドイツ國』を歌ひながら街頭を行進するやうなことにでもなれば、治安の責に任ずる大臣も心配だらうし、警察も困つて迷惑することになるに違ひなからう。

政府にしてみれば、そんな迷惑をかけぬ國民の方が厄介でなくてよいのである。

卐

ところが、國民社會主義者の演說會と來たら決してそんな『穩か』なものではなかつた。こゝでは相異なる二つの世界觀が激しく戰つたのである。散會するにしても、何か愛國の歌を間拔けた調子でぼそぼそと歌つてするのでなく、

愛國の精神に燃え、民族の情熱に燒けて宛ら火の玉になつてゐる聽衆の感激の爆發を以てしたのである。

我等國民社會主義者の演說會では、最初から會場の取締を嚴重にして幹部の權威を絕對に維持する必要があつた。我等の演說なるものはブルジョアの『講演者』の演說の如くに生ぬるいお喋言りでなく、內容も調子も反對黨を刺戟して激發せしめずにはおかぬものであつた。また、事實、我等の會場には何時でも反對黨の者が多數入り込んでゐたのである。演說會を開くと何時でも反對黨の連中が大擧してやつて來た。その中には煽動者が混つてゐて、これが煽動をやつたのであるが、連中は初めから殺氣だつてゐて、今日こそはお前等をやつつけるぞと言はぬばかりの顏色であつた。

今晩こそ何もかも叩き壞して片づけてしまはう、さういふ意氣込みで前以て準備を整へた赤い連中が、それこそ文字通り隊を組んで押し寄せて來たことが何度あつたか知れない。嘘言ではない、本當である。さういふ連中に騷がれ

て、場内が混亂に陷り、もう駄目かと思ふやうなことも何度かあつたが、その都度彼等の野望を挫くことが出來たのは、場内の警戒に當つてゐた者が幹部の假借なき指圖に從ひ、腕つ節に物を言はせて反對の連中をやつつけたからである。

尤も赤い連中が騷いだのにはそれだけの理由があつた。

我等はポスターに赤い色を使つた。これが卽ち我等の會場へ彼等の押し寄せて來た一つの原因である。赤はボリシェヴィキが用ゐてゐる色である。その赤を我等が使つたのであるから世間では少からず驚いた。うさん臭さうに眺め出した。ドイツ國權黨の連中は、國民社會主義といふのも結局はマルキシズムの別派ではないか、さうでないやうな顏はしてゐるが何だかマルクス主義が僞裝してゐるやうで、畢竟は社會主義ではないか、と言つて我等に不審の眼を向けた。彼等には今でもなほ社會主義とマルクス主義との區別が分らないのである。既成政黨や何かの演說會では、聽衆に呼びかける時に大抵は『紳士淑女諸

君』といふが、我等の演說會では『同胞の男女諸君』といひ、黨員同志の間では單に仲間と呼んだ。かういふ遣り方はマルクス主義者の慣用し來つたところであるから、我等の敵の間には我等を以てマルクス主義の化物と見る者が多くなつたらしい。單純で臆病なブルジョアの連中は、我等の素性や意圖、我等の目的などに就いて、かうして他愛もない臆測を逞しくしてゐたが、洵に笑止千萬な話である。

我等がポスターに赤い色を用ゐたのは、何も出鱈目ではなく、深い考へがあつてのことである。左翼の使つてゐる色を我等がわざと使へば、左翼の連中は必ず腹を立てるに違ひなく、怒つたら必ず我等の會場へ押しかけて來るに違ひない。必ず妨害しに來る。妨害のためでも、何でも、我等としては彼等が會場に來て吳れさへすればよいのである。來て吳れさへすれば、彼等に演說を聞かせることが出來るのである。

當時、我等の敵たる左翼の幹部の執つた戰術は、見てゐて可笑しいほど、し

どろもどろであつた。最初は黨員が國民社會主義者の演說會へ行くことを禁じ、我等を默殺することに努めた。この禁令は大體に於てよく守られてゐた。

ところが、この禁令もいつか緩んで、一人行き、二人行き、國民社會主義者の演說會へ出かけて行くものが次第に多くなり、國民社會主義に共鳴するものさへ現れるに及んで、左翼の幹部は漸く不安を感じ、神經を尖らせ、何時までもこのまゝに放つて置いては容易ならぬことになると考へ、遂に暴力を以て一擧に片づけようとするに至つた。

彼等は我等を以て『復辟を目論む反動派』となし、所謂『階級意識に目醒めたるプロレタリア』に向つて我等を叩き潰せと命じた。國民社會主義者の演說會があつたら大勢で押しかけて行つて幹部の連中にプロレタリアの拳骨を喰はせてやれと言ひつけた。

その結果、我等の演說會場は開會の三四十分も前から勞働者で一ぱいになるやうになつた。彼等勞働者はまるで火藥の樽のやうなもので、おまけにその火

繩には既に火がついてゐたから、何時爆發するか分らず、危險この上もない代物であつたが、それが爆發しなかつたのであるから可笑しい。彼等は、來る時は我等の敵であつたが、歸る時は味方であつた。味方とまではならなくても、反省して考へるやうになつてゐた。彼等がそれまで信じて來た主義に疑を抱くやうになつてゐた。會を重ねるにつれて、自分が三時間も演壇に立つて喋言ると、敵も味方も一緒になり、一團となつて、熱狂するやうになつた。さうなると、會場に入り込んでゐる煽動者が幾ら合圖をしたつて誰も起たない。そんなことはもう駄目である。そこで赤色の幹部はまた不安を感じだして、またしても方針を更へた。勞働者を國民社會主義者の演說會へ押しかけさせることに就いては、赤色の連中の間にも初めから異論があつた。それらの者は、プロレタリアの拳骨で片付ける計畫の失敗したのを見ると、それ見たことかとばかりに、勞働者を國民社會主義者の演說會へ行かせないやうにしなければいけない、この外に策はない、と尤もらしく言ひ立てた。そこで、幹部もこの一派の意見に

從ふことになつたのである。

それから暫くは勞働者もあまり來なかつたが、軈て、また何もかも元に還つて、同じことを繰返すやうになつた。

左翼幹部の禁令は少しも守られず、勞働者で我等の演說會へ來るものがだんだん多くなつた。さうすると、また、左翼の內部では、過激な手段に訴へんとする强硬派が勝を占め、もう一度大擧して押しかけて國民社會主義者の演說會を叩き潰さうといふことになつた。

ところが、二回、三回乃至八回、十回と演說會のあるたびに押しかけてゐるうちに、國民社會主義の連中をやつつけるのは言ふに易く行ふに難いことが分つた。押しかけて行くたびに赤色部隊が却つて切崩されて、國民社會主義の味方になるものが續出するといふ結果になつてゐたのである。そこで、また、方針は俄かに逆戻りをして『プロレタリアの男女同志諸君、國民社會主義者の演說會へ行くな』といふことになつた。

左翼幹部の方針はかくの如くしどろもどろで、絶えずぐらついてゐたが、赤色新聞の態度も同様に動揺してゐたのである。初めは我等を默殺しようとして一行も書かなかつた。軈てそんなことで閉口たれる我等でないと分ると、今度は反對に我等を無暗矢鱈に攻撃した。一日として我等の惡口を書かぬ日とてはなく、勞働者に我等の存在を取るに足らぬ笑止なものと思ひ込ませることにこれ努めるに至つた。ところが、世間といふものは妙なもので、それほど詰らぬものなら棄てて置けばよからうに、毎日書き立てるところを見るとさうでもないに違ひないと思ふやうになり、卽ち好奇心をかき立てられて、今まで看過して來たものを更めて注意して見るやうになるから、我等にとつては、惡口であらうが、何であらうが、新聞で書き立てられることは少しも損でない。新聞の方でも暫くするとこのことに氣がついた。そこで、俄かに方針を變へて、今度は、我等を古今無類の極惡の罪人となし、我等の罪狀なるものを數へ上げ、書き立て、一から十まで悉く虛構の事實をこしらへて讒誣中傷を敢てするに至つ

たが、間もなくかやうな攻擊も我等に對しては何の效き目もないことが分つたらしい。要するに、かやうな遣り方は世間一般の注意をだんだんと我等の方へ向けさせるだけであつた。

當時の自分は、嗤はれようが、罵られようが、道化と言はれようが、罪人と見られようが、一向頓着しないことに肚を決めてゐた。新聞が我等のことを何なりと書いて呉れさへすればよい。我等の事を一日でも忘れないで書き立てて呉れさへすればよい。さすれば、勞働者も、彼等と現在對立してゐる唯一の勢力が我等であることを次第に會得するに違ひない。これが肝心な點である。我等の正體が如何なるものであるか、我等の眞意が那邊にあるかは、そのうちユダヤ人の新聞もいやといふほど思ひ知る時が來よう。

右に述べた如く、左翼の勞働者は屢〻大擧して我等の會場へ押しかけて來たが、彼等が直接行動に出て亂暴を働いたために演說會が滅茶苦茶になつたといふやうなことは一度もなかつた。それには色々な理由があつたが、左翼の幹部

が甚だ卑怯であつたことも一つの原因である。彼等は亂暴を働く積りで來ながら、對手が手强いと見ると尻込みして配下の者だけを會場に入れ、彼等は場外にあつて形勢を觀望するといふやうなことをしてゐたのである。

のみならず、我等には左翼の幹部の意向が常に手に取る如く知れてゐた。それは、澤山の黨員を赤色戰線に入り込ませて何も彼も探つてゐたためでもあるが、一つは、左翼の幹部にはお喋言りが多くて、訊きもしないのに我からべら、べら喋言つてしまふからである。我等にとつてはこれは甚だ好都合であつたが、一體にドイツ人はお喋言りで困る。鷄は卵を生むと鳴き立てるが、ドイツ人は、何か企てると默つてゐられなくて、まだ物にならぬうちから騷ぎ立てる癖がある。左翼の幹部も御多分に洩れず色々なことを喋言るから、我等の演說會を襲擊する計畫でも、實行する前に逸早く我等の方に洩れる。そこで我等の方では襲擊本部の氣がつかぬうちに萬事萬端對應の準備を整へ、手ぐすね引いて待ち構へることが出來、あべこべに鼻をあかしてやつたことも屢々であつ

た。

この當時は演說會場の取締りも我等自身の手で行はねばならなかつた。官憲の保護は當てにならず、却つて妨害者のためになる場合が多かつた。官憲特に警察に取締りを賴むと、結局散會を命ぜられるのが關の山で、折角の演說會を閉ぢなければならぬ。而も、我等の演說會を叩き潰すのが妨害に來る連中の目的であるから、散會は彼等の思ふ壺だといふことになる。

概して當時の警察には甚だ怪しからぬ慣行があつた。例へば、演說會を叩き潰す計畫のあることを脅かし半分に言つて廻る者があつて、それが警察の耳に入つても、警察は叩き潰しに行く方を檢束せずに、何の罪もない者に演說會など開くなといつて禁止を喰はせるのである。亂暴な話であるが、一般の警官はこれを賢明な遣り方だと思つて甚だ得意がつてゐた。この遣り方を稱して『法律違反豫防措置』といふ。

警察がこんな具合では肚の据つたならず者が何時も得をして、おとなしい者

は政治活動が出來ないといふことになる。國家の權威を維持すべき警察が治安維持の名に隱れてならず者の肩を持ち、おとなしい者に對してはならず者を怒らせて呉れるなといふのである。國民社會主義者の方で某日某所に演說會を開くと言ひ、勞働組合の方でそんなら押しかけて行つて妨害するといふ。さうすると、警察は物騷な勞働者を檢束せずに、きまつて我等國民社會主義者の演說會を差し止めたのである。演說會を開くなと我等の所へ通牒を寄越したことが何度もあつた。警察ともあらうものが恥を知らぬにも程があるといはねばならぬ。

兎に角、左翼の連中に暴れられて演說會を潰されるやうなことがあつては詰らぬから、我等としては妨害を未然に防遏することに努めなければならなかつた。

而も、妨害を防遏するに當つても、我等としては警察の力を借りないやうに心がける必要があつた。警察の保護の下にやつと演說會を開いて、ねるやうで

は主催者の値打も知れたもので、大衆の信用は得られない。國民の下層階級を動かして味方に引入れるには、何といつても盛んな氣力が必要である。澤山の警官に番をして貰つてやつと氣焰を上げてゐるやうな演說會に大衆を動かす氣力のあらう筈がない。

女の心を摑み得るものは卑怯な弱い男でなくて雄々しい強い男である。それと同じく國民の心を得んとする政黨は強い政黨でなくてはならぬ。政黨が警察の保護に賴つてやつと存立してゐるやうな弱いものでは人心を得ることは出來ない。

以上の如き色々の理由から考へ、又特に強い政黨でなければ大衆の心を摑み得ないといふことから考へて、我黨に於ては他力に賴らずに自立自存に努め、演說會を開く時でも斷じて警察に保護を求めず、會場の整理は仲間のものがこれに當り、暴力でやつて來るものに對しては暴力で應酬することに肚を決めたのである。

會場の整理に就いては左の如く二つの方針を樹てた。（註2）

一、聽衆の心理を正しく洞察して力強く司會すること。

二、警備團を組織すること。

かくして、我等國民社會主義者は、演說會を開けば仲間で會場を整理し、支配して、他の者にぐうの音も出させなかつた。一瞬と雖も會場を他の者の自由にはさせなかつた。演說を少しでも妨害する者があると直ぐ飛んで行つて容赦なく摘み出してしまふのである。對手が四五百人もゐて此方が十二三人しかゐない時でも恐れずに向つて行つた。彌次を飛ばせば必ず摘み出されるものと思ひ知らせてやつたのである。その頃ミュンヘン以外の所で演說會を開くと、我等國民社會主義者の十五六人に對して敵は五百人も六百人も、多い時には七八百人も詰めかけて來た。それでも我等は斷乎として妨害を許さなかつた。敵に降參するくらゐなら殴り合つて殺された方がましだといふのが我等の心構へであつた。演說會へ押しかけて來る連中にもこれがよく分つて來たらしい。それ

故、あまり手出しをしなくなつたが、それでも、少數の我が黨員が、優勢を恃んで亂暴狼藉を働く赤い連中を對手に勇敢に戰つて、彼等を叩き出したことも再三あつた。

勿論、寡は衆に及ばぬから、こんな場合に赤い連中が眞劍に戰へば、十五人か二十人しかゐない國民社會主義者の方が結局打ちのめされるに決つてゐるが、片がつく前に彼等の方でも少くとも二三倍の人間が頭を割られるに決つてゐるから、彼等は恐れをなしてそこまで暴れる勇氣がなかつた。

自分は當時マルクス主義者の演說會とブルジョアの演說會とを比較研究して大いに得る所があつた。

マルクス主義者の演說會は、以前から會場の取締りが非常によく行き屆いてゐて、斷じて他の妨害を許さなかつた。これを潰すなどといふことは少くともブルジョアの連中には思ひもよらぬところであつた。それだけに、また、赤の方では愈〻增長して、赤でない連中の演說會を潰すことばかり考へるやうにな

り、從つて、また、だんだん熟練して上手になり、果ては、殆んどドイツ全土にのさばつて、マルクス主義者以外の演說會と見れば直ちにプロレタリアに對する挑戰であるといつて、百方手を盡して妨害するに至つた。特に、赤の領袖の罪狀を數へ上げ、國民を欺瞞せる彼等の卑劣な行動を發き立てるやうな演說會でもあらうものなら、彼等の妨害の仕方は一と通りでなく、さういふ演說會の豫告でもあると、赤の新聞は筆を揃へて一齊に喚き立て、彼等自身極惡の罪人であることを棚にあげて警察へ喰つてかゝり、事態を『これ以上惡化させぬため』にこの『プロレタリアに對する挑戰』を差止めて貰ひたいと談じ込む、否、脅かすのである。彼等の使ふ脅迫の言葉は對手の役人の頭の程度によつて違ふが結局目的を達する。萬一、對手の役人が木偶の坊でなく、ドイツ人であり、ドイツの官吏であつて、赤い連中のかうした厚顏しい要求をはねつけようものなら、彼等は忽ち奧の手を出し、こんな『プロレタリアに對する挑戰』を放つて置くわけには行かぬから、幾ら幾らの人數を繰り出して會場に押し寄せ

『プロレタリアの胼胝だらけの拳骨でブルジョアの手先の卑劣な企みを叩き潰さねばならぬ』などと新聞に書き立てて勞働者を煽動するのである。

ブルジョアの演說會はどうかといふと、これが非常に慘めで甚だ不安なものであることを知らぬ者は恐らく有るまい。演說會を開くことに決めてゐても、上に述べたやうな脅迫を受けるとそのまゝ止めてしまふこともあつた。開くにしても、襲擊を受けるのが恐しさに定刻通りに開いたためしがなく、午後八時の開會が八時四十五分になり、九時になることも珍らしくなかつた。それでもどうやら開會となると、司會者は來會の『反對派諸君』に呼びかけて『今晚は反對派の方々も澤山見えてゐるやうでありますが、極めて結構なことで、司會者を初め一同深く喜んでをります（嘘を吐け）。意見の異なる者は互に話し合ひ、意見を闘はして見るべきで、さすれば意志も疏通して互の心も分り、手を取り合ふことも出來るやうになるものであります（これでは最初から對手の意見は反對だときめてかゝつてゐることになる）。今晚の演說會の目的は何も私

共の意見を皆様に押しつけ、皆様に皆様固有の意見を棄てて頂かうといふのではないので、人間は各〻その好む所に從ふべきであります。それ故、私共の方でも皆様の好みを妨げようとはしないから皆様の方でも私共の好みを妨げないやうにして頂きたい。それに、今晩の辯士の演說はそれ程長くないと思ひますから、どうか騷がないで終りまで聽いて頂きたい。一體、演說の會場でドイツ人同志が敵味方になつて爭ふのは、國民の內輪割れを內外に對して曝らけ出すもので、甚だ見つともないことでありますから、今晩の演說會では……』などと言つて、先づ反對派の連中にお世辭たらたら哀訴歎願する。胸糞の惡い話である。

勿論、左翼の連中がこんな挨拶に耳を傾ける筈はない。辯士が演壇に立つと忽ち四方八方から猛烈な彌次が飛び、辯士は一こと二こと喋言つたばかりでもう立往生である。全く氣の毒で長く見てゐられないやうなことも度々あつた。かくしてブルジョア演說會の辯士は物凄い騷ぎの中を恰も鬪牛士が鬪牛場を出

て行く如く退場するのであつたが、無事に降壇するのはまだよい方で、中には頭を叩き割られて階段をころがり落ちたものも少くなかつた。

マルクス主義者以外の演說會といへば總てこんな具合であつたから、我等國民社會主義者の演說會、特にその遣り方はマルクス主義者にとつては何か勝手の違ふ所があつたらしい。ブルジ・アの演說會をそれまで思ふまゝに荒してゐた彼等は、初めは、我等の演說會へもやはり思ふ存分に暴れる積りでやつて來てゐた。中には會場の入口で『今日こそやつつけてやらうぜ』などと大口を叩く者もあつたが、そんな者は二こと目の彌次がまだ口をついて出ないうちに、もう、會場の前で叩きのめされてゐたのである。

第一に、司會の仕方からして我等の演說會は違つてゐた。司會者は、どうぞ靜かに聽いて下さいなどと弱いことを言はず、後でゆつくり話し合つてみようとも言はなかつた。この會場は我等が演說する所であり、會場の主人公は我等である。それ故、敢て彌次を飛ばすやうなものがあつたら容赦なく場外へ摘み

出すからその積りでゐて貰ひたい。不心得な者がどんな目にあはうと我等の知つたことではない。また、討論も時間があればやるかも知れぬが、それも我等の都合次第である。さて、これから黨員某君に演說をお願ひする。かういふてきぱきした態度、これが我等の演說會を司會する者の態度であつた。

これだけで、もう、彼等マルクス主義者は度膽を拔かれてゐた。

第二に、我等の方には組織の嚴重な警備團があつて、これが會場を取締つてゐた。既成政黨では相當年輩の長老が會場の取締りに當つてゐた。いや、世話をやいてゐた。年寄は尊敬を受けてよいもので、大抵の者が若い者の言ふことはきかなくても年寄の言ふことなら年齡に免じてきくものだといふ考へから長老が世話をやくことになつてゐたのである。ところが、マルキシズムにかぶれた大衆は對手が年寄だからといつて遠慮はせず、權威だとか尊敬だとかいふことはまるで念頭に置いてゐないのであるから、既成政黨のかうした取締り方はまるで役に立たなかつた。

そこで、自分は、黨の事業として演說會を催すことに決めると、直ぐ、會場整理のために警備團を作つた。團員は大抵は若い元氣な者ばかりで、一部は自分と共に曾て軍隊にゐたことのある馴染みの仲間であり、一部は新入の若い黨員であつた。暴力に對しては暴力で抵抗するほかなく、世の中は常に强い者、勇氣のある者が勝を占める所である、とか、我等國民社會主義者は極めて高遠なる一大理想のために戰つてゐるのであるから、これを守るために最後の血の一滴をも流すことを辭してはならぬ、とか、かういふやうなことを言つて、自分は彼等を教育し、彼等を激勵した。道理が通らなければ腕で行くほかはない。そんな時には此方から進んで攻めることである。身を守るには先づ攻めるに越したことはない。警備團は討論倶樂部でなく、果敢なる鬪爭團體であるといふことをはつきりと心得てゐなければならぬ。自分はかやうなことを彼等の頭にも心にも叩き込んだのである。

若者の方でもかやうな力强い言葉を待ち焦れてゐた。元氣な若者は既成政黨

の意氣地なさ、腑甲斐なさにすつかり愛想をつかしてゐたのである。

上に述べたやうなブルジョアの意氣地のない有樣を目擊した者には、ドイツで赤色革命の成功した理由がはつきり分つた筈である。腑甲斐のないブルジョアがドイツの國民を誤まらしめたからあんなことになつたのである。ドイツの國民を守るべき若者がゐなかつたわけではない、たゞそれを率ゐる者がゐなかつたのである。自分はいつも警備團の若者を顧みては、彼等の使命の重大なる所以を說いた。如何に立派な理想でも、それを擁護し實現する力の伴はぬものは此の世の中では役に立たぬもので、平和の女神と雖も軍神の側を離れて獨り立ちは出來ず、如何なる平和の大業もそれを援助する武力がなくては成就し得ないものである、といふやうなことを言つて聞かせると、若者はいつも眼を輝かせてゐた。國防の義務に關する觀念がそれまでよりも遙かに生き生きとした姿を取つて彼等靑年の胸中に湧き出でたやうであつた。頑冥で舊弊な役人の化石した考へ方では、國防の義務は死物の如き國家が死物の如き權威に仕へるこ

とであるが、若者の胸中に湧き出たものは、そんなものではなかつた。各人は時と所とを問はず隨時隨所に於て各人の生命を國民全體の存立のために捧げねばならぬといふ義務を彼等青年ははつきりと認識したのである。

また、事實に於て彼等青年は國民全體のためによく戰つたのである。

演說を妨害する者があると、警備團の若者は恰も熊蜂の群のやうになつて襲つて行つた。對手が優勢であらうと、なからうと、そんなことには一向に頓着しなかつた。ドイツ國民の復興と稱する神聖な使命を果すべき國民社會主義運動の前途を開拓するのだといふ一大信念に燃えてゐたから、手傷を受けようが、生命を落さうが、そんなことで恐れるものではなかつた。

警備團は一九二〇年の夏の頃に次第に形態が整ひ、一九二一年の春には團員を百人宛の組に分け、その各組をまた幾つかの小さな組に分けることになつた。

我等の演說會はこの間に於て時と共に愈〻盛大頻繁に行はれるに至つたか

ら、警備團をかくの如く組織することは甚だ必要であつた。その頃でもなほミュンヒナー・ホーフブロイハウスの大廣間を演說の會場に利用することがあつたが、もつと廣い場所で演說會を開くことの方がずつと多くなつてゐた。一九二〇年の秋頃から一九二一年の春頃にかけては、いつもビュルガーブロイの大廣間やミュンヒナー・キンドル・ケラーで演說會を開いてゐたが、演說會は回を重ねる毎に規模が大きくなり、國民社會主義ドイツ勞働黨の演說會といへば、その頃でも既に開會前にもう滿員となり、警官が後から後から押しかける群衆を制止するのに大童となる程の有樣であつた。

卐

警備團の組織と關聯して重要な問題が一つ解決せられることになつた。國民社會主義ドイツ勞働黨には、それまで黨の徽章もなければ、黨の旗もなかつた。徽章や旗は黨の象徵である。これがないと差し當り都合が惡いばかりでな

く、將來のためにも良くない。黨としてこれは放つて置けないことであつた。黨員は黨員であることを外部に對して示す必要がある。然るに、徽章も旗もないからこれが出來ない。これが當面の不都合であつた。又、國民社會主義運動の精神を象徵して國際主義の精神に對抗するやうな標識がないと、必ず不都合を生じて、將來困ることになるに決つてゐる。

政黨の徽章や黨旗といふものが大衆の心理に對して非常な影響を與へるものであることは、自分も早くから氣がついてゐた。かやうな象徵の意義を理解し感得する機會が若い時分に度々あつたのである。又、世界大戰後のことであつたが、ベルリンの王城前からルストガルテン前にかけてマルクス主義者の大示威運動の行はれたことがあつた。赤い旗、赤い腕章、赤い花、一面に赤い海である。參加人員無慮十二萬人と註せられた行列が赤一色に塗り潰されてゐた。見た眼には全く大したものであつた。かやうな行列が恐しい氣勢をあげて進んで來るのを見てゐると、誰でも魔法にかゝつたやうになつて知らず識らずこれ

に捲き込まれる。自分は大衆がたやすくマルクス主義に染つてしまふわけを悟つた。

ブルジョアの既成政黨には主張すべき獨自の世界觀がなく、從つて獨自の黨旗もなかつた。彼等は所謂『愛國者』を以て自任し、何時までもたゞ舊ドイツ帝國の三色旗を擔ぎ廻つてゐただけで、洵に笑止の沙汰であつた。元來この三色旗は何等の世界觀の象徵でもなかつた。ドイツ帝國はブルジョアの世話にならずして造られ、ドイツの國旗は戰場で生れたのである。卽ちドイツ帝國の三色旗は國旗ではあつたが特殊の世界觀を代表するものではなかつた。假りにそれが何等かの象徵であつたとして、舊帝國の支配者がそれを以て彼等の世界觀を代表するものとなしたのなら、話は分る。筋が通つてゐる。國家も國旗も彼等がその世界觀に從つて造つたものとなるからである。然るに今言つた如く事實はさうでなかつた。從つて舊帝國の支配者すら三色旗を以て彼等の世界觀の象徵となすことは出來なかつた。況して、自ら愛國者を以て任じながら自ら擁

護すべき世界觀を持ち合せてゐない既成政黨には、この三色旗は何時まで擔ぎ廻つた所で彼等の黨旗とはならないのである。

既成政黨で黨旗らしいものを持つてゐた政黨がドイツ語を國語としてゐる地方の一つ卽ちドイツ人のオーストリアに一つあつた。國民主義を標榜するブルジョアの一部所謂ドイツ黨がそれで、その黨旗は黑赤金の三色旗であつた。この三色旗はもともと一八四八年の革命に用ゐられたもので、世界觀を代表するものではないが、革命を標示せんとしてゐるところに幾らか政治上の意義があり、一個の象徵たるを失はなかつた。ドイツ黨がこの黑赤金の三色旗を黨旗として採用した時、これを最も酷く嫌つたものは社會民主黨や基督敎社會黨乃至中央黨であつた。これは今日忘れてはならぬことである。一九一八年に黑白赤の三色旗を下水に投げ込んで侮辱したのと同じやうに、彼等はこの黑赤金の三色旗をも排斥し、侮辱したのである。上に述べた如く舊オーストリアのドイツ黨が黨旗として選んだ黑赤金の三色旗は一八四八年の革命旗である。當時は兎

角氣紛れで突飛な時代であり、また、革命の背後にはユダヤ人が潜んで眼に見えぬ絲を操つてゐたには違ひないが、その後にこれを黨旗として採用したドイツ黨の人々が何れも純眞なるドイツ魂の持ち主であつたことは確かである。然るに、今日では、この黑赤金の三色旗がドイツ共和國の國旗となり、マルクス主義者や中央黨の支持を受けてゐる。國を賣り、破廉恥にもドイツの國民とドイツの財產とを安く叩き賣つてしまつた彼等が、今や、曾て彼等が唾を吐きかけた三色旗をドイツ共和國の國旗となし、最も神聖なるものとして尊び、これを守るために獨自の團體をさへ造るに至つたのである。

かくの如く、一九二〇年までは、マルキシズムと正反對の世界觀を象徵してマルクス主義者の旗に對抗し得る旗といふものは一つもなかつたといつてよい。ドイツのブルジ・ア政黨の中でも幾らか性根のある政黨は、一九一八年以來俄かにドイツの國旗となつた黑赤金の三色旗を彼等の象徵として用ゐることを肯じないが、さうかといつてドイツの將來のために獨自の經綸を行ふことも

出來ず、せいぜい過去のドイツの復興を考へてゐるに過ぎぬ。

黑白赤の三色旗、卽ち舊ドイツ帝國の國旗が所謂愛國主義を標榜するブルジョア政黨の黨旗として復活したのも畢竟はブルジョア政黨が世界觀なるものを有せず、纔に過去のドイツの復興を考へてゐるに過ぎぬからである。

ところで、舊ドイツはあまり自慢にもならぬ事情の下に旣にマルキシズムによつて打倒されてしまつた國であり、黑白赤の三色旗はこの打倒された國の象徵である。從つて、この三色旗は、マルキシズムと戰つてこれを滅ぼさんとするものが象徵として使用すべきものでないことは言はずして明かである。舊ドイツの國旗は三色の組合せが如何にも鮮かであつて美しい。多くのドイツ人はこの國旗の下に戰ひ、この國旗の下に血を流したのである。それを知つてゐる本當のドイツ人には尊く懷しいに違ひないが、マルキシズムに對してこれから展開すべき鬪爭の象徵としては相應しくないのである。

ブルジョアの政客と違つて、自分は、舊ドイツ帝國の國旗がなくなつたのは

ドイッ國民にとつて悲しむべきことでなく、寧ろ勿怪の幸であると信じ、黨員に對しても常にこの信念を說いてゐた。ドイッ共和國がその新國旗の下で何を爲さうと、それは我等にとつて風馬牛である。併し、ドイッ共和國が舊ドイッ帝國の國旗を引き繼いで宛ら淫賣宿の敷布の如く汚して吳れなかつたことだけはこの上もなく有り難いことであつたといはねばならぬ。黑白赤の三色旗は萬世に比類なき名譽の軍旗である。この武勳に輝く譽れの旗が國家と國民とを賣つた今日の共和國の旗になつてはならぬのである。

十一月革命で出來た穢はしいドイッ共和國は穢はしい共和國らしく穢はしい襤褸を下げてゐる方が善いのである。譽れある過去のドイッの國旗を盜用されてはたまらない。ブルジョアの政客の中には、今でも黑白赤の三色旗をドイッ共和國の國旗にしようとしてゐる者があるが、さやうなことをするのは昔のドイッの大切なものを盜み取ることに他ならぬ。忘れても爲すべきことではない。在りし日のドイッの旗は在りし日のドイッの旗であつて、他の國には似合

はぬ旗である。それと同じく、ドイツ共和國はドイツ共和國によく似合ふ旗を選んだのだからそれで善いのである。

我等國民社會主義者が舊ドイツ帝國の國旗を引き繼がなかつた所以も玆にある。黑白赤の三色旗は在りし日のドイツの旗であつて我等の行動を明白に象徵する旗ではない。舊ドイツ帝國は既に內部の缺陷によつて倒れた國である。我等國民社會主義者の願ふところは、そんな國を墓場から喚び起すことでなく、全く新しい國家を建設せんとするにあるのである。

我等はかやうな積りで今日マルキシズムと戰つてゐるのであるから、我等の黨旗も新しい國家を象徵するものでなければならぬ。

然らばどんな黨旗を作つたらよいか。當時我等はこれに就いて頭を惱ましたものであつた。色々な方面から色々の案が出たが、これぞと思ふやうなものはなかなか出て來なかつた。新しい黨旗は我等國民社會主義者の鬪爭を象徵するものでなければならぬと同時に、恰もポスターの如くに廣く大衆に働きかける

力を具へてゐなければならぬのである。大衆對手の運動に從事してゐる者にはよく解ることと思ふが、一見つまらぬことが案外非常に大切なことである場合がよくある。黨員がその黨に興味を覺え始めた動機を調べて見ると魅力のある徽章に牽きつけられたためであつたといふのが非常に多い。

提案の中には白旗を黨旗にしようといふのがあつた。これには多くの贊成者があつたが、これは畢竟我等の運動を舊ドイツ帝國と結びつけんとするもの、否、我等の運動をブルジョア政黨の步調に合はさせようとするものである。ブルジョア政黨は過去の狀態の復興を唯一の政治目的とするものであつて、氣魄に乏しい。それに、白は人心を興奮させる色でなく、純潔を生命とする處女會などの運動を表すには良からうが、革命時代の革新運動には相應しくない。白旗の案はこんな理由で却けられたのである。

黑はどうかと言ふものもあつた。黑は今日の時代に相應しい色であるが、我等の運動の志す所を表示しないのみならず、この色にも人心を鼓舞する力がな

い。

白青（註3）は色としては非常に美しいが、ドイツ聯邦中の或る一國の旗の色であり、而も、その國は、政治上の態度として、遺憾ながら甚だ面白くない聯邦分權主義を取つてゐる。それに、また、この色にも我等の運動を表示するものがない。それ故、これもまた却けられた。黑白も同樣である。

黑赤金はもとより問題にならなかつた。

黑白赤も既に述べた如き理由から問題にならず、少くとも從來の形式のまゝでは使へない。併し、效果といふことから見ると、黑白赤の組合せは比類なく良いもので、色の調和としてはこれほど美しいものはない。

自分としては、この舊ドイツ帝國の旗の色を何とかして保存したいと思つてゐた。嘗て軍人であつた時に自分が最も神聖なものとして仰いだ旗の色であるのみならず、如何にも美しくて、自分の感情とぴつたり合つてゐるからである。かくして、黑白赤の三色に就いても黨員の間から色々な案が出たが、その

中最も多かつたのは、舊國旗の中に鈎十字卽ち卐を染め出したものであつた。併し、これも自分の氣に入らなかつた。自分には一つ腹案があつたが、黨首たる立場に顧みて發表を控へ、他の人々から良い案の出るのを待つてゐると、そのうちにシュタルンベルグの或る齒醫者が一つの案を持つて來た。それは自分の考へてゐたのとよく似てゐて、惡くはなかつたが、鬚のついた鈎十字を圓い白地に染め出してゐるのがどうも氣に入らなかつた。

そのうちに、自分は、工夫に工夫を重ねて漸くこれならばと滿足の出來る旗を考へ出した。それは赤地に白の丸を染め拔き、その眞ん中に黑の鈎十字を表したもので、旗の大きさと白の丸と鈎十字の形や大きさとの關係に就いてもよく鈎合の取れるやうに工夫を凝したことは言ふまでもない。

これが皆の氣に入つて我等の黨旗になつた。

警備團員の腕章も、同じ理由で、赤地に白の丸を染め拔き、その中に黑の鈎十字を現したものに決つた。

黨員の徽章も、同じ方針に從つて、赤地に白の丸を染め拔き、その中に鈎十字を現したものになつた。これはミュンヘンの錫屋のフュースといふ男が見本を作つて呉れたのであるが、皆の氣に入つて黨員の徽章にすることになつたのである。

かくして出來た新しい旗は一九二〇年の夏に初めて街頭に揭げられたが、新進氣鋭の我黨の黨旗として實に申し分のない旗であつた。我黨が若くして新しきが如く黨旗も亦若くして新しかつた。かくの如く清新な黨旗は未だ曾て何人も目擊せざるものであつた。初めて街頭に現れたこの黨旗は、宛ら火つけ松明の如く働いて、忽ち人々の心を燃やしだした。或る忠實な婦人黨員が初めて圖案通りの旗を作つて持つて來て呉れた時には、皆が子供のやうに喜んだものであつた。それから二三個月も經たないうちに、早くも六本の黨旗がミュンヘンの町に飜るやうになつたが、警備團がだんだんと擴充せられ、その活動が愈〻盛んになるにつれて、我黨の新しい象徵たる黨旗は次第に世間に乘り出してそ

の數を加ふるに至つたのである。

我黨の黨旗は確かに我黨の象徴たるに最も相應しいものである。黑白赤の三色は我等國民社會主義者の熱愛して止まざる色であり、而も、曾てドイツ國民のために數多くの名譽をかち得たる旗の色である。今我等がこの三色を選んだのは卽ち過去のドイツに對する我等の尊敬の念を表したものにほかならない。のみならず、黑白赤の三色は我等の運動の志す所を最もよく具現する色である。我等國民社會主義者から見れば、我等の黨旗には國民社會主義の綱領が現れてゐる。卽ち黨旗の赤は社會主義の思想を、白は國民主義の思想を、鈎十字はアーリア人種の勝利のために戰ふべき使命と共に徹頭徹尾ユダヤ主義と相容れざる勤勞主義の勝利を表徴してゐるのである。

さて、警備團は、その後二年を經過するうちにだんだん大きくなつて早くも數千の團員を擁するに至り、今日突擊隊と謂はれてゐるものになつたが、新しい世界觀を擁護するこの突擊隊には、勝利の象徴として黨旗の外に別に隊旗を

備へたがよからうといふことになり、これもまた自分が考案し、黨員として早くから忠實に働いてゐた錫屋のガールがそれによつて造り上げて呉れた。爾來この隊旗は國民社會主義者の展開する鬪爭の標識になつたのである。

卐

さて、我等國民社會主義者の演說會は一九二〇年中にだんだんと盛んになり、いよいよ活氣を呈して、終には一週間に二度開くことも珍らしくないやうになつた。ポスターの前は人だかりで一ぱいとなり、町で一番大きな會場を借りても何時も滿員であつた。何萬とも知れぬマルクス主義者さへ迷ひから醒めて轉向し、國民の性根を取り戻して、自由な明日のドイツのために鬪士になるといふ始末で、我等のことはミュンヘンではもう誰知らぬものもなくなつた。我等のことは世間の噂話に上るやうになり、國民社會主義といふ言葉は人口に膾炙して既に一つの政綱と見られるに至つた。かうなると味方も黨員も日を追

うて急速に增加するばかりで、一九二〇年の冬から一九二一年の春にかけての頃には、我が黨は既にミュンヘンでは押しも押されもせぬ有力な政黨の一つになつてゐた。

前にも述べた如く、當時では大きな演說會といへば總てマルクス主義の政黨の演說會であつて、その他の政黨、特に國民主義を標榜する政黨で大きな演說會を開き得たものは我黨のほかに一つもなかつた。ミュンヒナー・キンドル・ケラーといへば優に五千人の聽衆を收容し得る會場であるが、我黨の演說會では、この會場が殆んどいつも滿員で、聽衆がはみ出しさうになつたことも屢々であつた。かやうな勢であつたから、大きな會場といふ會場は大抵借りて使つたが、たゞ一つ、ツィルクース・クローネだけは一度も借りたことがなかつた。あまり廣くて流石の我等も氣怯れがして手が出せなかつたのである。

一九二一年一月下旬、ドイツにとつてまたしても非常に慨かはしい事件がもち上つた。ドイツは既にバリー協定によつて一千億金馬克といふ途方もない賠

償を支拂ふことになつてゐたが、それが今度ロンドン協定で本極りとなり、愈〻實施せられることになつたのである。

これより先き、ミュンヘンでは、所謂民族主義團體の大同團結が行はれて聯盟が出來てゐた。ロンドン協定の成立を聽くと、この聯盟は諸團體共同の一大抗議運動を起すことになつた。ところが、時は切迫してゐるに拘らず運動の準備は遲々として進まず、一度定めたら直ぐ實行に移せばよいのに、何時までも愚圖々々してゐて一向に埒が明かない。自分は見てゐても懊れつたくてしやうがなかつた。初めはケーニヒスプラッツで大會を開くといふやうな話であつたが、赤の連中に毆り込みをやられるのが恐しさにこれは取止めになつた。次いで將軍會館前の廣場で開かうといふことになつたが、これも取止めになり、結局ミュンヒナー・キンドル・ケラーで合同大演說會を開くことになつたが、その間に時は一日一日と經ち、聯盟の中でも大きな政黨が、ロンドン協定といふこの恐るべき事件に對して一向に關心を示さなかつたため、開會の日取りはい

つまで經つても決らなかつた。

たまらなくなつた自分は、一九二一年二月一日の火曜日に聯盟に振ぢこんで、最後の決定を要求すると、水曜日に決定するといふ。然るに、水曜日になつてもやつぱり決らない。そこで自分はまた振ぢこんで、一體演說會を開くのかどうか、開くのなら何時開くのかと、膝詰めではつきりした返答を迫ると、その返答がまた責任逃れの甚だ曖昧なもので、聯盟では來週の水曜日に大會を催す『積りだ』といふのである。

自分はたうとう我慢が出來なくなつて、他の政黨と關係なく我黨單獨で抗議大會を斷行することに肚を決め、水曜日の午頃、廣告の文句を十分間で口述してタイプライターで打たせると共にツィルクース・クローネに人を遣つて翌日卽ち二月三日木曜日に會場として借り受けることに話をつけさせた。

これは當時にあつては向ふ見ずの大冒險であつた。ツィルクース・クローネは非常に廣い席場であるから、演說會を開いても聽衆で一ぱいになるかどうか

疑はしかつた。のみならず、反對の連中の毆り込みを喰ふ虞れもあつたのである。

我黨の警備團は當時既に人數が多くなつてゐたには違ひないが、こんなに會場が廣くてはとても手が廻りかねる。それ故、毆り込みを喰つた場合はどうしたら善いか、自分にも見當がつかなかつた。このやうな大きな會場の取締りは普通の會場の取締りよりもよほど骨が折れるであらうと思つてゐたのである。ところが、段々實地に當つてみるとこれがまるであべこべで、毆り込みの連中を取鎮めるのには狹い會場よりも廣い會場の方がよほど容易であることが分つた。

とにかく、開會して見るまでは心配であつた。失敗したら暫くは再び起ち上れないに決つてゐる。これだけは確かで間違ひはない。一度でも會場の取締りがつかなくて敵に思ふまゝに暴れられたら、我等の威信は一遍に地に墜ちてしまひ、それから後は、敵は圖にのつて我等の演說會と見れば必ず押しかけて暴

れるに違ひない。かうして潰されてばかりゐては、遂に演說會を開くことが出來なくなり、我等は悉く屏息せざるを得なくならう。かやうな狀態から再び立ち上るには何個月もかゝり、困難な鬪爭を經なければなるまい。

さて、ビラは出來たが、それを配つて廣告する時間がたつた一日、卽ち演說會の當日たる木曜日一日しかなかつた。その上、その日は折惡しく朝から雨であつた。これでも聽衆が來るだらうか。死人や怪我人の出で兼ねない演說會へ雨や雪を冒してまで出かけるよりも家で寢てゐた方が無事だと考へるのが普通ではあるまいか。かういつて心配する者があつたが、これは心配するのが當り前であつたかも知れない。

木曜日の午前になると自分もひどく不安になつて來た。果して會場は一ぱいになるだらうか。がら空きででもあらうものなら、自分は笑ひ物になつて、聯盟の連中に對して顏向けが出來なくなる。そこで、自分はまた大急ぎで別なビラの文句を黨員に口述し、直ぐに刷らせて午後に撒布させた。ビラは勿論一般

市民の來聽を勸誘したものである。

ビラの用意が出來ると、自分は二臺の自動貨車を傭ひ、車體を赤い布で包み、車上に黨旗を數本立て、一臺に十五六人から二十人の黨員を乘せ、懸命に街上を乘り廻して車上からビラをばら撒かせた。つまり、夕方の演說大會の宣傳をさせたのである。ミュンヘンの町では、それまで自動貨車に旗を立てたりなどして街上を乘り廻したものはマルクス主義者以外になかつた。それ故、車體を赤い布で包み、鈎十字の旗を飜へした自動貨車が町を走ると、一般の市民は吃驚したらしく、口をあけて見送るばかりであつたが、都心を離れた場末では、多數の勞働者がかんかんに怒つて拳固を振り上げてゐた。彼等から見れば、我等の自動貨車は『プロレタリアに對する新たなる挑戰』にほかならぬからである。自動貨車で乘り廻すのは、演說會を開くのと同じく、それまでマルクス主義者の特權とせられてゐて、他のものがそんなことをすると、マルクス主義者はそれを以て專賣の特權を有する彼等に對して挑戰するものと見做して

ゐたのである。(註4)

夕方の七時になつても會場ツィルクースの座席はまだ十分に塞がらなかつた。自分は十分毎に電話で會場の樣子を問ひ合せてゐたが、內心聊か不安であつた。他の會場では、七時か七時十五分には少くとも會場の半分は聽衆で埋まつてしまふのが普通で、殆んど滿員になつてゐたことも少くないのであるから、入りが惡いのを見ると不安にならざるを得なかつた。そのうちに、これは自分の考へ違ひであることが分つた。自分は會場の途方もなく廣いのを勘定に入れてゐなかつたのである。ホーフブロイハウスあたりでは千人も聽衆が來ればもう一ぱいで大入りであるが、ツィルクース・クローネでは千人やそこらの人間は何所に入つたか分らぬくらゐのものである。果せるかな、それから間もなく相次いで景氣の好い報告があり、八時十五分前には、會場の四分の三は聽衆で埋まり、なほ外には澤山の聽衆が切符賣場に詰めかけてゐるといふことであつた。そこで自分も會場へ車を飛ばした。

ッィルクースに着いたのは八時二分であつたが、會場の前にはまだ大勢の人間がたかつてゐた。一部の者は單なる好奇心からやつて來たものであらうが、群衆の間には我等の敵であつて場外で形勢を觀望してゐようとする連中も少からずゐた。

一年前にミュンヒナー・ホーフブロイハウスで最初の演說大會を催した時、自分は聽衆の多いのに嬉しくて嬉しくて堪らなかつたものであつたが、ッィルクース・クローネの大きな會場に足を踏み入れた自分は恰度その時と同じ喜びを感じた。それでも、人垣を押し分けて一段高くしつらへた演壇の所へ行くまでは、これほどまでに聽衆が詰めかけてゐようとは思はなかつた。大きな貝殼のやうな恰好をした廣い會場には、數千人の人間が鮨詰となり、馬場の所さへ人間で眞黑に埋められてゐた。賣れた入場券は五千六百枚を超えてゐたから、無料入場の失業者や貧乏學生や我黨の警備團の者をも合せて勘定すると、入場者はざつと六千五百人といふことになる。

演題は『興隆か沒落か』といふのであつた。自分は目のあたりに會場の景氣を眺めて、ドイツもまだ棄てたものでなく、ドイツの未來を暗示するものがここに集つてゐると思ひ、心の躍るのを禁じ得なかつた。

自分は演說を始めた。演說の時間は約二時間半ばかりであつたが、三十分も喋言つてゐるうちに、これなら占めた、今夜の會は必ず大成功だと思つた。自分と數千の聽衆との氣分がしつくり合つて來たのである。一時間も經つた頃には破れるやうな喝采が自然に聽衆の間に起り、それがだんだん激しくなつて演說も出來ぬほどであつた。二時間も經つと、今度は會場が水を打つたやうにしいんとして靜かになつた。その靜けさには何かしら非常に嚴肅なものがあつた。その後も自分はこの會場で屢〻かやうな氣分を味はつたことがあるが、當夜の聽衆も恐らくはよく覺えてゐることであらう。廣い會場は靜まりかへつて、聞ゆるものとてはたゞ聽衆の吐く息引く息の音ばかりであつた。やがて演說の最後の言葉が終ると、聽衆は俄かに熱狂して總立となり、聲を張りあげて

心ゆくばかり『ドイッチュランド』の歌を唱ひ出した。

やがて、大きな會場がだんだんと空になり始めた。聽衆は雪崩れを打つて中央の大きな出口から出て行つたが、すつかり出てしまふまでには二十分もかゝつたらうと思ふ。自分は場内に聽衆が一人もゐなくなつたのを見屆けてから、嬉しさに心も輕く會場を出て家に歸つた。

自分はこのミュンヘンのツィルクース・クローネに於ける最初の大會を寫眞に撮らせておいた。それを見れば、當夜の演說會の盛大な有樣が千言萬語に聽くよりもよく分る。ブルジョアの新聞はこの演說會の寫眞を載せ、記事も書いたが、たゞ『國民主義』の演說會であつたと言ふだけで、いつもの通り愼ましく控へて何所の主催とも言はなかつた。

この演說大會を契機として、我が國民社會主義ドイッ勞働黨は有りふれた小黨の群を拔き、一躍して押しも押されもせぬ大政黨になつた。何人と雖も最早や我黨を無視することは出來なくなつた。ツィルクース・クローネの大會はか

くの如き成功を收めたのである。それでも、惡くすると、ツィルクース・クローネの成功は紛れ當りに過ぎないといふものが出て來るかも知れない。それを防ぐために、自分は直ぐ次の週も同じツィルクースで二度目の演說會を開くことに肚を決めた。開いてみるとこれがまた成功で、廣い會場は破れんばかりの大入滿員であつた。そこで、自分は、次の週も同じ所で同じ演說會を開いてみた。すると、この三度目では、ツィルクースの廣い會場は下から上まで鮨詰の人で身動きもならぬほどであつた。

一九二一年には、自分は右の如き成功を收めた大會を手始めとして、益〻演說會に力を注ぎ、ミュンヘン市內で度々これを開いた。一週に一回どころか、二回も大會を開いたことがあり、夏から秋へかけては、一週間に三回も開いたことさへ度々であつた。その頃では會場はいつも定つてツィルクース・クローネであつたが、我黨の大會といへば、ツィルクース・クローネは何時も必ず大入滿員で、我等としては頗る愉快であつた。

かうなると我黨に贊成し共鳴する者は增加する一方で、黨員も激增するばかりであつた。

卐

我黨の演說會がかやうな成功を收めるにつれて、敵の連中が不安を感じだしたのは無理もないことである。彼等はこれまで、或る時は暴力、或る時は默殺と、手をかへ品をかへ、どうにかして我黨の發展を阻止しようとして來たのであるが、どうしてもいかぬと見るや、今度は愈〻眞劍に暴力を使つて我黨に二度と演說會を開くことが出來ぬやうにしてやらうと肚を決めるに至つた。

當時、社會民主黨の代議士でエルハルト・アウエルなるものが暴漢に襲はれたといふ頗る奇怪な事件があつた。敵の方ではこれを口實にして暴行を企んだのである。社會民主黨側の發表では、エルハルト・アウエルは社會民主黨の領袖であつて、或る晩數名の暴漢に狙擊されて負傷したといふのであるが、さう

でなく、暴漢に襲はれかけたといふのが本當らしい。話では、アウエルは『世にも稀れな沈着剛毅の男』であつたらしく、無法な襲擊を受けても負けてゐず、却つて暴漢どもを手酷ひ目に逢はせて追ひ散らしたのださうで、暴漢も遁げ足が速くて、警官の來る前に遠くへ逃げてしまひ、何の手掛りをも殘さなかつたため今にその犯人が分らぬといふのである。實に奇怪な事件であるが、ミュンヘンの社會民主黨の機關新聞はこれを種にして、恰もその犯人が我黨の黨員であつたかの如く書き立てて大衆を煽動すると共に、例によつて例の如くお喋言りを愼むことが出來ず、國民社會主義の連中は危險だから、まだ勢力を加へぬ間にプロレタリアの拳骨で叩き潰すべきだ、などといつて彼等の企んでゐることをほのめかした。

こんなことを新聞に書き立てて置いてから二三日すると、彼等は實際に毆り込みをやつた。

我黨では、其の日にミュンヒナー・ホーフブロイハウスの大廣間で演說會を

催し、自分が演説することになつてゐたが、敵の方ではこれを狙ひ、會場に亂入して我黨を一擧に徹底的に叩き潰さうと企てたのである。

それは一九二一年十一月四日のことであつた。午後六時から七時の間であつたと思ふが、敵の方では我黨の演説會を是非とも叩き潰す積りで、あちらこちらの赤色工場から澤山の職工を狩り集めて會場へ押しかけようとしてゐるといふ確報が初めて自分の所に屆いた。

この報告がもつと早く自分の耳に入ればよかつたのであるが、折惡しく恰度その日に我等はミュンヘンのシュテルンエック小路の神聖な舊事務所から新事務所へ引越しをした。否、實は舊事務所を引き拂つただけで、新事務所の方はまだ内部の手入れが濟んでゐなくて、はいれなかつたのである。電話も舊事務所のを外したまゝで、新事務所にはまだ取り附けてなかつた。そこで、當日、黨員が毆り込みのことを知らせようとして外から何度も電話をかけたが通じなかつたといふわけである。

報告を受けたのが遲かつたため、此方では警備團員を召集する時間がなく、會場の警備は甚だ手薄にならざるを得なかつた。居合せた警備團としては百人組が一つだけで、それも人數は揃つてゐず、僅かに四十六人であつた。それに、警報機關もこの當時にはまだ備はつてゐず、夜だらうが、何時だらうが、素破といふ場合に一時間のうちに十分の加勢を呼び集めるといふやうなことは出來ない相談であつた。のみならず、毆り込みの噂話はこれまでにも何度か傳はつて來たが、その都度格別のこともなかつたため、今度も聊か高を括つてゐた。昔から『前觸れのあつた革命で實際に起きた例がない』といふが、毆り込みの噂話もこれまでは何時も噂話ばかりに止まつてゐたのである。

毆り込みが本當に行はれるものと知つたら、此方も當日拔かりなく萬端の準備を整へる筈であつた。それを爲さなかつたのは、やはり、噂話をたゞ噂話と聞き流して、深く氣に留めてゐなかつたからである。

それから、また、我等の方では、ミュンヒナー・ホーフブロイハウスの大廣

間は毆り込みには最も都合の良くない場所だと思つてゐた。これも我等の方で油斷した一つの原因であらう。毆り込みには大きな場所ほど便利であるから、大きな會場特にツィルクース・クローネでは我等の方でも常に用心してゐた。併し、この貴重な教訓によつてこの考へ方の必ずしも當を得たものでないことが分り、後に我等はこれを科學的に（敢て言ふが、科學的に）研究して色々な結論を得るに至つた。その中には、それまで我等の思ひも及ばなかつたこともあれば、面白いこともある。後日、我黨の突擊隊は組織や戰法に就いて色々工夫を加へられたが、それも皆この研究の結果に基づいてゐるのである。

扨て、自分がホーフブロイハウスの控室に着いたのは七時四十五分であつたが、敵の方に不穩な目論見のあることは最早や疑ふ餘地がなかつた。會場は既に滿員で、外では警官が群衆を制止してゐた。敵の連中は早くからやつて來たと見えて、場内に陣取つてゐたが、味方の連中はまだ大部分外にゐて場内に入れないといふ有樣である。小人數の突擊隊は控室で自分を待つてゐた。自分は

控室と大廣間との間の扉を閉めさせ、四十五六人もゐたかと思はれる隊員を身のまはりに集めて次のやうな訓示を與へた。今日こそ君等が死を賭して黨のために忠誠を盡すべき日だ。死骸となつて運び出されるまでは何人もこの會場を去つてはならぬ。自分も斷じて去らぬ積りだ。君等の中にはこの自分を捨てて場外に逃げ出す者は一人もゐないと思ふが、若し卑怯な振舞をする者があつたら、他人の手を借りるまでもなく、この自分が手づから其奴の腕章を剝ぎ取り、徽章をもぎ取るからさう思へ。若し、少しでも敵の奴等の騷ぎさうな氣配が見えたら直ちに飛んで行つてやつつけろ。攻擊は最善の防禦だといふことを忘れるなよ、よいか。

隊員はこれに對して萬歲を三唱したが、その聲はいつものそれよりも荒々しくて、かすれてゐた。

それから、自分は會場に入つて場內を見廻した。敵の連中は場內にぎつしり詰つて、壇上の自分を穴のあくほど見つめてゐた。自分をさも憎らしさうに睨

みつけてゐる者も澤山にゐた。さうかと思ふと、顏をしかめ、輕蔑の色を現して、言葉は違ふが意味は同じな彌次を飛ばす者も澤山にゐた。今日こそはやつつけるぞ、とか、土手っ腹に氣をつけろ、とか、舌の根を止めてやるぞ、とか彼等は多勢を恃んで勝手放題の惡罵をぶちまけてゐた。

それでも會を開くことは出來た。自分は演說を始めた。ホーフブロイハウスで演說をする時には、自分はいつも會場の正面でなく横側に立ち、ビールの卓子を演壇にすることにしてゐた。かうすると、自分はまるで聽衆に取りまかれたやうな恰好になる。そのせゐかも知れぬが、ホーフブロイハウスで演說會を開くと、他の會場では味はれぬ氣分が釀し出されて來たものであつた。

その夜もいつもの場所で演說を始めたのであるが、自分の前、特に左前の方に、立つたり坐つたりして控へてゐるのは敵の連中ばかりであつた。何れも腕つ節の强い荒くれ者ばかりで、大部分はマッファイ工場、クステルマン工場、イザリア工場などの職工であつたが、左手の壁に沿つて演壇の下まで詰めか

け、頻りにビールを取り寄せては飲みほし、空になつたジョッキを卓子の下に忍ばせてゐた。喧嘩の用意に大きなジョッキを集めてゐるのである。物騒千萬な話で、自分はこれで今夜の演說會が無事に濟んだらそれこそ奇蹟だと思つた。

彌次られながら凡そ一時間半も喋言ると、場內はどうやら靜かになつて演說に耳を傾けかけ、うまく行きさうになつて來た。暴力團の主だつた連中もそれを悟つたらしく、次第にそわそわしだした。席を立つて外へ出て行つたかと思ふと、また歸つて來たり、目に見えて神經質になつて、部下の職工に何やら囁いたりしてゐた。

その時、止せば善かつたのであるが、或る彌次に應酬するのにちよつとした過を冒して對手の心を刺戟するやうなことを言つてしまつた。餘計なことを言つたと氣がついた時はもう遲かつた。自分の冒した過がそのまゝ亂鬪の合圖になつたのである。

二三の怒號罵聲が聞えたと思ふと、突然一人の男が椅子の上に突つ立つて場

内の連中へ『自由』"Freiheit" とどなつた。すると所謂自由の闘士がこれを合圖に暴れだしたのである。

場内は忽ち修羅の巷になつた。咆える、がなる。頭の上では榴彈のやうに無數のジョッキが飛ぶ。椅子の足の折れる音、ジョッキの壞れる音、怒號、罵聲、叫喚。全く天地がひつくりかへつたやうな騒動であつた。

自分は演壇に立つたまゝ動かず、突擊隊の若者が遺憾なくその義務を果す有樣をじつと眺めてゐた。

自分はこれが既成政黨の演說會であつたらどうであらうと思つた。これほどの騒動も見ないで簡單に叩き潰されたに違ひなからうと思つた。

我黨の警備團はこの日から突擊隊と呼ばれることになつたが、勞働者の亂暴が始まると直ぐまつしぐらに突進して行つた。八人乃至十人宛一かたまりになつて狼の如く敵に襲ひかゝり、次第に敵を場外に叩き出したが、五分も經つた頃には、隊員は一人として血みどろになつてゐない者はなかつた。この時に初

めて自分の見直した人間が澤山にゐる。先頭に立つて働いてゐたのが勇敢なるモーリス、今日自分の祕書をしてゐるヘスなどで、その他の隊員も痛手に屈せず、腰の立つ限り倒れては起き、倒れては起きして、ぶつかつて行つた。地獄の騷動は二十分も續いた。敵は七八百人もゐたやうであつたが、五十人にも足らぬ突擊隊と太刀打ちが出來ず、大部分は場外に叩き出され、階段を轉がり落ちてしまつたが、左側の奥まつた所に陣取つてゐた一かたまりの連中だけがなほも踏み留つて必死の抵抗を續けてゐた。恰度その時であつた。不意に會場の入口から演壇へ向けて二發、短銃を打つたものがあつた。その一發は恐しい音を立てて炸裂したが、こんなことに驚く我等ではなかつた。戰場を往來したことのある我等は彈丸の音を聞くとその昔を思ひ出して却つて心の躍るのを覺えたのである。

誰が短銃をうつたのか遂に分らなかつたが、彈丸の音がしてから、血みどろな隊員の勇氣が百倍したことは確かで、頑强に抵抗してゐた連中も遂に叩きの

めされて場外に遁げ出さざるを得なくなつた。

騒動は凡そ二十五分も續いたであらう。濟んだ後の會場はまるで砲彈でも打ち込まれたやうに狼藉を極めてゐた。味方にも繃帶を施して貰つた者が澤山にゐた。中には車でなければ動かせぬほど酷い傷を受けてゐた者もあつたが、兎に角、我等はかうして亂暴者を悉く追ひ出して、會場を我等の手中に確保することが出來たのである。やがて當夜の司會者ヘルマン・エッサーが起つて『これから演說會を續行します、辯士は演說をつゞけて下さい』と言つた。自分は再び口を開いた。

やがて、演說會も終つて、皆が歸途に就かうとしてゐると、一人の警官が亢奮しながら會場へ驅け込んで來て、腕を振り振り『解散、解散』と怒鳴つた。

自分は思はず噴き出した。演說も喧嘩ももう夙くに濟んでゐるのである。全く警官らしい威張り方で、滑稽であるが、畢竟は小人なるが故に威張つて偉く見せたがるのである。

その晩、我等は色々のことを學んで得る所が多かつたが、敵の方でも學ぶ所が少からずあつた。敵の方では當夜の教訓を長く忘れなかつたやうである。少くともこの時以來一九二三年の秋までは「ミュンヒナー・ポスト」紙もプロレタリアの拳骨などをほのめかさぬやうになつた。

註1　初版には『ドイツ國民黨の演說會にも行けば、バイエルン』がない。こゝには新版に據つて譯出しておいた。（譯者）

註2　新版には『二つの』がない。（譯者）

註3　白青はバイエルンの旗の色、黑白はプロイセンの旗の色。（譯者）

註4　新版には『特權とせられてゐて、他のものが』から『見做してゐたのである』までが單に『特權とせられてゐたのである』となつてゐる。（譯者）

第八章　強い者は獨りでゐる時が最も強い

前章でドイツ民族主義を標榜する諸團體の大同團結たる聯盟のことを述べたが、本章ではこの聯盟の問題に就いて極く簡單に述べておきたい。

元來聯盟といふものは、色々な團體が仕事の便宜上相提携し、相當權威ある本部を設け、その指揮の下に相協力して共通のことを行ふ大同團結のことであつて、また、この色々な團體とは、目的に於ても、目的達成の方法に於ても、互に餘り遠くかけ離れてゐない協會とか、組合とか、或は政黨をいふのである。また、實際に世間ではさう思つてゐる。そこで迂闊な連中は、かやうな團體が遂に『相通ずるもの』を發見し『相容れざるものを却け』て『大同團結』を行つたと聞くと滿足もし、安心もするものである。これは、互に分れてをれば弱い小さな團體でも、集つて一所になれば非常に強くなつて俄かに大きな勢力を

得るといふ考へが一般に行はれてゐるからであるが、これが抑〻大きな間違ひである。

主張を同じくし、目的を同じくするのにどうして色々な團體や協會などが出來るのか。この點を明かにすることは、面白くもあり、また聯盟の問題を理解する上に大切であると思ふから、先づこれに就いて述べるが、理窟からいへば、主義が一つなら、そのために戰ふ團體も一つあれば澤山で、同じ目的のために何も多數の團體を造る必要はない筈である。その目的にしても、主義にしても、最初は確かに一つの團體が眼を著けたものに違ひない。一人の人物が何所かで何らかの眞理を宣べ、何らかの問題の解決を要望し、目的を定め、目的達成の手段たる運動を起す。かくして、或は現在の社會の惡弊を除き、或は特殊の狀態を將來の社會に造り出すことを政綱とする政黨とか協會とかいふものが一つ出來あがるのである。

從つて、かうして出來た運動の掲げてゐる政綱には優先權がある。それ故、

主義目的が同じであつたら、別に黨を立てないで既に存在してゐる運動に參加すべきで、その方が運動の勢力を增し、共通の目的を達成するに都合が善いのである。これは更めて言ふまでもないことで、少し頭の働く人間なら、從來から存在する運動に加入することが共同の闘爭に本當の勝利をもたらす所以であることが分る筈である。目的が一つなら運動も一つでなくてはならぬといふのが物の道理で、それが分つてゐながら別に黨を樹てるのは、後にも述べる通り、實は人間が全く正直でないからである。

主義政綱を同じくしてゐながら別々に黨派を樹ててゐるのには二つの原因がある。一つは人間の悲劇的運命とも謂ふべきものであり、一つは甚だ悲慘なもの、人間の弱點に基づくものである。併し、この二つの原因の中にもその根柢には人間の淘汰を促すものが潜んでゐる。黨を立てて爭へば慾が競り合ひ、意力と意力とが戰ひ、弱き者が倒れて强き者が倍〻强くなり、それが遂に政綱を實現して理想を成就することになる。

扨て、目的はたゞ一つしかないのに、目的の達成に當る團體が一つで濟まず、澤山に出て來るのには、今言つた如く二つの原因があるが、その中、人間の悲劇とも謂ふべき原因とはどんなことかといふと、それはかうである。凡そ古來の大事業なるものは、幾百萬の人間が心中に抱いてゐた希望を成就したものであり、幾百萬の人間が密かに懷いてゐた憧憬を實現したものである。素より、人間の希望の中には、幾百年に亙つて堪へ難き現狀に喘ぎつゝ、その打開に憧れつゞけてゐて、而もなほ成就し得ないものもあるのである。併し、かやうな窮狀から何時までも脫却するを得ず、その希望を遂に實現するを得ない國民は畢竟爲すなきの國民である。苟も元氣にして有爲なる國民ならば、例へば外國の壓制を受けたり、國內が非常に窮乏したり、或は國民の精神が不安動搖したりすると、天は必ず偉人を降して外患を除き、內憂を拂ひ、國民の精神を安きに鎭め、國民を率ゐて遂にその志望を成就せしむるものである。

所謂時事問題なるものが生じると、先づ、我こそは時局解決の選手なりと名

乘るものが一人や二人でなく何千人も現れて來る。さうすると、この雲の如く輩出した使徒の間に激しい競爭が行はれ、强い者、有爲なる者が遂に勝を占めて最後まで殘り、時局解決の任に當ることになる。こゝにも自然の淘汰が行はれるのである。

宗教界の改革運動でも同じことである。人々が宗教界の現狀にあきたらず、何十年も何百年も何らかの革新を求め續けてゐると、この魂の要求に驅られて、我こそ宗教の窮厄を救ふ使徒なりと名乘るものが何十人も何百人も輩出し、或る者は豫言者を以て自ら任じ、或る者は專ら在來の宗教を攻擊し、銘々思ひ思ひに各自の見識や知識を基にして活動するやうになる。

併し、優勝劣敗は自然の法則であるから、斯く多數の使徒が輩出しても、宗教改革の大使命を果し得る者はその中の最も優れたる者である。たゞ誰が本當にその人であるかといふことはなかなか分らない。誰もが我こそ改革の大使命を果すものなりと思つてゐて、互に執つて讓らぬから、誰が萬人の支持すべき

本當の豫言者であるのか、暫くはその見分けがつかなくなつて來る。

かくの如くにして、宗教の方面でも、或は政治の方面でも、何百年かの間に、否、どうかすると同じ時代に、色々の人間が出現して色々の運動を起すに至るのであるが、その目的なるものは、少くとも主張の上では何れも同じである。少くとも大衆から見れば同じである。大衆自身は心中に漠然とした希望を抱き、主義を持つてゐるが、主義の本質も分らなければ、希望の內容も分らず、また、その希望も果して實現し得るものか否かすら一般には分らない。さういふ希望や主義を取り上げて運動を起すのであるから、目的は同じでも運動は數途に岐れざるを得ない道理である。

目的を同じくしながら色々な人間が夫々別々の道を歩む所に人間の悲劇がある。互ひに聯絡もなく、たゞ我こそ使命を果すべき使徒なりと信じ、他人の道には頓着しないで只管に己の選んだ道を行かうとする所に悲劇があるのである。

一般の原則としては、成功を確實に且つ迅速に收める方法は力を分けずに一個所に集めるにあるに拘らず、右の如く政治方面でも、宗教方面でも、時代の要求から色々な黨派や團體が生れて、それが目的を同じくしながら夫々別々に活動するのは一見確かに悲しむべきことである。併し、よく考へると必ずしもさうではない。畢竟はこれも天意であつて、色々な團體を互に競爭させ、最も正しく、最も近く、又最も確かな道を選んだ者に勝利を得させようとする假借なき攝理がこゝに働いてゐるのである。

似たり寄つたりの政黨や宗派が澤山に現れて來ると、何れが本當に優れたものであるか、それを專ら外から判別することは困難である。高の知れた人間の言ふことを聞いてゐただけでは何れが眞物で何れが僞物か識別がつきかねる。それを見分けるには、思ふまゝに競爭させて勝つた者を優者と定める外に方法はない。優者なればこそ勝つことが出來たのであつて、勝つたといふ事實は取りも直さず優者の優者たる紛れもなき證據である。

かやうに考へれば、目的を同じくしながら色々の團體が夫々別々に活動するといふことも悲しむには當らない。己等と同じ目的を追ふものが他にもあると悟れば、如何なる團體も怠けてはをられず、目的達成の方法に工夫を凝らし、力を極めて互に敗けまいと努めるやうになる。

この競爭が卽ち自然淘汰であつて、これに勝ち殘つたものが優者である。凡そ人類の進步は過去に於ける色々な失敗の敎訓に負ふ所が多いもので、色々の團體が現れるといふこともこの點から見れば人類の進步に寄與してゐるのである。

それ故、同じ宗敎或は同じ系統の政治運動の內に色々の異つた宗派や黨派が出來て、そのために宗敎や政治運動が暫く分裂するに至るのは一見悲しむべきことのやうであるが、故意の作爲によるものでなければこれは却つて革新運動を促進する最善の方法であるともいへる。

これを歷史に就いて見れば、曾てドイツの統一といふ問題を繞つてオースト

リアとプロイセンとが對立したことがある。統一の方法としては二つしかなく、その一つを代表したのがハップスブルグ家で、他の一つを代表したのがホーヘンツォルレルン家であつた。當時、世間では、兩家は確執を止めて須く互に協力すべきであると考へてゐた。この考へ方は間違ひであるが、假りに兩家が互に協力したとしても、結局はやはり有力であつた方にドイツの統一を委せることになつたに違ひなく、若し、野望を抱いてゐたオーストリアが統一の業にあたつたとすれば、ドイツ帝國なるものは果して建設されたかどうか分つたものではない。

普墺戰爭はドイツの統一を願ふ幾百萬のドイツ人をして血涙を流さしめたものである。彼等はこの戰爭を以て骨肉相食み血で血を洗ふ悲慘な戰爭として慨歎した。併し、ドイツの統一が本當に强固に出來たのはこの普墺戰爭のお蔭であつた。ドイツの帝冠は本當はケーニヒグレッツの戰場で得たものであつて、後世短見者流の考へるに至つたやうにパリ郊外の戰爭で得たものではな

い。

かくの如く、ドイツ帝國も亦希望を同じくするプロイセンとオーストリアとの協力によつて出來たものでなく、兩國が或は意識し或は意識せずして行つた爭覇の結果出現したものである。プロイセンがこの競爭で遂に勝を占めてドイツ帝國を建設したのである。競爭角逐は自然の攝理、生きた眞の知慧であつて、現實を嚴然と現實たらしめてゐる鐵則である。人間の知慧は自然の攝理に及ばず、その爲す所は自然の爲す所に劣る。先入の偏見に囚はれて眞實の前に眼を閉ぢる者ならいざ知らず、虛心坦懷の者なら何人と雖もこの事實を認めざるを得ない筈である。誰か二百年前のドイツに於て、他日ドイツ統一の偉業を成就し、ドイツ帝國を建設し指導するに至るものがホーヘンツォルレルン家の支配するプロイセンであつて、ハップスブルグ家の支配するオーストリアでないといふことを豫想し得たものがあらうか。また、誰か今日に於て、敢て自然の攝理を疑ひ、腐敗墮落せるハップスブルグ家によつて統一せられたドイツ帝

國の方がホーヘンツォルレルン家によつて統一せられたドイツ帝國よりも立派であつたかも知れぬと考へ得るものがあらうか。

有るまい。プロイセンとオーストリアとの爭覇は數百年に亙つたが、覇權は遂にプロイセンに歸した。自然が優者に優位を與へたのである。

優勝劣敗は自然の法則であり、過去に於て然りしが如く現在に於ても然り、明日に於ても亦然りで、永久に不變である。

かく考へれば、同じ目標を目がけて澤山の人間が競爭をするのは何も惡いことではない。誰が一番强く、誰が一番速いかを知るには、競爭をさせて見るに越したことはなく、競爭では最も强い者、最も速い者が勝つに決つてゐる。

主義主張を同じくしながら色々な黨派が出來て國内で對立するに至るのにはなほ一つ原因がある。この第二の原因は單に人間の悲劇といつてよいばかりでなく、寧ろ甚だ悲慘なもので、その基くところは人間の弱點にある。卽ち人間の猜疑と嫉妬と泥棒根性とにある。殘念ながら人間の中にはこれらの性質を兼

ね備へてゐる者が多い。

例へば、こゝに一人の人物がある。深く國民の艱難を憂ひ、禍因を究めてその芟除を志し、根本の對策を定めてその實行に乘り出したとする。初めの間は誰も氣にも留めないが、この志士の仕事が漸く世間の注意を惹くやうになると、斗筲の輩が忽ち眼をむいで、もう、一擧手一投足をも見逃さない。雀といふ奴はあれでなかなか狡い所があつて、仲間の雀が運よく麵麭屑を見つけて食つてゐると、氣にも留めない風を裝ひながら實は油斷なく氣を配り、隙を見て不意に横合ひから攫つて行つてしまふ。人間の世界にもかやうな雀に似た人間がゐる。誰かが新しい道を歩き出すと、澤山の懶け者がはつと初めて氣がついて、先づ鼻をぴくつかせる。この新しい道を行けば何か御馳走があるかも知れない。確かに何かあると分ると、彼等は初めて本氣になり、成る可く近路を取つて己一人御馳走にあづからうと、銘々別々の道を走り出すのである。

かやうな人間は、誰かが新しい運動を起し、綱領をも定めたのを見ると、忽

ち頭を擡げて來て、我等の主張も同じだと言ひだす。そんなら、正直に新しい運動に加入してその優先權を認めるかといふと、さうでなく、彼等は新しい運動の綱領をそのまゝ盜んで、それを基にして新黨を組織するのである。それはまだよいとして、彼等は綱領に掲げてある主張の本家が彼等であるかの如く吹聽する。圖々しいとも何とも言ひやうがないが、世間は淺墓なもので、なかにはそれをそのまゝ信用する者もあり、唾棄すべき者が却つて好評を博したことも少くない。既に他黨で掲げてゐる旗印を己等の旗印とし、既に他黨の政綱となつてゐるものを盜んで來て新黨を組織し、旗印も政綱も總て己等の創意に出づるものであるかの如く吹聽するに至つては厚顏無恥も甚だしいではないか。それにも拘らず、他黨の勢力が日に增し大を加へて、己等の黨勢が振はず、とても追ひつけさうもないと分ると、彼等はきまつて大同團結だの、共同戰線だのと言つて騷ぎ出す。最初に無用の新黨を作つて戰線の分裂を來さしめたものが彼等であつたことを思へば、厚顏無恥も極れりといふべきではないか。

所謂『民族主義戰線の分裂』も斗筲の輩が無用の新黨を作つたからであつた。

尤も、一九一八年から一九一九年にかけて、所謂民族主義を標榜する團體や政黨が續々出現したのは內外の狀勢がこれを然らしめたものであつて、必ずしも設立者の私意によつたものではない。我が國民社會主義ドイツ勞働黨も當時に出來たもので、既に一九二〇年には早くも頭角を現して次第に押しも押されもせぬ强力な政黨になつたが、それは、一つは、當時續出した色々な政黨の首領の間に非常に正直な人物が少からずゐて、自黨の前途に望みの少いのを悟ると、望みの多い國民社會主義ドイツ勞働黨のために思ひ切りよく自黨を解散し、或は國民社會主義ドイツ勞働黨へ無條件に合流したからである。これなどは當時の政黨の設立者が必ずしも私意を挾んでゐなかつた證據である。

當時、ニュルンベルグにドイツ社會黨なるものがあつて、その首領はユリウス・シュトライヘルといふ人物であつたが、この人が先づ國民社會主義ドイツ

勞働黨へ飛び込んで來た。國民社會主義ドイツ勞働黨とドイツ社會黨とは主義主張を同じくしてゐたが、出來たのは別々であつた。ユリウス・シュトライヘルは當時ニュルンベルグで教師をしてゐた。彼も初めは自分で造つたドイツ社會黨の使命を信じてこれを守り育てる積りでゐたが、國民社會主義ドイツ勞働黨の方が勢力も强く、生長も目ざましいと知ると、直ちにドイツ社會黨やこれを支持する勞働團體のために働くことを止め、黨員を說き伏せ、これを率ゐて、競爭に打ち勝つた國民社會主義ドイツ勞働黨に加入し、爾來共同の目的のために戰つた。これは洵に立派な決心であつたが、このことたるや普通の人間には言ふべくしてなかなか容易には出來ない藝當である。

我黨と殆んど時を同じくして出現した政黨で我黨に合流しなかつたものは殆んど一つもない。當時政黨を創立した人々は、その志に於て誠實で、公明正大であつたから、その爲す所も誠實で、公明正大に終つたのである。それ故、我等と主張を同じくした者の間には分裂なるものは爾來存在しない。今日の所謂

『民族主義戰線の分裂』なるものは總て上に述べた第二の原因に基くもので、卽ち野心家が野心を遂げようとして自黨を固持したから生じたのである。彼等は元來主義も主張もない連中であつて、たゞ國民社會主義ドイッ勞働黨がどうやら成功しさうになつて來たのを見ると忽ち『天職』を感じただけである。

そこで、彼等は俄かに新黨を造つたが、その政綱なるものは我等の政綱をそのまゝ寫し取つたものである。彼等の主張する理想は我等から盜んだものであり、彼等の目標は我等が既に何年も追及して來た政治目標である。そして、彼等の選んだ道は國民社會主義ドイッ勞働黨が既に久しく歩んで來た道である。政綱も理想も目標も方途も總て我等のものと同じであれば、何も新黨を作る必要はなく、國民社會主義ドイッ勞働黨といふものが夙くに出來てゐるのであるから、それに參加すればよい筈であるが、彼等は合流せず、却つて新黨樹立の已むを得ざる所以を說明し、高尙な動機を吹聽しようとして中味の空つぽな美辭麗句を並べ立てる。

本當は設立者自身の虚榮以外に何の理由もないのである。彼等は一役買つて出て世間からやんやと持て囃されたいのであるが、元來が斗筲の小人であつて、頭も腕もなく、持つて生れたものは恥を知らぬ厚かましさだけであるから、他人の思想を横取りして自分のもののやうに裝ふのである。普通の世間ではこんな厚かましいことをするのを泥棒といつてゐる。

彼等は謂はば政治泥棒であつて、他人の思想だらうが、理想だらうが、商賣になると見たら忽ち横取りして自分の店先へ並べてしまふ連中である。また、實際に彼等は當時こんなことをした。然るに、その彼等が今になつて泣き顔をしながら『民族主義戰線の分裂』を慨き『統一の必要』を叫んで止まないのは、これほど叫ぶのを聞けば、如何なる政黨でも知らぬ顔はしてゐられなくなつて仲間に入るに違ひなく、仲間になつたら隙を見てその黨をも盗んでやらう、といふ下心があるからである。要するに、我等を欺き、我等の理想を盗んだ上になほ理想實現のために我等の造つた國民社會主義ドイツ勞働黨をも横取りしよ

うといふのである。

頭の惡い商賣人は、商賣が旨くゆかなくて目論見通り儲からぬと、品物の値を落して安く賣り、それでもいけないと所謂企業合同を企てる。國民社會主義ドイツ勞働黨の乘つ取りを策して失敗した彼等は、ひとまづ彼等の仲間だけで聯盟を組織するに至つた。

當時、この聯盟に加入したのは、何れも獨り立ちの出來ない跛者のやうなものみであつた。跛者も八人寄れば一人の劍士に當れるとでも考へたのであらう。

八人の跛者の中に一人でも足腰の立つ者があるとしても、劍士に立ち向ふなどは思ひも寄らず、仲間の跛者を援け起すだけで手一ぱいで、結局、自身は益〻自由がきかなくなるであらう。

所謂聯盟は黨人の駈引と見るべきもので、聯盟のことを考へる場合には常に次の如き根本原則を忘れぬやうにしなければならぬ。

多くの政黨が大同團結を行つた場合に、弱い政黨はこの團結によつて強くなるかといふと決して強くならぬが、強い政黨はこの團結によつて却つて弱くなる虞れが多分にある。弱いものでも集れば強くなるといふのは間違つた考へ方である。何となれば、形式や種類の如何を問はず、多數決主義は常に愚昧と卑怯との代名詞である。雜多な團體の寄合世帶が各團體の推薦した多數の幹部によつて左右せられては卑怯無力の存在に墮せざるを得ない。また、大同團結を行つて色々な政黨が一所になつてしまへば、政黨間の競爭が止んで、最も優れた者を擇び出す淘汰が行はれず、強い者、健全なる者が最後の勝利を占める機會が永久になくなる。それ故、政黨の大同團結などは自然の法則に反するものといふべきで、大概の場合革新運動の邪魔にはなつても助けにはならない。

問題によつては、政黨の首腦部が黨の將來を考へて權道を取り、同じ系統の他黨と一時提携し或は共同動作に出ることもあり得る。併し、それは何所までも一時の權道であるから必要がなくなつたら直ちに手を切るべく、何時までも

提携を續けるといふやうなことがあつてはならぬ。さもなくて、何時までも手を繋いでゐると、黨の方で救世濟民の使命を斷念せざるを得ざるに至り、自然の法則に從つて自力を思ふ存分に發揮し、競爭に打ちかつて所期の目的を成就するといふことが出來なくなる。

凡そ古今の大事業にして合同の力によつて出來たものはなく、一つとして獨立獨行者の力に依らざるはない。合せものは離れものである。合同は初めから分裂の萠芽を包藏する。否、合同の力で成し遂げた所をさへ何時かは失はざるを得ないのである。眞に偉大なる精神的革命は各黨各派の決戰によつて行はれるのであつて、聯合の力で出來た例はない。

民族主義の國家にしてもやはりさうである。民族主義の國家は民族主義聯盟といふ寄合世帶を張つてゐる連中の妥協によつて出來るものでなく、例へば國民社會主義ドイツ勞働黨のやうに何所までも妥協を排し、他黨と戰つて獨り驀進する政黨の鋼鐵の如き意志に俟たなければならない。

昭和十九年四月二十日印刷
昭和十九年四月二十五日發行　　初版五〇〇部

東京都神田區駿河臺二丁目一番地ノ一
東亞研究所
編輯兼發行者　伊藤斌

東京都神田區美土代町十六番地
印刷者　高木外史

東京都神田區美土代町十六番地
印刷所　(東東三五)　株式會社　三秀舍

東京都神田區駿河臺二丁目一番地ノ一
發行所　東亞研究所